

# 流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書 8

— 流山市市野谷宮後遺跡（北側）・三輪野山野馬土手・  
市野谷芋久保遺跡（14）（縄文時代以降編） —

令和5年3月

千葉県教育委員会

# 流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書 8

ながれやま し いち の や みやうしき  
— 流山市野谷宮後遺跡(北側)・三輪野山野馬土手・  
いち の や いもくほ  
市野谷芋久保遺跡(14)(縄文時代以降編) —





## 序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第44集として、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴って実施した、流山市市野谷宮後遺跡（北側）・三輪野山野馬土手・市野谷芋久保遺跡（14）（縄文時代以降編）の発掘調査報告書です。

これまでに行われた調査では、古墳時代と奈良時代の竪穴住居跡群、中・近世の大規模な土坑群や野馬土手など、地域の歴史を知る上で貴重な成果を数多く得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和5年3月

千葉県教育庁教育振興部  
文化財課長 金井 一喜



## 凡　例

1 本書は、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

市野谷宮後遺跡（北側）　流山市市野谷字宮後206-13ほか　（遺跡コード220-025）

三輪野山野馬土手　流山市市野谷字宮後203-1ほか　（遺跡コード220-025）

市野谷芋久保遺跡（14）　流山市市野谷字芋久保204-7　（遺跡コード220-021）

なお、本文中にも記しているが、本報告書では市野谷宮後遺跡の中央部を東西に走る道路で仕切られた北側地区を報告しており、調査地点では第1次調査地点（以下調査地点を（1）と略記）・（5）・（6）の一部・（7）の一部・（9）・（10）の各地点の調査成果を収録している。また、三輪野山野馬土手は、（6）において調査を実施している。市野谷芋久保遺跡については、独立行政法人都市再生機構（UR）による流山新市街地地区土地区画整理事業地内において大半の調査を実施しており、本事業地内に入っているわずかな面積を（14）として調査を実施したものである。

3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、平成24年度まで公益財団法人千葉県教育振興財団が実施し、平成25年度からは千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。

4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章に掲載した。

5 本書の執筆は主任上席文化財主事 安井健一が行い、編集は安井と主任上席文化財主事 蜂屋孝之が行った。

6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで以下の機関及び方々からご指導、ご協力を得た。

千葉県県土整備部市街地整備課・流山区画整理事務所、流山市教育委員会、公益財団法人千葉県教育振興財団、栗田則久、津田芳男、橋本勝雄、渡辺 新

7 本書で使用した地図の座標値は、日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方針はすべて座標北である。

8 本書で使用した地形図は下記の通りである。

第1・2・17・39図　流山市発行 1/2,500 流山市都市計画地図

第5図 参謀本部陸軍部測量局作成 1/20,000 迅速測図「流山村」

第6図 国土地理院発行 1:25,000「流山」(NI-54-25-1-2)・「松戸」(NI-54-25-2-1) 平成17年発行

第4～6図 (財)千葉県史料研究財団編 1997『千葉県の自然誌』本編2 千葉県の大地』千葉県  
(千葉県文書館の複製許可により掲載)

9 図版1に掲載した遺跡周辺の航空写真は下記を使用した。

国土地理院発行 1949年撮影(番号 UR522-CA-20, UR534N62-CB-119)

10 主な遺構・遺物の縮尺については、以下のような縮尺とした。

遺構 竪穴住居跡1／80、炉・カマド1／40、土坑・陥穴1／60

遺物 繩文土器1／3、土師器等1／4、礫石器が1／3、剥片石器は4／5、石製品1／3、  
土製品1／2

11 遺構種別の記号は以下のとおりである。

SD：溝状遺構 SI：竪穴住居跡 SK：土坑・陥穴 SX：野馬土手・シシ穴列

# 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 調査の方法と調査概要.....	4
第2節 遺跡の位置と環境.....	8
1 地形と地質.....	8
2 遺跡の地理的環境.....	8
3 周辺の遺跡と歴史的環境.....	10
第2章 縄文時代の遺構と遺物.....	22
第1節 概要.....	22
第2節 遺構.....	22
第3節 遺構外出土遺物.....	27
1 縄文土器.....	27
2 石器.....	31
第3章 古墳時代の遺構と遺物.....	32
第1節 概要.....	32
第2節 墓穴住居跡.....	32
第4章 奈良時代の遺構と遺物.....	38
第1節 概要.....	38
第2節 墓穴住居跡.....	38
第5章 中・近世の遺構.....	42
第1節 概要.....	42
第2節 遺構.....	42
1 土坑.....	42
2 溝状遺構.....	43
3 シシ穴列を伴う遺構群.....	45
第3節 三輪野山野馬土手.....	58
1 概要.....	58
2 野馬土手及び野馬堀.....	58
第6章 総括.....	62
第1節 縄文時代.....	62
第2節 古墳時代.....	62
第3節 奈良時代.....	63
第4節 中・近世.....	63

## 挿図目次

第1図	流山運動公園周辺地区土地区画整理事業地内遺跡	3	第15図	出土縄文時代石器	31
第2図	市野谷宮後遺跡・市野谷芋久保遺跡全体図と地形	5	第16図	(5) SI004住居跡	33
第3図	上層確認調査トレンチ配置及び本調査範囲	6	第17図	(5) SI004住居跡出土遺物(1)	34
第4図	千葉県地質図	7	第18図	(5) SI004住居跡出土遺物(2)	35
第5図	下総台地西部における地形面の分布	7	第19図	(1) SI001住居跡出土遺物	37
第6図	下総台地の模式的地形地質断面図	7	第20図	(5) SI002住居跡・出土遺物	39
第7図	遺跡の立地と周辺の地形	9	第21図	中・近世土坑	43
第8図	遺跡の位置と周辺の遺跡	11	第22図	中・近世溝状遺構	44
第9図	遺構全体図	21	第23図	近世シシ穴群(1)	46
第10図	縄文時代土坑(1)	23	第24図	近世シシ穴群(2)	47
第11図	縄文時代土坑(2)	25	第25図	近世シシ穴群(3)	50
第12図	縄文時代土坑(3)	26	第26図	近世シシ穴群(4)	51
第13図	出土縄文土器(1)	28	第27図	近世シシ穴群(5)	54
第14図	出土縄文土器(2)	29	第28図	近世シシ穴群(6)	55
			第29図	近世シシ穴群(7)	56
			第30図	三輪野山野馬土手平面図	59
			第31図	三輪野山野馬土手断面図	60

## 表目次

第1表	市野谷宮後遺跡(1)～(16)-2、市野谷芋久保遺跡(14)調査一覧表	2	第4表	古墳時代、奈良・平安時代土器観察表	40
第2表	周辺遺跡一覧表	12	第5表	シシ穴計測表	45
第3表	市野谷宮後遺跡(北側)・市野谷芋久保遺跡(14)上層遺構一覧表	20			

## 図版目次

- |   |   |
|---|---|
| 図版1 遺跡周辺航空写真  | 図版9 (10) SK005・(10) SK006・(10) SK007・<br>(10) SK008・(10) SK009・(10) SK010・<br>(10) SK011  |
| 図版2 (5) SK003・(6) SK003・(6) SK004・<br>(5) SK001・(9) SK004・(5) SK005・<br>(6) SK002   | 図版10 (9) SD006・(10) SD002・<br>市野谷芋久保遺跡(14)全景<br>(14) SK001・(14) SK003・(14) SD001・<br>三輪野山野馬土手   |
| 図版3 (9) SK002・(9) SK005・(5) SI004遺物出<br>土状況・(5) SI004炉・(5) SI004全景・(1)<br>SI001遺物出土状況・(1) SI001貯藏穴遺物<br>出土状況・(1) SI001全景                | 図版11 三輪野山野馬土手<br><参考>新市街地地区市野谷芋久保遺跡<br>(12) SX001全景・(12) SX001b・<br>(12) SX001c・(12) SX001d・<br>(12) SX001e・(12) SX001f・<br>(12) SX001g・(12) SX001h |
| 図版4 (5) SI002遺物出土状況・(5) SI002カマド・<br>(5) SI002全景・(6) SK001・(9) SK008・<br>(9) SK009・SD003・(9) SD001・(9) SD003                            | 図版12 繩文土器   |
| 図版5 北東部近世遺構群  | 図版13 繩文時代石器・(5) SI004出土遺物   |
| 図版6 (10) SX001a・(10) SX001b・(10) SX001c・<br>(10) SX001d・(10) SX001f・(10) SX001g・<br>(10) SX001h・(10) SX001i                             | 図版14 (5) SI004出土遺物・(1) SI001出土造物  |
| 図版7 (10) SX001j・(10) SX001k・(10) SX001l・<br>(10) SX001m・(10) SX001n・(10) SX001o・<br>(10) SX001p・(10) SX001r・(10) SX001s・<br>(10) SX001t | 図版15 (1) SI001出土遺物・(5) SI002出土遺物・<br>(10) SK006出土人骨・(9) SK007出土馬歯   |
| 図版8 (10) SX001u・(10) SX001v・(10) SX001w・<br>(10) SX001x・(10) SX001y・(10) SX001z・<br>(10) SX001aa・(9) SK007・(10) SK004A・<br>(10) SK004B  |   |

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過

千葉県企業庁は、常磐新線（現・つくばエクスプレス）の建設に関連して流山運動公園周辺地区土地区画整理事業（以下、運動公園地区と略す）を計画し、事業実施に先立って「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会教育長에게提出した。千葉県教育委員会は、事業予定地内に27か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することを確認して、その旨回答した（第1図）。

その後、両者は事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて慎重な協議を重ね、現状保存及び計画変更が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講じることとした。記録保存のための発掘調査は、財團法人千葉県文化財センター（現・公益財團法人千葉県教育振興財團）が実施することとなり、千葉県企業庁との間に委託契約が締結され、平成9年度から発掘調査が開始された（平成18年度から千葉県県土整備部が区画整理事業を引き継ぐ）。

市野谷宮後遺跡は流山市市野谷字宮後ほかに所在し、面積は約84,600m<sup>2</sup>を測る（第2図）。このうち約90%にあたる76,486m<sup>2</sup>について、平成9年度から令和2年度まで16次にわたって発掘調査を行ってきた。縄文時代以降の上層確認調査については、各調査区の対象面積に対し10%程度の確認トレンチを設定し、遺構の時期と広がりを確認した。その結果、7箇所の地点の計8,412m<sup>2</sup>が本調査となった（第3図）。それ以外の調査区についてはトレンチの拡張等により確認調査の段階で遺構調査等を終了している。

市野谷芋久保遺跡は、流山市市野谷字芋久保ほかに所在し、面積は約105,000m<sup>2</sup>を測る。このうちの大部分は、独立行政法人都市再生機構（UR）による流山新市街地地区土地区画整理事業地内（以下、新市街地地区と略す）で調査が実施されており、西端部の125m<sup>2</sup>のみが運動公園地区事業地内となっている（第2図）。調査は平成21年度に、市野谷宮後遺跡第10調査地点と合わせて実施された。上層の確認調査については、調査面積が少ないと全面を対象とし、125m<sup>2</sup>全体が本調査となった。

今回報告書を作成するにあたり、市野谷芋久保遺跡第14調査地点については、検出された遺構が市野谷宮後遺跡で検出された遺構と繋がる同一遺構群であることから、両地点の遺構を合わせた形とするのが現実的と考えられた。また、一方で市野谷宮後遺跡は北側と南側で遺構の様相が大きく異なること、南側は中・近世の遺構が多数検出され、整理にある程度の時間を要することが想定されたため、遺構の少ない北側を先行して報告することにした。本報告書では、市野谷宮後遺跡の北側と市野谷芋久保遺跡（14）について報告する。第2・3図の中央を東西に走る道路から北側が今回の報告対象範囲である。報告する北側の各調査地点は、第1次調査地点（以下調査地点を（1）と略記）・（5）・（6）の一部・（7）の一部・（9）・（10）にあたっている。また、三輪野山野馬土手は、（6）において調査を実施している。両遺跡の発掘調査及び整理作業に関わった各年度の担当職員、作業内容等は第1表のとおりである。なお、工程の都合で旧石器時代編を令和3年度に先行して刊行しており、本報告書では縄文時代以降の上層の遺構・遺物について報告する。

事業地内における遺跡の調査成果としては、これまでに思井堀ノ内遺跡について、中世編<sup>①</sup>及び旧石器～奈良・平安時代編<sup>②</sup>の2冊の報告書が、財團法人千葉県教育振興財團（現・公益財團法人千葉県教育振興

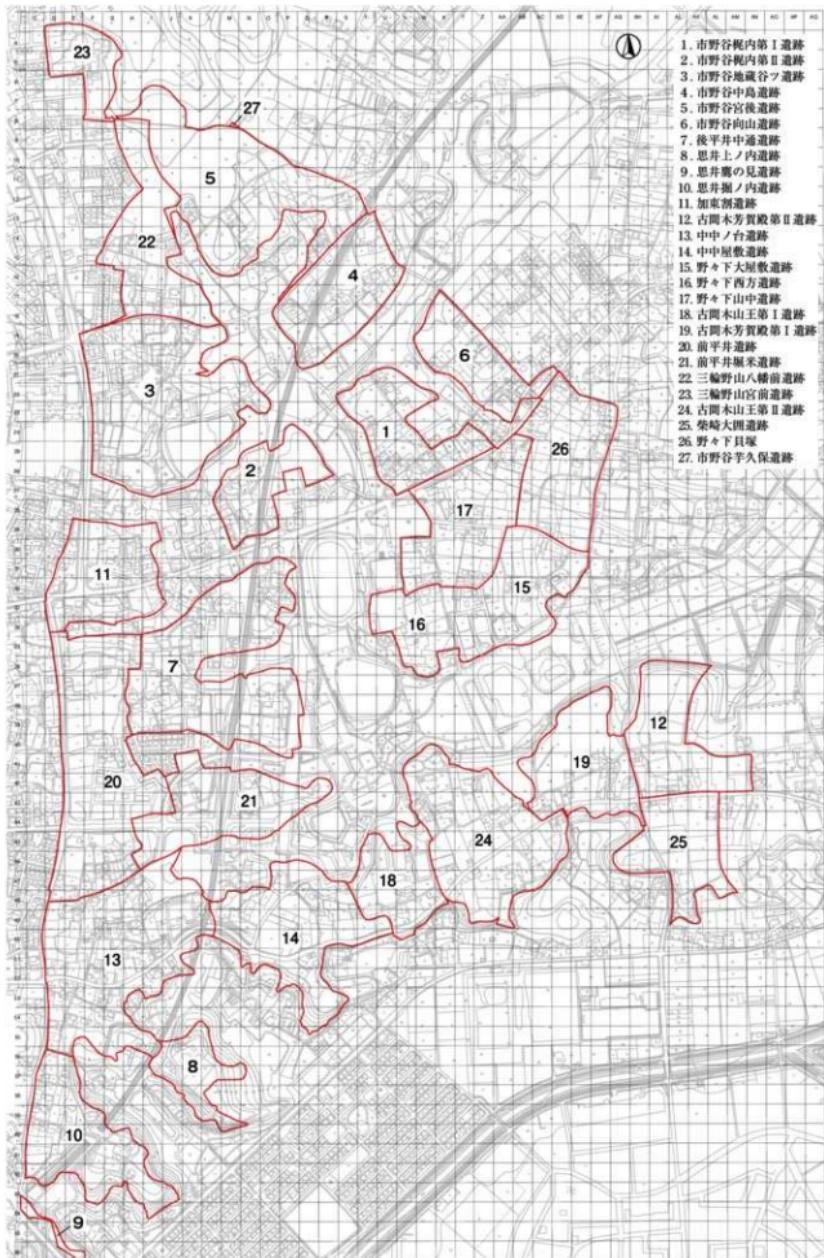
第1表 市野谷宮後遺跡(1)~(16)・市野谷芋久保遺跡(14)調査一覧表

### 【市野谷宮後遺跡發掘調査】

### 【市野谷第久保遺跡發掘調査】

調査 区分	年度	事業者	調査 期間	調査体制	担当者	結果 報告		被験 者数(回)		被験 者数 (回)	被験 者数 (回)	被験 者数 (回)	被験 者数 (回)
						上 限	下 限	上 限	下 限				
Ⅲ 平成21 スプレスの 業務監査委員会	平成21.10.9 ～11.21.11.11	株式会社人業興業 監査委員会	内藤 浜田幸三 内藤 鶴雄	調査部長 浜田幸三 内藤 鶴雄	企画部 内藤 鶴雄	118	125	125	125	125	125	125	125

【整理作業】



第1図 流山運動公園周辺地区土地区画整理事業地内遺跡 ( $S = 1 : 10,000$ )

財団)により刊行され、思井上ノ内遺跡<sup>③</sup>、中中屋敷遺跡<sup>④</sup>、前平井堀米遺跡<sup>⑤</sup>、後平井中通遺跡<sup>⑥</sup>、市野谷宮後遺跡北側と市野谷芋久保遺跡の旧石器時代編<sup>⑦</sup>の報告書が千葉県教育委員会から刊行されている。本書はシリーズ8冊目となる。

整理作業は、発掘調査を実施した公益財団法人千葉県教育振興財団が平成21年度に一部を実施し、さらに平成25年度から令和3年度まで千葉県教育庁教育振興部文化財課が引き継ぎ、令和4年度に報告書刊行に至った。

## 2 調査の方法と調査概要

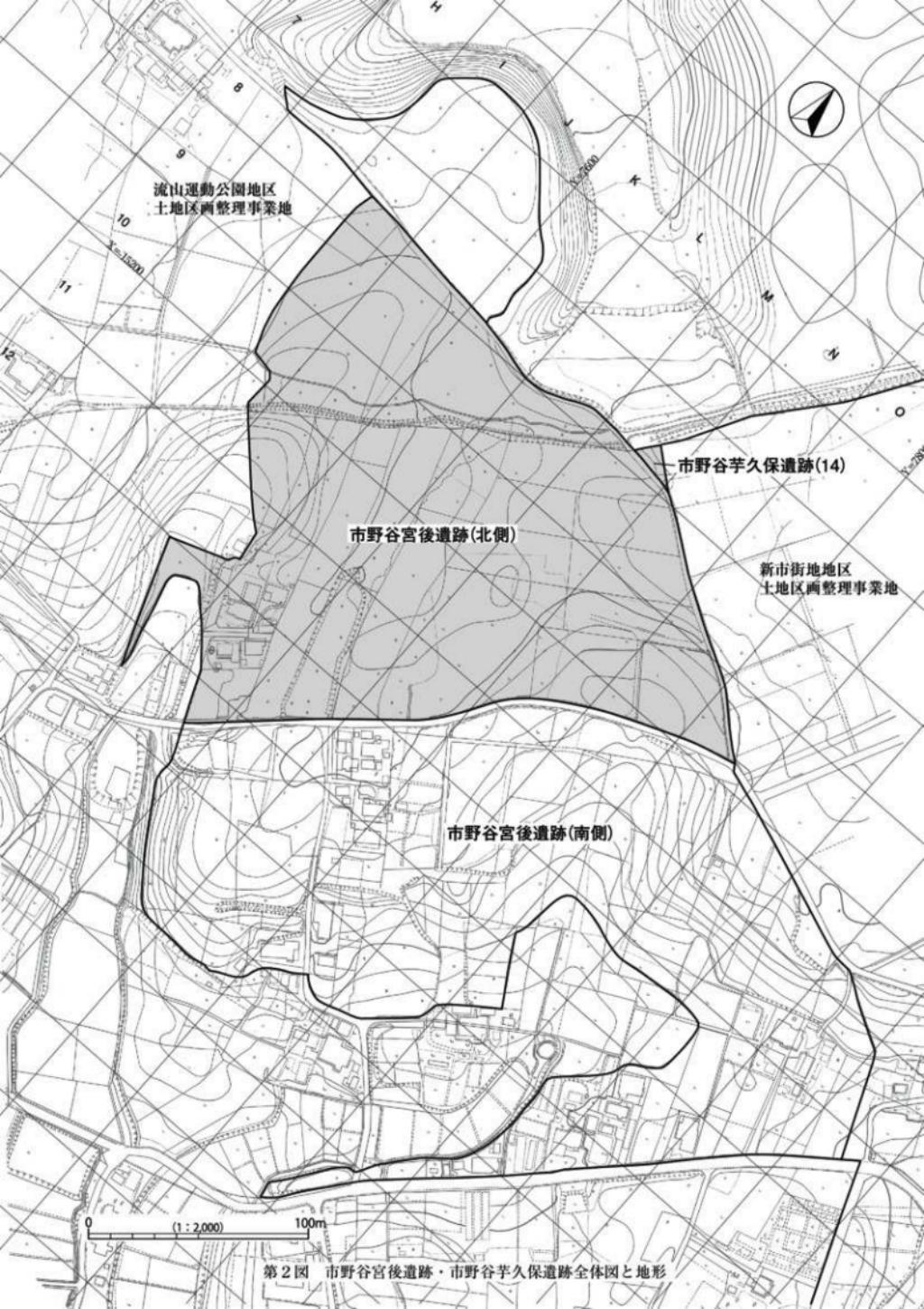
調査にあたっては、区画整理事業地内の遺跡を網羅するように、日本測地系に基づくグリッド設定を行っている。X = -14,800 m、Y = +7,600 mを起点とする40 m × 40 mの方眼を大グリッドとし、北から南へ01～67、西から東へA～Z及びAA～ANとし、大グリッドはアルファベットと数字の組み合わせにより「C 02」「K 11」のように表示する。今回報告する市野谷宮後遺跡(北側)と市野谷芋久保遺跡(14)は、大グリッドで示すとI 08～N 08・I 09～O 09・I 10～P 10・I 11～O 11・J 12～N 12・J 13～M 13・J 14～L 14グリッドの範囲にあたる。大グリッドの中は、更に4 m × 4 mの小グリッドに100分割し、小グリッドは北西角から東へ00、01、02…、南へ00、10、20…とし、南東角を99とする。これにより、大グリッドとの組み合わせで、例えば「M 10～50」などのように小地区名を表示している(第3図)。

発掘調査は平成9年度から開始され、令和元年度までの第16次調査地点の合計76,406m<sup>2</sup>の調査が終了している。本書では各調査地点を第1次調査地点であれば(1)のように略記することとした。

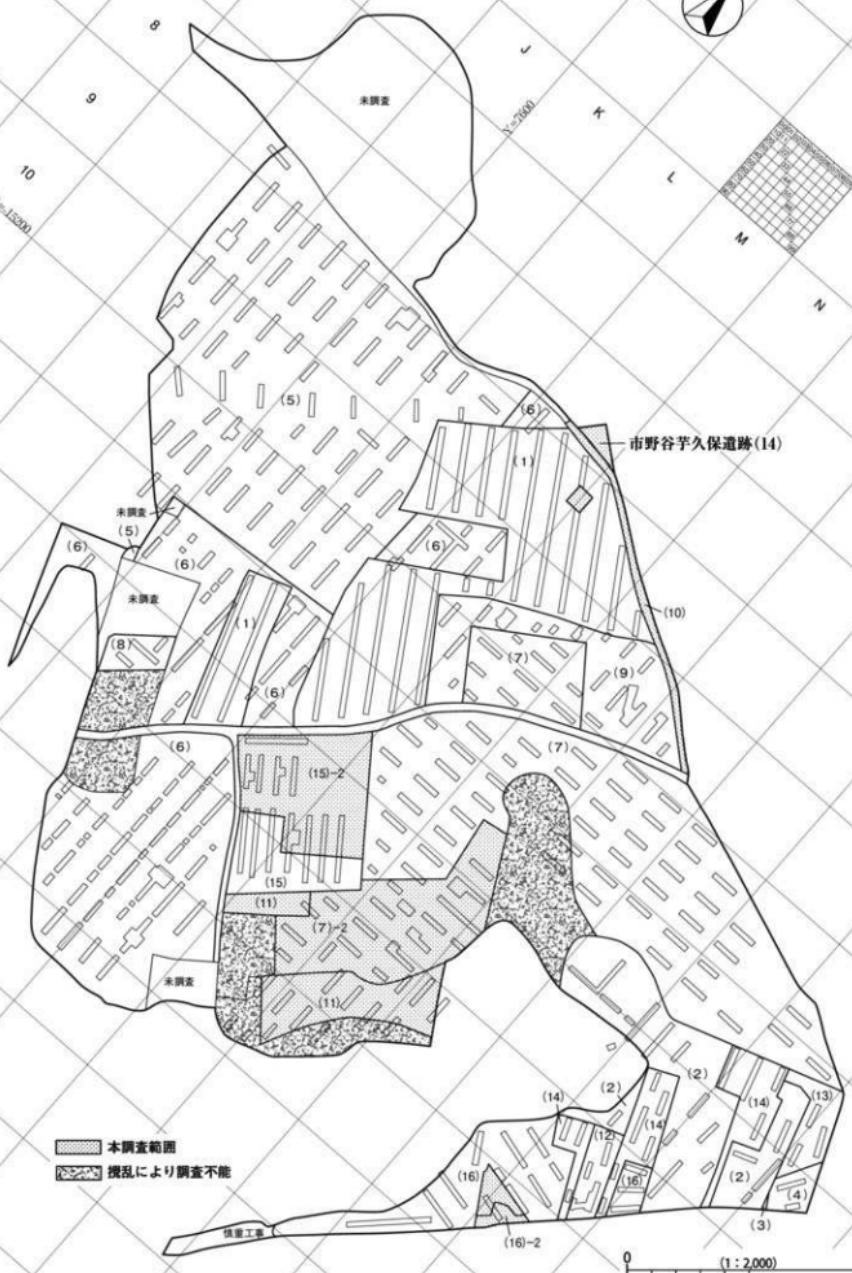
遺構名については、市野谷宮後遺跡の(1)～(5)・(8)・(9)の調査地点では遺構の時代や種別に関係なく3桁の数字の連番とし、(6)・(7)・(10)以降及び市野谷芋久保遺跡(14)では遺構種別記号と3桁の数字とを組み合わせた遺構名を付している。遺物への注記は原則調査時の遺構名で行い、基本的に調査時の番号を踏襲し、遺構種別記号の前に( )で調査次の番号を付することで区別することとした。その上で市野谷宮後遺跡(1)～(5)・(8)・(9)地点の検出遺構については、調査次と遺構種別記号、3桁の数字とを組み合わせた遺構名を付け直した。遺構種別記号は凡例に示したとおりである。調査時と本報告における遺構名对照表は第2表のとおりである。今回報告対象としていない市野谷宮後遺跡の南側については記載を省略した。

調査の結果、市野谷宮後遺跡北側では縄文時代土坑4基、陥穴2基、古墳時代竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代竪穴住居跡1軒、中・近世土坑3基、溝状遺構5条、近世野馬土手に伴うと思われる堀1条、単独のシシ穴9基、シシ穴列1条(シシ穴27基を伴う)である。市野谷芋久保遺跡では近世シシ穴3基(可能性があるもの1基を含む)、中・近世溝状遺構1条、近世野馬土手に伴う堀1条が検出された(第9図)。なお、この野馬土手は調査時に遺構番号が付されていなかったが、三輪野山野馬土手として周知されている土手であることから<sup>⑧</sup>、本書ではこの名称で報告することにした。

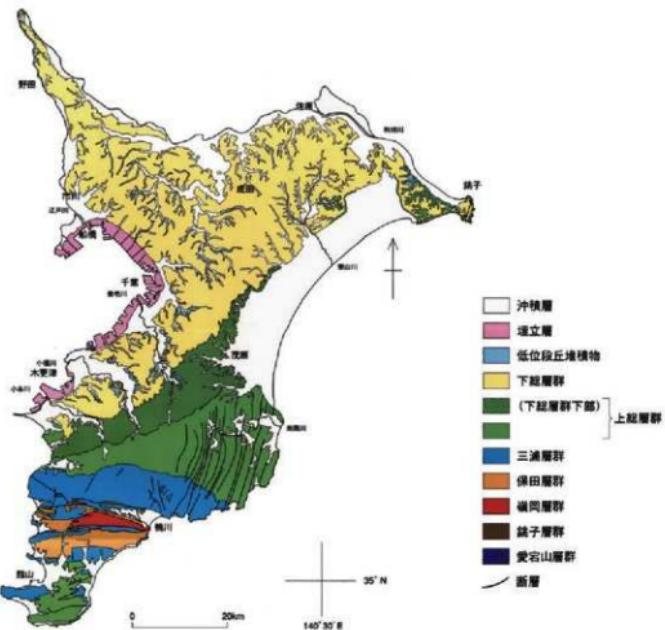
なお、次号となる市野谷宮後遺跡(南側)は、南から入り込む谷津に面する南斜面の緩い傾斜地が大部分を占めている。検出された遺構は、中・近世の地下式坑や土坑、溝状遺構などが主体となっている。また、南西端に位置する(16)地点では近世の土坑墓群が検出されている。集落を営むにはやや不向きな地形環境にあることから、明らかな生活の痕跡が現れるのは中世になってからのことである。



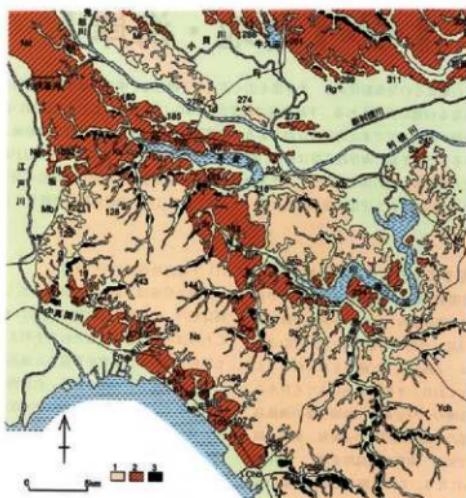
第2図 市野谷宮後遺跡・市野谷芋久保遺跡全体図と地形



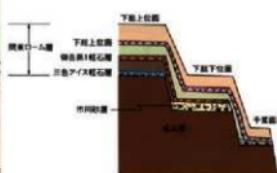
第3図 上層確認調査トレンチ配置及び本調査範囲



第4図 千葉県地質図



第5図 下総台地西部における地形面の分布



第6図 下総台地の模式的地形地質断面図

- 1 下相上位面
- 2 下相下位面
- 3 千葉層

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 地形と地質

千葉県流山市は県北西部に位置する。千葉県の地形は北部の海岸平野と南部の丘陵によって特徴づけられる(第4図)。北部の海岸平野は標高100m以下と低くて平坦で、広大な関東平野の南東部を占め北の利根川を境に茨城県と西の江戸川を境に東京都と接する。南部の丘陵は房総半島の主体をなすもので、海拔400m弱で起伏に富み、東は太平洋、西は東京湾に面する。これらの地形は地質時代ではごく最近にできあがったものであり、この数十万年間の海面変化・地殻変動の諸作用によって生まれてきたものである。加えて最近は人間活動による改変も著しく、人工地形も各所にみられる。

県北部の海岸平野は河川や海岸線付近に広がる沖積平野と、それより一段高い台地からなっている。この台地は「下総台地」と称され、日本を代表する台地である。西端に当たる流山市付近は標高20m前後で、東端の銚子市付近では50m、南東端の長生郡付近では100m前後となり、南東部に向けて高度を増して上総丘陵へと続いている。これは関東造盆地運動の影響により北西部へ傾斜していることによるものとされる。この下総台地は三つの段丘面に分類される(第5・6図)。1の下総上位面は、約13~12万年前の世界的な海進期に海底で堆積した成田層が、その後の海退で陸化した海岸段丘が基になっており、直上に約11万7000年前に噴火した箱根新期外輪山由来の三色アイス軽石層(SIP)が堆積し、その上に下末吉、武藏野、立川の所謂関東ローム層が堆積している。下総上位面は下総台地の主体をなす段丘であるが、東葛地域では松戸以南が主であり流山ではごく一部に存在するにとどまる。2の下総下位面は下総上位面が陸化した後、海成層である成田層上に河川からの流入物や湿原堆積物からなる竜ヶ崎砂層もしくは常総粘土層が堆積し、約10万年前の海進期に段丘が形成された後に陸化したものである。直上には約9万年前に噴火したとされる御岳第1軽石層(Pm-1)が堆積し、その上部に下末吉(上部)、武藏野、立川の関東ローム層が堆積する。下総下位面は下総台地では東葛北部から印旛沼周辺にかけてと、千葉以西の東京湾岸沿いに分布する。流山市も大部分がこの下総下位面上に立地する。3の千葉面は下総下位面が陸化した後、河床面だった頃に砂礫層が形成され、その後河川の浸食により河岸段丘が形成されたものである。離水した後に約5万年前に噴火したとされる箱根新期外輪山由来の東京軽石層(TP)が堆積し、その上に武藏野(上部)、立川の関東ローム層が堆積する。千葉面は手賀沼、印旛沼、千葉以西の東京湾に注ぐ河川により形成された低地(開析谷)に接する形で幅狭く分布する。流山市が面する江戸川沿いにはほとんど認められない。

### 2 遺跡の地理的環境

市野谷宮後遺跡(第8図50)、三輪野山野馬土手(140)、市野谷芋久保遺跡(57)が所在する流山市は、江戸川に沿って南北に長い市域を有しており、北側で野田市、東側で柏市、南側で松戸市と接している。遺跡はこの流山市の南西部、標高23.5mの下総台地上に立地している。台地の西側直下には東京湾へ注ぐ江戸川が流れしており、南側は松戸市との境をなす支流の坂川が流れている。遺跡の立地する台地は、東側の下総台地を開析して江戸川や坂川の流れる古東京湾沿岸に形成された広い低地へと半島状に突出する形状を呈しており、さらに両河川に注ぐ小支谷によって複雑に開析された舌状台地が連なっている。これらの舌状台地上はほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地であることが確認されており、市野谷宮後遺跡、市野谷芋久保遺跡は坂川の支流最奥部の舌状台地上に立地する。背面はやはり江戸川の支流が北から入り込んで開析谷を形成しており、当遺跡は西側の江戸川低地に面する舌状台地と、分水嶺近くの後背台地とをつなぐ尾根上にあると言ってもよい。遺跡の南側を流れる坂川についてみると、遺跡付近から南東へ約5.3km下り、さら



第7図 遺跡の立地と周辺の地形

に東流し、小支流を集めながら南流する。最後は西流して江戸川へと合流する小河川である。坂川低地はこの地域では最大規模の開析谷であり、東側に広がる下総台地へと複雑に深く入り込んでおり、遺跡の北東側約7.5kmにある手賀沼と、そこに注ぐ小河川に接するような地点にまで延びている。遺跡地東側と北側の台地へと入り込む坂川の支谷と、手賀沼の北西部へと注ぐ大堀川支谷との間は分水嶺をなし、その幅はわずかに300m～500mである。手賀沼は利根川(古鬼怒川)、霞ヶ浦(香取海)を経て太平洋へと通じる水系にあり、その意味ではこの坂川は太平洋水系の手賀沼と東京湾を結ぶ水路のような位置にあると言える(第7図)。

### 3 周辺の遺跡と歴史的環境

流山市は高度経済成長期から首都圏のベッドタウンとして開発が進められ、数多くの遺跡が調査されている。それらの調査歴を全て網羅すると膨大なものとなることから、ここでは運動公園の事業地とその周辺を中心に、代表的な調査成果を示してこの地域の歴史的環境を俯瞰したい(第8図、第3表)。ただし運動公園地区の発掘調査は未だ継続中であり未報告資料も多いため、公表されている成果に基づいてまとめるこことしたい。また、市野谷芋久保遺跡の調査成果については、そのほとんどは新市街地地区土地区画整理事業に伴う発掘調査によることをお断りしておく。

流山市内の縄文時代の遺跡は極めて多い。草創期は遺構の検出事例はなく、長崎遺跡(116)<sup>⑨</sup>で有茎尖頭器の出土が報告されるなどごくわずかな遺物の出土しか確認されていないが、早期になると特に後半の条痕文期において遺構の検出事例が増え、遺物も多くの遺跡で出土するようになる。思井堀ノ内遺跡(1)<sup>⑩-10</sup>では野島式から鶴ガ島台式期を中心とする竪穴住居跡2軒、炉穴35基など、思井上ノ内遺跡(5)<sup>⑪</sup>では鶴ガ島台式を中心とする早期後葉の竪穴住居跡2軒、土坑2基、炉穴25基など、三輪野山第Ⅲ遺跡(55)<sup>⑫</sup>では鶴ガ島台式期の竪穴住居跡1軒と炉穴10基などが調査されている。炉穴の検出例は数多く、三輪野山道六神遺跡(53)<sup>⑬-13-14-15</sup>や大原神社遺跡(12)<sup>⑯</sup>、平和台遺跡(11)<sup>⑰-18-19</sup>、三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡(42)<sup>⑭</sup>、三輪野山八重塚遺跡(43)<sup>⑮-22-23-24-25-26-27</sup>、加北谷津第Ⅱ遺跡(39)<sup>⑲</sup>、西平井二階畠遺跡(3)<sup>⑳</sup>、市野谷立野遺跡(59)<sup>㉑-31-32-33</sup>、名都借宮ノ脇遺跡(名都借第Ⅱ遺跡)(129)<sup>㉒-㉓</sup>などで報告されている。市野谷立野遺跡では同時期と思われる大規模な礫群が検出されている。これらの遺跡は野島式期から茅山下層式期を中心とし、茅山上層式以降の早期末になると遺跡数は急速に減少する。そうした中で中中屋敷遺跡(29)<sup>㉔-㉕</sup>では早期末から前期初頭を中心とする竪穴住居跡3軒、炉穴7基、土坑4基などが検出されているほか、三輪野山八重塚遺跡、三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡で該期の遺物が出土している。

前期は、初頭の花積下層式期では遺跡数の少ない状況が続くが、坂川を隔てた対岸の松戸市幸田貝塚(83)<sup>㉖</sup>では花積下層式期から関山式期を中心とした多数の竪穴住居跡と大規模な貝層が形成されており、当地域における拠点的な集落である。流山市内では加町畠遺跡(26)<sup>㉗-㉙-40-41-42-43</sup>や下花輪荒井前(旧下花輪第Ⅱ)遺跡(69)<sup>㉘-41-45-46</sup>で関山式期の竪穴住居跡が少々検出されている程度であるが、黒浜式期に至ると多数の遺構が確認されている。竪穴住居跡の検出事例では、思井堀ノ内遺跡、後平井中通遺跡(16)<sup>㉙</sup>、市野谷芋久保遺跡<sup>㉚-31-32</sup>、市野谷向山遺跡(52)<sup>㉛-31-32-33</sup>、市野谷立野遺跡、西初石五丁目遺跡(63)<sup>㉜-32-33-47</sup>、三輪野山八幡前遺跡(旧下花輪遺跡)(46)<sup>㉝-45-48-49-50</sup>、加北谷津第Ⅰ遺跡(40)<sup>㉞</sup>、加北谷津第Ⅱ遺跡、三輪野山八重塚遺跡、三輪野山北浦遺跡(56)<sup>㉟-51</sup>、三輪野山道六神遺跡、大畔西割遺跡(65)<sup>㉟-52</sup>、三輪野山宮前遺跡(54)<sup>㉟-53-54</sup>などが挙げられる。三輪野山宮前遺跡では黒浜式から諸磯<sup>氷</sup>式ないしは浮島<sup>氷</sup>式までの竪穴住居跡のほか、完形に近い土器や玉類を伴う土坑群が検出されており、墓域と推測される。諸磯<sup>氷</sup>・浮島<sup>氷</sup>式期で



第8図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	位置	地名
1	赤井原ノ内遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後)、古墳(中)、奈良、平安、中近世	7. 下毛森遺跡群	轟文(中・後)、平安、近世
2	西平井原内遺跡	縄文、中世	7. 上毛森人跡群	轟文(前・後)、平安
3	西平井原内遺跡	縄文、中世	7. 桜ノ内氏庭跡	田石畠、轟文(前・後)、平安
4	中平井内遺跡	平安、奈良	74. 大野の古跡	轟文(前)、刀根、中世
5	恩上ノ内遺跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳、奈良、平安、中近世	75. 西野の桜尾跡	轟文(前)、中・後)、古跡
6	西平井丸山遺跡	縄文	76. 在山古跡群	田石畠、轟文、奈良、平安
7	恩上ノ内遺跡	縄文(早・前)、古墳、近世	77. 東和田六日市草薙跡	田石畠、轟文(前・後)、平安
8	櫛・蛭塚の越前跡	古墳(前)	78. 十大寺第1遺跡	轟文(早・前・中・後)、平安、近世
9	(三本木)堀		79. 東和田六日市草薙跡	田石畠、轟文(前・後)、平安、近世
10	櫛・蛭塚	縄文(早・中・後)、平安	80. 十大寺第2遺跡	轟文(早・前・中・後)、平安
11	平和町遺跡	縄文(中)、平安、中世	81. 清水村古跡群	轟文(中)
12	大原町古跡群	縄文(中)、古墳(前)、平安	82. 鶴来古跡群跡	轟文(前)
13	吉本古跡	縄文(早)、中世	83. 李田原城	田石畠、轟文(前・中・後)、古跡
14	南平井古跡	縄文(前)、中世	84. 小中寺跡	轟文(後)、古跡(前)、中世
15	南平井古跡	古墳(前)、中世	85. 鶴来跡群	轟文(早)、前・中・後)、済生(後)、古墳(前)、奈良、平安
16	南平井中央古跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳、中世	86. 木口川(中)遺跡	轟文(前)、古墳(中)
17	古河原山ノ内遺跡	轟文(前)、中世	87. 中央古跡群跡	轟文(前)
18	古河原山ノ内遺跡	古跡	88. 犬の里跡	轟文(前)、中世
19	古河原山ノ内遺跡	轟文、古墳(前)、奈良、平安	89. 鶴来川河内古跡	田石畠、轟文(前・後)、古墳(前・中・後)
20	支那寺ノ内遺跡	古跡	90. 東半原古跡	古跡
21	支那寺内遺跡	轟文(前)、中世、古墳、平安	91. 小金城跡	轟、古跡、平安、中世
22	支那寺ノ内遺跡	古跡	95. 小金城跡	古跡
23	古木寺弓削原第1遺跡	轟文(前)、中世、平安	96. 小金城跡	古跡
24	古木寺弓削原第2遺跡	轟文(前)、中世	97. 猪塚跡	田石畠、轟文(前)、中世
25	加賀台古跡群、伊多木御器原跡	済生(中)、古墳(後)、平安、近世	98. ノイ(ノイの塚)遺跡	田石畠、轟文(早・前・中・後)、古墳(前・中・後)
26	御器原遺跡	轟文、古跡、平安、近世	99. 鶴来(北之庄野付付近)(東源寺)	轟文(前)、後
27	御石原ノ内遺跡	田石畠、轟文、中世	100. 山王古跡群	轟文(前)、中世
28	御来来古跡	轟文(前)、中世	101. 穂ノ内古跡群	轟文(早・前・中)
29	中ノ原遺跡群	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳、奈良、平安、中近世	102. 今宿古跡群	古跡
30	智子ノ内遺跡	轟文(前)、中世	103. 犬の里古跡	轟文(前)
31	智子ノ内遺跡	轟文(前)、中世	104. 佐田跡	轟文(中・後)、平安、近世
32	智子ノ山古跡	轟文(前)、中世	105. 高幡城跡	古跡
33	智子ノ月城	轟文(前)、中・後)、古跡	106. 上野の二木台古跡	済生(後)
34	智子ノ月城第1遺跡	平安	107. 二木台(二木台)・(二木)春葉2遺跡	轟文(早・前)、済生(後)、古墳(後)
35	智子ノ月城第2遺跡	轟文(前)、中世	108. 猪引の古跡	轟文(早・前)、古墳(前)
36	智子ノ月城古跡	古跡	109. 木ノ瀬跡	轟文(前)
37	古河原山木分古跡	轟文(早・前)、古跡	110. 犀谷古跡群	轟文(前)、中世
38	古河原山木分古跡	轟文(前)、古跡	111. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(中・後)、古墳(中)
39	加北山古跡Ⅱ遺跡	轟文、古跡、平安	112. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(中・後)、古墳(中)
40	加北山古跡Ⅲ遺跡	田石畠、轟文、平安	113. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(前)、中世
41	加北山古跡Ⅳ遺跡	轟文、平安	114. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(早・前・中・後)
42	三輪山古ノ原遺跡	轟文(前)、中世	115. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(前)
43	三輪山古ノ原遺跡	轟文、古跡、平安	116. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(前)
44	三輪山古ノ原遺跡	轟文(前)、中世	117. 犀谷(犀谷)古跡	轟文、中世
45	三輪山古ノ原	田石畠、轟文(早・前・中・後)、古墳、奈良、平安	118. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(早・前・中・後)、古墳(後)
46	三輪山古ノ原	古跡	119. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(中・後)、古墳(後)、平安
47	中野山古ノ原古跡	古跡	120. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(中)
48	中野山古ノ原古跡	轟文、古跡、平安、近世	121. 仁下古跡	轟文(中・後)、平安
49	中野山古ノ原古跡	轟文	122. 犀谷(犀谷)古跡	中世
50	中野山古ノ原古跡	轟文	123. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(前)
51	市野谷中央古跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳、奈良、近世	124. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(前)、中世
52	市野谷向山遺跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳(中・後)、奈良、近世	125. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(前)
53	三輪山古ノ原六日市遺跡	轟文、古跡、平安、近世	126. 里原(1)古跡	轟文(中)、古墳、古墳
54	三輪山古ノ原6日市遺跡	轟文(前)、古墳(後)、平安、近世	127. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(前)、中世、平安
55	三輪山古ノ原6日市遺跡	轟文、平安、近世	128. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(中)、平安
56	三輪山古ノ原6日市遺跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳、奈良、近世	129. 犀谷(犀谷)古跡	轟文(中)
57	市野谷仁手古跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳、奈良、近世	130. 里原(2)古跡	轟文(中)
58	市野谷二段古跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳(前・後)、奈良、平安、中近世	131. 鶴来内城跡	中世
59	市野谷古ノ原古跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳(中)、奈良、近世	132. 鶴来外城跡	轟文(前)、中・後)、中古世
60	大久野古跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳(中)、奈良、近世	133. 行六古跡、行六古跡	轟文(早・前・中・後)、古墳(中・後)、中世
61	市野谷仁手古跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳(中)、奈良、近世	134. 久保野(鶴来平野)古跡	古跡
62	市野谷宮代古跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳(中)、奈良、近世	135. 久保野(古跡)	古跡
63	西野古ノ内遺跡	旧石器、轟文(早・前)、古墳(前)、奈良、近世	136. 二木台古跡	轟文(前)
64	三輪山古ノ原古跡	轟文(早)、済生、古墳(前)	137. 仲通古跡	田石畠、轟文(前)、古墳(中)
65	大野西御跡	轟文(早)、済生、古墳(前)、平安	138. 仁手・長野跡	轟文(早・前・中・後)、古墳
66	大野ノ内古跡	轟文(早・中)、平安	139. 仁手(仁手)古跡	轟文(中・後)、古墳(後)、平安
67	大野ノ内古跡	古跡	140. 仁手(仁手)古跡	轟文(中)
68	大野ノ内古跡	轟文(前)、古墳(前)	141. 鶴来内城跡	古跡
69	下毛森前山遺跡	旧石器、轟文(早・前・中・後)、古墳、奈良、近世	142. 鶴来外城跡	古跡
70	下毛森内城跡	轟文、古墳、中世	143. 仁手野(仁手)古跡	古跡

はほかに長崎遺跡で貝層を伴う堅穴住居跡から良好な資料が出土しており、後平井中通遺跡、三輪野山宮前遺跡、三輪野山八幡前遺跡でも堅穴住居跡が検出されている。新市街地地区土地区画整理事業地内の調査でも同時期の遺構が検出されており、市野谷芋久保遺跡や市野谷立野遺跡、市野谷向山遺跡などで堅穴住居跡が確認されているが、内陸部に位置するためか全体に遺構数は少なく密度は希薄である。

中期では前半の五領ヶ台式期から阿玉台・勝坂式期までは遺跡が少ないが、中葉から後半にかけて遺跡が増加する。野々下元木戸遺跡(119)<sup>(55-56-57-58)</sup>と向下遺跡(121)<sup>(58)</sup>は、包蔵地としては別々に扱われているが本来は同一の集落跡と考えられるもので、中期後半から後期前葉までの堅穴住居跡と土坑群、貝ブロックを伴うピットなどが検出されている。野々下長田遺跡(旧野々下第V遺跡)(118)<sup>(59-60-61)</sup>では中期後葉の堅穴住居跡と埋設土器などが検出されている。名都借宮ノ脇遺跡では中期中葉の堅穴住居跡とフラスコ状土坑が検出されている。また地図の外になるが、中野久木谷頭遺跡では加曾利E式初頭から前半期にかけての大規模な環状集落が形成されている。一方で中期後葉になると、台地奥の分水嶺に近い地域で少数の堅穴住居跡もしくは土坑が散在する事例もみられ、十夫夫第III遺跡(80)<sup>(30-31-32)</sup>や大久保遺跡(60)<sup>(29-30)</sup>などが代表的である。

中期末から後期初頭にかけては一時的な遺跡数の減少が認められる。その中で市野谷向山遺跡はこの時期の集落が形成されており、運動公園地区側は現在も調査進行中であるが多くの成果が上がっている。市野谷二反田遺跡(58)<sup>(62)</sup>では称名寺式期を中心とする堅穴住居跡が13軒検出されているほか、大久保遺跡ではやはり称名寺式の埋設土器を伴う堅穴住居跡が検出されており、後期初頭は内陸部の遺跡で集落が営まれる傾向にある。後期前葉の堀之内1式以降になると遺跡数は再び増加する。思井上ノ内遺跡では堀之内1式から加曾利B1式にかけての堅穴住居跡11軒、土坑14基、貝ブロック8か所などのほか、人骨集積が検出されており、埋葬施設と考えられる。後平井中通遺跡は称名寺2式から堀之内1式を中心とする環状集落で、堅穴住居跡32軒、土坑200基以上が検出されている。江戸川と坂川に挟まれた台地の南端部には鱗ヶ崎(前ヶ崎)貝塚(10)<sup>(63)</sup>が存在する。1952年に酒詰伸男氏と岡田茂弘氏に率いられた学習院高等科史学部が調査を実施し、堀之内式期から加曾利B式期にかけての遺構群が濃密に分布することが明らかになっている。古間木薦草木谷遺跡(37)<sup>(64)</sup>では部分的な調査ではあるが後期の堅穴住居跡が検出され、集落の存在が想定される。三輪野山貝塚(45)<sup>(14-15-45-65-66)</sup>では後期から晩期にかけて100軒を超える堅穴住居跡、5箇所の貝層、20基余りの土坑墓群、晩期中葉と考えられる道路状遺構、水場遺構、埋葬人骨などが検出されているほか、環状に構築された堅穴住居跡をはじめとする遺構群に囲まれるように捕鉢状に削られた窪地が存在する。削られた土砂は周間に盛り上げられたと考えられ、環状盛土と中央窪地の関係をよく示す成果である。三輪野山貝塚に関連すると思われる遺構は周辺からも検出されており、東側の三輪野山八幡前遺跡では三輪野山貝塚の中央地と一体と考えられる窪地が続いている。それを取り囲むように後期前葉から晩期前葉にかけての堅穴住居跡が多数検出されているほか、窪地から集落東側へ延びる道路状遺構が検出されている。三輪野山宮前遺跡などでも同時期の堅穴住居跡や掘立柱建物が検出されている。貝塚も多く形成され、三輪野山貝塚のはか、野々下貝塚(33)<sup>(67-68)</sup>、上貝塚貝塚(139)<sup>(13)</sup>、地図の外になるが上新宿貝塚は大規模な環状貝塚として知られている。いずれの貝塚も後期前葉の堀之内式期あたりから形成が始まり、晩期中頃まで存続するのが確認されているが、晩期終末頃は遺構・遺物ともほとんどみられなくなる。

弥生時代は遺跡の分布が希薄である。江戸川流域では三輪野山北浦遺跡で中期の須和田式土器が出土している。下花輪荒井前遺跡では宮の台式期の住居跡のほか、市内では唯一の事例である方形周溝墓が検出

されている。加村台遺跡(25)<sup>(69-70・71-72・73-74・75)</sup>では中期から後期の堅穴住居跡のほか、環濠と推測されるV字溝が検出されている。坂川流域では対岸の松戸市内で中芝遺跡(84)、道六神遺跡(85)、原の山遺跡(88)があるだけで、本遺跡の周辺地域は全般的に弥生時代の遺跡の少ない地域として知られている。

これに対して、古墳時代に入ると遺跡数が大きく増加する。前期から中期にかけては、江戸川流域では三輪野山宮前遺跡、三輪野山第Ⅲ遺跡、三輪野山北浦遺跡、三輪野山道六神遺跡、大畔西割遺跡等が、また坂川流域では市野谷宮尻遺跡(62)<sup>(76)</sup>、市野谷入台遺跡(61)<sup>(77-78)</sup>、市野谷向山遺跡、野々下元木戸遺跡・向下遺跡等が各々集落群を形成する。三輪野山道六神遺跡では北陸系の土器が、三輪野山宮前遺跡では東海系の土器が出土しており、他地域との交流を示すものと言える。市野谷地区及び野々下地区は坂川流域では奥まった地で、手賀沼に注ぐ大堀川支谷との分水嶺に近い地域である。市野谷宮尻遺跡は3世紀中頃から始まる集落遺跡で、前期の堅穴住居跡が90軒検出され、そのうちの1軒から東日本で最も古い墨書き器が出土している。市野谷入台遺跡では前期～中期にかけての堅穴住居跡が35軒検出されているほか、小規模ながら石製模造品の製作跡も検出されており、江戸川流域では最古級に位置づけられる。同じく坂川水系の最奥部に位置する西初石五丁目遺跡では前期の堅穴住居跡が20軒検出されており、そのうち1軒から小形仿製鏡が出土している。野々下元木戸遺跡・向下遺跡からは前期の堅穴住居跡が19軒検出されている。西初石五丁目遺跡や野々下元木戸遺跡・向下遺跡の堅穴住居は比較的短期間の構築にとどまっており、開拓集落的な様相を呈している。中期は市野谷向山遺跡などで集落が形成される。全体としては遺構数の減少が認められるが、後期になると集落規模は再度拡大し、遺跡も増加する。また三輪野山地区や市野谷地区以外にも分布域が広がる。江戸川に接する加地区から平和台地区にかけては、加村台遺跡、加町畠遺跡、加北谷津第Ⅰ遺跡、同第Ⅱ遺跡、平和台遺跡等が顕著な集落遺跡群を形成する。加町畠遺跡は後期の堅穴住居跡74軒が検出されており、拠点的集落の一つである。加村台遺跡は台地西端に位置し、後期に多数の堅穴住居が構築される。太日川(現江戸川)を通じた河川交易の拠点としての性格が想定される。一方、古墳の分布は顕著ではないが、三輪野山地区に前期方墳の三輪野山向原古墳(64)<sup>(79-80)</sup>が、本遺跡の南約500mには前方後円墳の三本松古墳<sup>(8)</sup>の鱗ヶ崎塚の越遺跡範囲内<sup>(80)</sup>が、そして加地区に終末期古墳の北谷津古墳<sup>(81)</sup>の加北谷津第Ⅱ遺跡範囲内<sup>(80)</sup>が所在している。

奈良時代から平安時代になると遺跡は飛躍的に増大する。思井上ノ内遺跡や思井堀ノ内遺跡の所在する思井地区から前平井遺跡(14)や平和台遺跡、加町畠遺跡、三輪野山宮前遺跡の所在する前平井地区、平和台地区、加地区、三輪野山地区にかけては特に集落遺跡が集中している地域である。思井堀ノ内遺跡からは8世紀後半～10世紀初頭にかけての堅穴住居跡26軒、掘立柱建物跡6棟、土器焼成遺構や鍛冶遺構が検出されたほか、「庄」と記された墨書き土器40点以上や綠釉陶器、灰釉陶器などが出土しており、当地における拠点集落であるとともに初期莊園であった可能性が強い。思井上ノ内遺跡からは8世紀前半～10世紀にかけての堅穴住居跡16軒、掘立柱建物10棟、土器焼成遺構4基などが検出されている。現在も調査継続中である前平井遺跡は、これまでに70軒を超える堅穴住居跡が検出されている。前平井地区の北側の加地区では、特に集落規模の拡大が目覚ましい。すでに古墳時代から多数の堅穴住居跡が展開しており、奈良時代前半に一時的に減少するものの後半になって飛躍的に堅穴住居跡が増大する。加町畠遺跡では堅穴住居跡126軒、掘立柱建物跡17棟など多数の遺構が検出され、武藏国から多数の土器が搬入されるなど、当地区の中心的な位置を占めていたと推測される。さらに北の三輪野山地区には式内社比定社の茂侖神社が存在する。神社の南側に広がる三輪野山宮前遺跡では社殿から南へ約150mの地点で9世紀以前と考え

られる掘立柱建物群が検出されたほか、近接する8世紀後半の堅穴住居跡からは巡方やガラス玉、耳環などが、また、9世紀初頭の堅穴住居跡からは下総国分寺と同範の六葉宝相華文軒丸瓦が出土しており、三輪野山遺跡群の古代集落の中でも中心的な位置にあったと考えられる。神社の西側に当たる三輪野山北浦遺跡では、9世紀後半の堅穴住居跡から皇朝十二銭の一つである隆平永寶が出土している。神社の南西側に当たる三輪野山道六神遺跡では、鍛冶遺構を伴う堅穴住居跡が検出されている。平和台地区には下総国分寺と同系瓦が出土する流山庵寺(138)<sup>(4)</sup>が、鰐ヶ崎地区には平安時代創建とされる東福寺が立地している。茂侖神社を含めたこれらの3寺社は、下総国府と常陸国府を結ぶ古代東海道ないしはその支路沿いに立地していたと考えられている。奈良・平安時代の集落も3寺社の間に集中しており、これらの遺跡群が古代葛飾郡桑原郷の中核をなす集落群であるとする指摘もされている<sup>(5)</sup>。一方でより東側の中地区や市野谷地区では、前平井堀米遺跡(15)<sup>(6)</sup>や市野谷中島遺跡(51)<sup>(30-31-32)</sup>、市野谷地藏谷ツ遺跡(47)<sup>(32-33)</sup>などで集落が形成されるものの、規模は小さく短期間で終息する。

鎌倉時代以降の中・近世遺跡の多くが戦国期以降に位置付けられるもので、地下式坑や土坑墓、屋敷跡と考えられている台地整形区画等が検出されている。一方で鎌倉時代から室町時代前半の遺跡は千葉県内の他地域と同様に少ない。そうした中で特筆されるのが思井堀ノ内遺跡<sup>(1-34-35)</sup>で、13世紀～15世紀にかけての掘立柱建物群、方形周溝区画墓、土坑群、地下式坑群が検出されている。特に方形周溝区画墓からは青磁碗・皿、白磁皿、和鏡、円形木製品、木櫛、菊花形皿などに加え、出土品としては他に例を見ない掛幅袋絹本着色画が副葬された成人女性骨が出土している<sup>(36)</sup>。時期は13世紀後半～14世紀初頭と考えられ、被葬者は13世紀代に当地を支配していた地頭矢木式部太夫胤家の妻もしくは娘である可能性が指摘されている。掘立柱建物群も同時期と考えられ、矢木氏の居館であると推測される。市野谷入台遺跡では13世紀代と考えられる方形堅穴建物群が検出されている。戦国期になると多くの城郭が築かれるようになる。江戸川流域では北方約2.3kmの花輪城跡(67)<sup>(37)</sup>、坂川対岸の東約1.7kmにある名都借城跡(124)<sup>(35-38-39)</sup>、約2.2kmの前ヶ崎城跡(122)<sup>(38)</sup>、南約1.7kmの松戸市小金城跡(94)<sup>(39)</sup>があるが、これらは戦国期に小金城を本拠とした高城氏関係の城跡と考えられている。さらに市野谷入台遺跡周辺をみると中中ノ台遺跡(4)、中中屋敷遺跡、前平井遺跡、前平井堀米遺跡、加東割遺跡(28)<sup>(31-32)</sup>、加町烟遺跡<sup>(35)</sup>、西平井根郷遺跡(2)<sup>(29-35)</sup>、西平井二階畑遺跡<sup>(35)</sup>、三輪野山宮前遺跡、三輪野山道六神遺跡(53)<sup>(35-39)</sup>、三輪野山第Ⅲ遺跡等から台地整形区画、地下式坑、土坑墓等が確認されており、思井地区、西平井、前平井地区、加地区、三輪野山地区が奈良・平安時代に引き続きたこの地域の拠点となる位置を占めていたことが想定される。

近世になると下総台地には軍用馬育成のため、徳川幕府によって牧が設けられた。流山市周辺は小金牧の一つ、上野牧の範囲と重なっている。運動公園地区はほとんどが牧の範囲外になるため、今回報告する三輪野山野馬手(140)が存在する程度である。新市街地地区においては市野谷芋久保遺跡内で三輪野山野馬手の縞きが検出されているほか、駒木野馬手(141)<sup>(94-95)</sup>、市野谷駒木野馬手(142)<sup>(33-96-100)</sup>、十太夫馬手(143)<sup>(33-79-95-96-97-98-99)</sup>の調査が行われている。その他、大畔野馬手(144)、市野谷・野々下野馬手(145)、長崎一丁目野馬手(146)、野々下野馬手(147)<sup>(101)</sup>などが所在している。これらの多くが明治以降の農地開拓や軍用地造成、そして戦後の宅地開発により大部分が姿を消し、市街地にこれらの土手がわずかに残されるのみとなっている。

## 注

- 1 (財)千葉県教育振興財團 2006「流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1 - 流山市思井掘ノ内遺跡(中世編) -」千葉県教育振興財團調査報告第549集
- 2 (財)千葉県教育振興財團 2010「流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2 - 流山市思井掘ノ内遺跡(旧石器~奈良・平安時代編) -」千葉県教育振興財團調査報告第635集
- 3 千葉県教育委員会 2016「流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書3 - 流山市思井上ノ内遺跡 -」千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第11集
- 4 千葉県教育委員会 2017「流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書4 - 流山市中中屋敷遺跡 -」千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第20集
- 5 千葉県教育委員会 2020「流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書5 - 流山市前平井堀米遺跡 -」千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第34集
- 6 千葉県教育委員会 2021「流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書6 - 流山市後平井中通遺跡 -」千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第37集
- 7 千葉県教育委員会 2022「流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書7 - 流山市市野谷宮後遺跡(北側)・市野谷茅久保遺跡(14)(旧石器時代編) -」千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第41集
- 8 (財)千葉県教育振興財團編 2006「県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡」千葉県教育委員会
- 9 流山市遺跡調査会 1985「千葉県流山市長崎遺跡」
- 10 流山市教育委員会 2011「I. 思井掘ノ内遺跡B地点」「平成21年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 11 流山市教育委員会 1988「千葉県流山市三輪野山第Ⅲ遺跡」
- 12 茂侶神社脇遺跡発掘調査団 1980「千葉県流山市茂侶神社脇遺跡」茂侶神社脇遺跡発掘調査団
- 13 (財)千葉県文化財センター 1996「主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書 - 流山市南割遺跡・上貝塚第Ⅱ遺跡・上貝塚第Ⅰ遺跡・上貝塚貝塚・下花輪第Ⅲ遺跡・三輪野山第Ⅱ遺跡 -」千葉県文化財センター調査報告第276集  
なお、この報告書に掲載されている三輪野山第Ⅱ遺跡の調査範囲は、現在の三輪野山北浦遺跡と三輪野山道六神遺跡の2遺跡にまたがっている。また、下花輪第Ⅲ遺跡は現在桐ヶ谷浅間後遺跡と呼称されている。
- 14 (財)千葉県文化財センター 2001「主要地方道松戸野田線住宅地閑連埋蔵文化財調査報告書 - 流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前 -」千葉県文化財センター調査報告第399集
- 15 流山市教育委員会 2015「流山市三輪野山遺跡群発掘調査概要報告書」
- 16 山武考古学研究所 1982「大原神社遺跡」
- 17 流山市教育委員会 1993「千葉県流山市平和台遺跡発掘調査概報」
- 18 流山市教育委員会 2002「V. 平和台遺跡」「平成12年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 19 流山市教育委員会 2003「I. 平和台遺跡(2)」「平成13年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 20 流山市教育委員会 1985「千葉県流山市三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡」
- 21 三輪野山八重塚遺跡調査会 1982「千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡」
- 22 流山市遺跡調査会 1985「千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡B地点」
- 23 流山市教育委員会 1987「千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡C地点」
- 24 流山市教育委員会 1991「III. 三輪野山八重塚遺跡F地点」「平成2年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 25 流山市教育委員会 1991「千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡E地点」
- 26 流山市教育委員会 2002「I. 三輪野山八重塚遺跡I・J地点」「平成12年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」

- 27 (株)東京航業研究所 2015「流山市三輪野山八重塚遺跡K地点－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－」
- 28 流山市教育委員会 1989「加地区遺跡群Ⅰ」
- 29 流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室 2004「流山市西平井・鰐ヶ崎地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査概報1」
- 30 (公財)千葉県教育振興財團 2015「流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書7－流山市市野谷茅久保遺跡・市野谷中島遺跡(上層)・市野谷向山遺跡(上層)・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第1遺跡(上層)・十夫第1遺跡・十夫第3遺跡－」千葉県教育振興財團調査報告第735集
- 31 (公財)千葉県教育振興財團 2016「流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書8－流山市市野谷茅久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・十夫第3遺跡－」千葉県教育振興財團調査報告第748集
- 32 (公財)千葉県教育振興財團 2017「流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書10－流山市市野谷茅久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(下層)・西初石五丁目遺跡・十夫第3遺跡－」千葉県教育振興財團調査報告第769集
- 33 (公財)千葉県教育振興財團 2019「流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書11－流山市市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・西初石五丁目遺跡・市野谷駒木野馬土手・十夫野馬土手－」千葉県教育振興財團調査報告第779集
- 34 流山市教育委員会 1989「千葉県流山市名都借第II遺跡発掘調査概報」
- 35 (有)勾玉工房Mogi 2015「流山市名都借宮ノ駒遺跡－特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－」
- 36 流山市教育委員会 1998「I. 中中屋敷遺跡」「平成9年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 37 古里節夫 2000「幸田貝塚」「千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)」千葉県  
なお、ここでは省略したが、この遺跡については主に松戸市教育委員会によって数多くの調査が行われ、概報も多数刊行されている。
- 38 流山市郷土資料館 1980「千葉県流山市加村台遺跡群－町畑遺跡発掘調査概報－」
- 39 流山市教育委員会 1991「加地区遺跡群Ⅱ」
- 40 流山市教育委員会 1994「加地区遺跡群Ⅲ」
- 41 流山市教育委員会 2000「加地区遺跡群Ⅳ」
- 42 流山市教育委員会 1998「II. 加町畑遺跡 I 地点」「平成10年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 43 流山市教育委員会 2014「II. 加町畑遺跡 J 地点」「平成24年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 44 下津谷達男・瓦吹 堅 1973「流山市大畔台 下花輪第二遺跡調査概報」下花輪第二遺跡調査団
- 45 (財)千葉県教育振興財團 2010「流山市下花輪荒井前遺跡－高度浄水施設建設工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書－」千葉県教育振興財團調査報告第649集
- 46 (公財)千葉県教育振興財團 2021「流山市下花輪荒井前遺跡2－高度浄水施設建設工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書－」千葉県教育振興財團調査報告第786集
- 47 (財)千葉県教育振興財團 2008「流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書2－流山市西初石五丁目遺跡－」千葉県教育振興財團調査報告第596集
- 48 下屋敷遺跡調査会・流山市教育委員会 1986「流山市下屋敷遺跡発掘調査報告書」
- 49 (財)千葉県文化財センター 2004「主要地方道松戸野田線住宅地内関連埋蔵文化財調査報告書(2)－流山市三輪野山貝塚・三輪野山宮前遺跡・三輪野山八幡前遺跡－」千葉県文化財センター調査報告第482集
- 50 流山市教育委員会 2012「I. 三輪野山八幡前遺跡 A 地点II」「平成22年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」

- 51 千葉県教育委員会 2018「流山市三輪野山北浦遺跡－県道越谷流山線事業埋蔵文化財発掘調査報告書－」千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第24集
- 52 流山市教育委員会 2003「I. 大畔西割遺跡」「平成14年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 53 流山市教育委員会 2011「II. 三輪野山宮前遺跡A地点8」「平成21年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 54 流山市教育委員会 2012「III. 三輪野山宮前遺跡A地点8-2」「平成22年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 55 流山市教育委員会 2007「IV. 野々下元木戸遺跡」「平成18年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 56 (株)地域文化財コンサルタント 2009「流山市野々下元木戸遺跡(第3次調査)」
- 57 (株)東京航業研究所 2011「流山市野々下元木戸遺跡(第2次調査)」
- 58 流山市教育委員会 2012「向下遺跡 野々下元木戸遺跡(第4次調査)」
- 59 流山市教育委員会 1993「II. 野々下第V遺跡」「平成4年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 60 流山市教育委員会 2020「III. 野々下長田遺跡(1次)」「平成30年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 61 流山市教育委員会 2021「I. 野々下長田遺跡(2次)」「令和元年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 62 (財)千葉県教育振興財團 2009「流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書4 -流山市市野谷二反田遺跡-」千葉県教育振興財團調査報告第629集
- 63 酒詰伸男・岡田茂弘他 刊行年不詳(1952~1953?)「千葉県前ヶ崎貝塚発掘調査報告」学習院高等科史学部  
なお、この文献は正式に刊行されたものではなく、手書きの原稿と実測図、拓本などから構成されている。
- 64 流山市教育委員会 1997「II. 古間木茶薬木谷遺跡」「平成8年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 65 流山市教育委員会 2008「流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書」
- 66 流山市教育委員会 2021「IV. 三輪野山貝塚第14地点」「令和元年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 67 (財)千葉県文化財センター 1995「流山市野々下貝塚確認調査報告書」千葉県文化財センター調査報告第274集
- 68 流山市教育委員会 2014「III. 野々下貝塚」「平成24年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 69 流山市教育委員会 1989「II. 加村台遺跡D地点」「昭和63年度流山市市内遺跡群発掘調査報告」
- 70 流山市教育委員会 1997「III. 加村台遺跡F地点」「平成8年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 71 流山市教育委員会 2000「I. 加村台遺跡G地点」「平成11年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 72 流山市教育委員会 2002「III. 加村台遺跡H地点」「平成12年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 73 流山市教育委員会 2016「I. 加村台遺跡J・K地点」「平成26年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 74 大成エンジニアリング(株) 2017「千葉県流山市加村台遺跡K地点発掘調査報告書」
- 75 流山市教育委員会 2019「V. 加村台遺跡L地点」「平成29年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 76 (財)千葉県教育振興財團 2006「流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書1 -流山市市野谷官尻遺跡-」千葉県教育振興財團調査報告第545集
- 77 流山市教育委員会 1996「IV. 市野谷入台遺跡」「平成7年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」流山市教育委員会
- 78 (財)千葉県教育振興財團 2008「流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3 -流山市市野谷入台遺跡-」千葉県教育振興財團調査報告第606集
- 79 流山市教育委員会 2008「流山市三輪野山向原古墳」
- 80 流山市教育委員会 2000「下総のはにわ」流山市立博物館
- 81 江 史郎 1998「119 流山廃寺」「千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)」千葉県
- 82 流山市教育委員会 1992「II. 市野谷地藏谷津遺跡」「平成3年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 83 流山市教育委員会 1997「I. 市野谷地藏谷ツ遺跡B地点」「平成8年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」

- 84 流山市教育委員会 2007「V. 志井堀ノ内遺跡」「平成17年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 85 流山市教育委員会 2009「中世の流山を探る 附. 流山市内板碑集成」流山市立博物館
- 86 大久保奈奈 2013「志井堀ノ内遺跡中世墓副葬品詳細調査報告」「研究紀要28」千葉県教育振興財團
- 87 流山市教育委員会 1996「III. 花輪城跡」「平成7年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 88 流山市教育委員会 2000「II. 名都借城跡」「平成11年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 89 流山市教育委員会 2014「I. 名都借城跡」「平成24年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 90 遠山成一・築生 衛 1998「73 小金城跡」「千葉県の歴史 資料編 中世1(考古資料)」千葉県
- 91 (財)千葉県文化財センター 1997「流山市若宮第II遺跡-都市計画道路3・3・2号線(新川南流山線)埋蔵文化財発掘調査報告書-」千葉県文化財センター調査報告第296集  
なお、調査範囲は若宮第II遺跡から加東削道跡にまたがっており、中世道構が検出された部分は加東削道跡の範囲内に当たる。
- 92 (株)地域文化財研究所 2014「加東削道跡 3次」
- 93 北澤 滋 1998「72 三輪野山遺跡群(三輪野山道六神道跡B地点)」「千葉県の歴史 資料編 中世1(考古資料)」千葉県
- 94 流山市教育委員会 2007「I. 駒木野馬土手」「平成18年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」流山市教育委員会
- 95 (公財)千葉県教育振興財團 2017「流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書9 -流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手、流山市駒木野馬土手-」千葉県教育振興財團調査報告第767集
- 96 流山市教育委員会 1988「I. 十太夫野馬土手」「昭和62年度流山市市内遺跡群発掘調査報告」
- 97 流山市教育委員会 2007「III. 十太夫野馬土手」「平成17年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 98 流山市教育委員会 2007「II. 十太夫野馬土手」「平成18年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 99 流山市教育委員会 2021「III. 十太夫野馬土手(7)」「令和元年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 100 流山市教育委員会 2021「V. 駒木中橋上遺跡 市野谷・駒木野馬土手」「令和元年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」
- 101 流山市教育委員会 2010「III. 野々下元木戸遺跡(第6次)・野々下野馬土手」「平成20年度流山市市内遺跡発掘調査報告書」

#### 上記以外の関連文献

- (財)千葉県史料研究財團編 1997「千葉県の自然誌 本編2 千葉県の大地」千葉県
- (財)千葉県文化財センター 1986「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V -谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)-」千葉県文化財センター調査報告第113集
- (財)千葉県文化財センター 1994「流山上新宿貝塚発掘調査報告書」
- 千葉県教育委員会 1995「千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 I -旧下総国地域-」
- 流山市立博物館市史編さん係編 2001「流山市史 通史編1」流山市教育委員会
- 流山市立博物館編 2015「ふるさと流山のあゆみ」流山市教育委員会

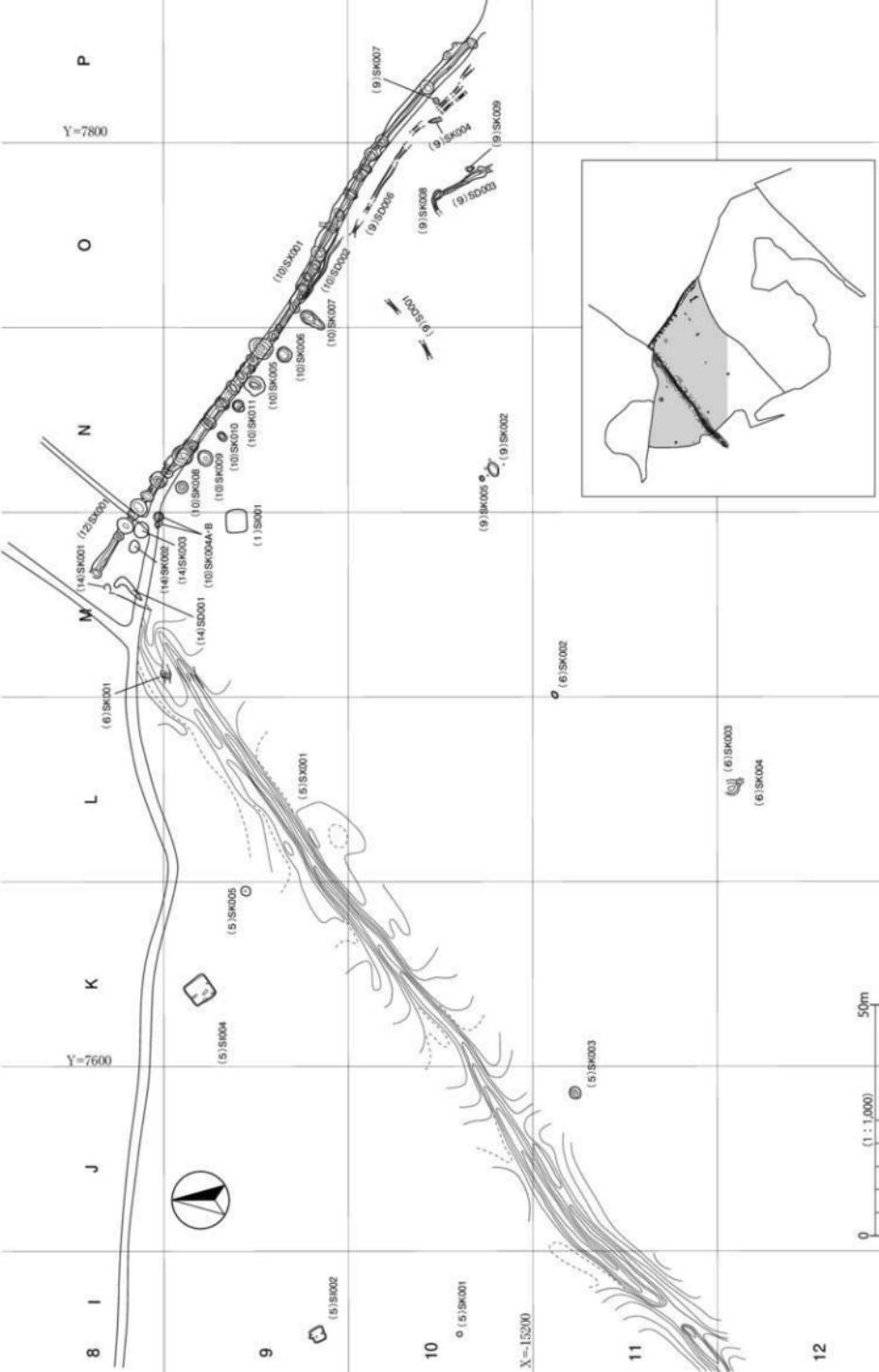
第3表 市野谷宮後遺跡(北側)・市野谷芋久保遺跡(14)上層遺構一覧表

## 市野谷宮後遺跡(北側)

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構棟別	時代	位置	備考
(1)	平成20	(1) SK0001	SK-001	聖火供奉場	古墳	M09-20-10-20B-30-40	詳細図無し
(5)	平成20	(5) SK002	SK-002	聖火供奉場	古墳	M09-21-10-20-30-40	詳細図無し
(5)	平成20	(5) SK004	SK-004	聖火供奉場	古墳	M09-20-04-13-14-23-24	詳細図無し
(5)	平成20	(5) SK001	SK-001	土坑	古文	I10-35-65	
(5)	平成20	(5) SK003	SK-003	焰穴	古文	J11-48-28	
(5)	平成20	(5) SK005	SK-005	土坑	古文	K10-49	
(5)	平成20	(5) SX004	麥芒廻し	野馬塚	古墳	H05-02, H03-02	三輪野馬塚上手
(6)	平成20	(6) SK001	SK-001	土坑	古墳	M09-31, M09-01	
(6)	平成20	(6) SK002	SK-002	土坑	古文	L11-19, M11-10	
(6)	平成20	(6) SK003	SK-003	焰穴	古文	L12-04-05-14-15	
(6)	平成20	(6) SK004	SK-004	土坑	古文	L12-15	
(6)	平成20	(6) SK005	SK-005	漢状遺構	中-近世	M09-01-10-11	
(9)	平成20	(9) SK002	SK-002	土坑	古文	N10-72-82	
(9)	平成20	(9) SX004	SK-004	焰穴	古文	P10-41-51	
(9)	平成20	(9) SK005	SK-005	土坑	古文	N10-71-72	
(9)	平成20	(9) SK007	SK-007	シレ穴	近世	P10-42-52	鳥巣出土
(9)	平成20	(9) SX008	SK-008	土坑	中-近世	C10-47-57	(9) SK0001より古
(9)	平成20	(9) SX009	麦芒廻し	土坑	中-近世	C10-67-68	
(9)	平成20	(9) SK001	SK-001	漢状遺構	中-近世	N10-48-49, O10-21	
(9)	平成20	(9) SK003	SK-003	漢状遺構	中-近世	O10-46-47-56-57-67-68-78	(9) SK0002より古
(9)	平成20	(9) SK006	SK-006	漢状遺構	中-近世	G10-05-16-18-27-29-30-31-34-35-36-37-38-39-40-41-51-52-53-54	
(10)	平成21	(10) SK004A	SK-004	土坑	古文	M08-99	(10) SK0001より古
(10)	平成21	(10) SK004B	SK-004	シレ穴	近世	M08-99, N08-90	(10) SK004Aより古
(10)	平成21	(10) SK005	SK-005	シレ穴	近世	N08-46-47-56-57	
(10)	平成21	(10) SK006	SK-006	シレ穴	近世	N08-68-69	人骨出土
(10)	平成21	(10) SK007	SK-007	シレ穴	近世	O09-70-71-80	
(10)	平成21	(10) SX008	SK-008	シレ穴	近世	O09-01-11	
(10)	平成21	(10) SX009	SK-009	シレ穴	近世	N09-12-13-22-23	
(10)	平成21	(10) SX010	SK-010	シレ穴	近世	N09-24-33-34	
(10)	平成21	(10) SK011	SK-011	シレ穴	近世	N09-35-36-45-46	
(10)	平成21	(10) SD002	SD-002	漢状遺構	近世	O09-71-72-82-84-93-94	
(10)	平成21	(5) SK001	SA-001	野馬塚	近世	M08-84-85	三輪野馬塚上手に伴う野馬塚 詳細図無し
(10)	平成21	(10) SX001	SX-001	漢状遺構	近世	-	
(10)	平成21	(10) SX001 a	SX-2	シレ穴	近世	P10-65-75	
(10)	平成21	(10) SX001 b	SX-3	シレ穴	近世	P10-42-43	
(10)	平成21	(10) SX001 c	SX-5	シレ穴	近世	O10-19-29, P10-10-20	
(10)	平成21	(10) SX001 d	SX-6	シレ穴	近世	O10-19	
(10)	平成21	(10) SX001 e	SX-7	シレ穴	近世	O10-08-18	
(10)	平成21	(10) SX001 f	SX-8	シレ穴	近世	O10-08-18	
(10)	平成21	(10) SX001 g	SX-7	シレ穴	近世	O09-97, O10-07	
(10)	平成21	(10) SX001 h	SX-8	シレ穴	近世	O09-95-96	
(10)	平成21	(10) SX001 i	SX-8	シレ穴	近世	O09-95-95	
(10)	平成21	(10) SX001 j	SX-9	シレ穴	近世	O09-83-84	
(10)	平成21	(10) SX001 k	SX-9	シレ穴	近世	O09-73-83	
(10)	平成21	(10) SX001 l	SX-0	シレ穴	近世	O09-72-73-82	
(10)	平成21	(10) SX001 m	SX-N	シレ穴	近世	O09-71-72	
(10)	平成21	(10) SX001 n	SX-M	シレ穴	近世	O09-71-72	
(10)	平成21	(10) SX001 o	SX-L	シレ穴	近世	O09-61-70-71	
(10)	平成21	(10) SX001 p	SX-K	シレ穴	近世	O09-60, O09-60	
(10)	平成21	(10) SX001 q	SX-J	シレ穴	近世	O09-59-69	
(10)	平成21	(10) SX001 r	SX-I	シレ穴	近世	O09-49-59-59	
(10)	平成21	(10) SX001 s	SX-H	シレ穴	近世	O09-49-58	
(10)	平成21	(10) SX001 t	SX-G	シレ穴	近世	O09-47-48	
(10)	平成21	(10) SX001 u	SX-F	シレ穴	近世	O09-37-47	
(10)	平成21	(10) SX001 v	SX-E	シレ穴	近世	O09-36-37-46	
(10)	平成21	(10) SX001 w	SX-D	シレ穴	近世	O09-25-35-36	
(10)	平成21	(10) SX001 x	SX-C	シレ穴	近世	O09-24-25-34-35	
(10)	平成21	(10) SX001 y	SX-B	シレ穴	近世	O09-43	
(10)	平成21	(10) SX001 z	SX-A	シレ穴	近世	O09-02-03-12-13	
(10)	平成21	(10) SX001aa	SX-AA	シレ穴	近世	N08-03, N09-01	

## 市野谷芋久保遺跡(14)

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構棟別	時代	位置	備考
(14)	平成20	(14) SK001	SK-001	シレ穴	近世	M08-66-75-76	詳細図無し
(14)	平成20	(14) SK002	SK-002	シレ穴	近世	M08-57-58	詳細図無し
(14)	平成20	(14) SK003	SK-003	シレ穴	近世	M08-68-89-98-99	詳細図無し
(14)	平成20	(14) SD001	SD-001	漢状遺構	中-近世	M08-76-83-86	詳細図無し
(14)	平成21	(5) SX001	SA-001	野馬塚	近世	M08-74-84-85	三輪野馬塚上手に伴う野馬塚 詳細図無し
(32)	平成21	(32) SX008	-	シレ穴判	近世	M08-56-66-68-77-79-88-89B- 80-81-90-92, S09-01	新古街地調査区(アーリッド番号は運動公園調査の時)



第9回 遺稿全體

## 第2章 繩文時代の遺構と遺物

### 第1節 概要

縄文時代の土坑は全部で10基検出されている。調査区全体に散在しており、集中箇所と言えるものはない。うち4基は陥穴である。隣接する市野谷芋久保遺跡（新市街地地区）においても、市野谷宮後遺跡に接する部分を中心に陥穴がまとまって検出されている。

検出された土坑は、総じて規模が大きく深さが2mを超えるものである。中・近世と考えられるシシ穴とした土坑に形態・規模が類似するものがあり、遺物が伴わないものについては、調査現場における覆土についての所見などによって判断したものがある。今回報告する北側区域のほとんどは南側に緩やかに傾斜する斜面地で、下総台地で一般的にみられる縄文時代の遺物を包含するⅡ層の遺存が悪いことから、縄文土器などの包含層遺物の出土量は少なかった。

### 第2節 遺構

#### (5) SK001 (第10図、図版2・12)

状況 東西長118cm、南北長124cm、最大深17cmを測る。平面形状は不整円形で、断面形は皿状を呈する。

出土遺物 1はII0-55グリッド出土の土器片であるが、確認トレンチで検出された本土坑の範囲を精査している際に出土したため、関連があるものとしてここに掲載した。胎土に植物纖維を含み、器面にL無節縄文が施される。前期黒浜式の深鉢胴部である。

時期 出土土器から前期中葉と判断される。

#### (5) SK003 (第10図、図版2)

状況 長軸長257cm、短軸長221cm、最大深192cmを測る。平面形状は検出面が不整円形、底面は隅丸方形を呈する。長軸方位はN-48°-Eである。覆土は上側にロームブロックを多量に含む層が堆積し、下側はしまりの弱い暗褐色土もしくは黒褐色土が堆積している。底面は概ね平坦である。陥穴と考えられる。

出土遺物 図化できる遺物は出土しなかった。

時期 断面の形状などから考えて早期もしくは前期と考えられる。

#### (5) SK005 (第10図、図版2)

状況 東西長206cm、南北長212cm、最大深67cmを測る。平面形状は正円に近い不整円形で、断面は插鉢状を呈する。底面は丸底で平坦な面がない。

出土遺物 図化できる遺物は出土しなかった。

時期 覆土の状況から縄文時代と考えられる。

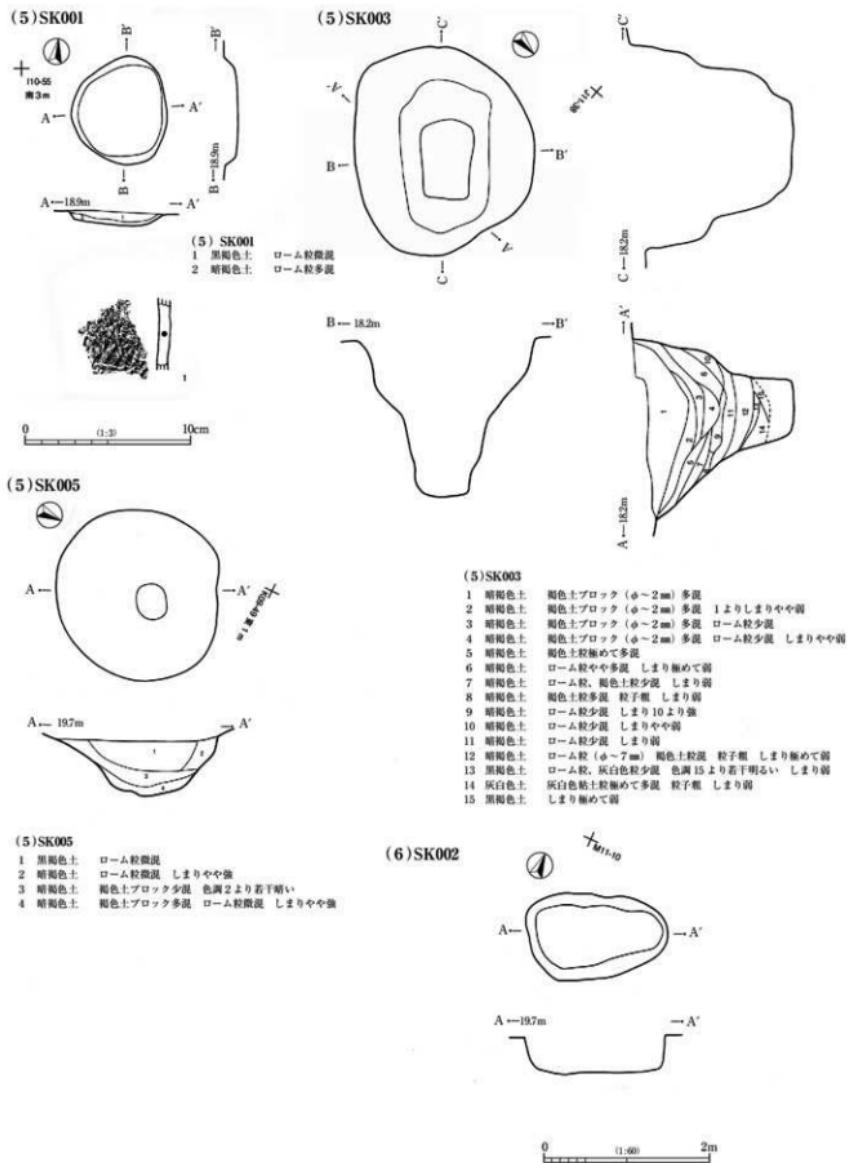
#### (6) SK002 (第10図、図版2)

状況 東北東～西南西方向に長軸を持つ土坑で、長軸長が174cm、短軸長が108cm、最大深は46cmを測る。

平面形状は不整形で、断面は逆台形を呈する。

出土遺物 図化できる遺物は出土しなかった。

時期 覆土の状況から縄文時代と考えられる。



第10図 繩文時代土坑(1)

#### (6) SK003 (第11図、図版2・13)

**状況** 下層確認調査に際し発見されたため、確認調査で終了しており、検出面の一部は確認調査時に掘削してしまったほか、完掘仕切っていない部分が若干ある。長軸長は推定340cm、短軸長は推定320cm、最大深は260cmを測る。平面形状は検出面が楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。長軸方位はN-29°-Wである。覆土は下部壁面が崩落したと思われるロームブロックを主体とした堆積があり、上部はソフトロームを多量に含む自然堆積層となっている。底面は概ね平坦である。陥穴と判断される。

**出土遺物** 1は安山岩製の打製石斧である。現存長50.0mm、最大幅77.3mm、最大厚18.0mm、重量87.46gを測る。中途から欠損しているが、分銅型の打製石斧と考えられる。扁平蝶を素材としている。

**時期** 遺物から判断できないが、形状などから考えて早期もしくは前期と考えられる。

#### (6) SK004 (第11図、図版2)

**状況** 下層確認調査に際し発見されたため、検出面については一部推定復元している。(6)SK003の南東側に接するように位置する。両者の新旧関係は不明である。長軸長は推定150cm、短軸長は推定130cm、最大深は160cmを測る。平面形状は検出面が不整円形、底面は隅丸方形を呈する。長軸方位はN-16°-Wである。底面は概ね平坦である。陥穴と判断されるが規模は(6)SK003に比べかなり小さい一方、底面の規模は大きい。

**出土遺物** 図化できる遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物から判断できないが、形状などから考えて早期もしくは前期と考えられる。

#### (9) SK002 (第11図、図版3)

**状況** 東北東～西南西方向に長軸を持つ土坑で、この方向の長さが333cm、直交する方向は212cm、最大深は29cmを測る。平面形状は不整円形で、断面は皿状を呈するが、底面は平坦ではなく北東側がやや深い。覆土は砂質土が主体である。周囲に直径30cm～40cmのピットが4基存在する。東側のピットは深さ約50cmであるが、他の3基は深さ約10cmと浅い。(9)SK002に伴うものであるかは不明である。

**出土遺物** 図化できる遺物は出土しなかった。

**時期** 覆土の状況から縄文時代と考えられる。

#### (9) SK004 (第12図、図版2)

**状況** 下層確認調査中に発見されたため、検出面については一部推定復元している。長軸長は推定320cm、短軸長は80cm、最大深は210cmを測る。平面形状は検出面、底面ともに長楕円形である。長軸方位はN-17°-Wである。覆土は壁から崩落したロームブロックが主体である。底面は狭く緩やかに南方向に傾斜している。北壁の中途中に段状の平場が存在するが、人為的なものではなく崩落によって形成されたと思われる。陥穴と判断される。

**出土遺物** 図化できる遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物から判断できないが、形状などから考えて早期と考えられる。

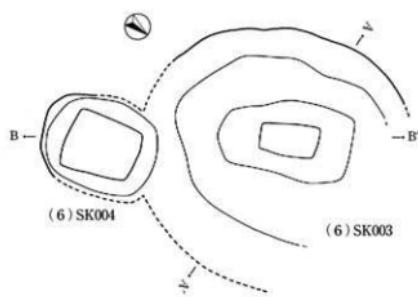
#### (9) SK005 (第11図、図版3)

**状況** (9)SK002の北西側に位置し、長軸方向が(9)SK002とほぼ同じである。長軸長127cm、短軸長78cm、最大深44cmを測る。平面形状は楕円形を呈し、断面形状は楕形を呈する。

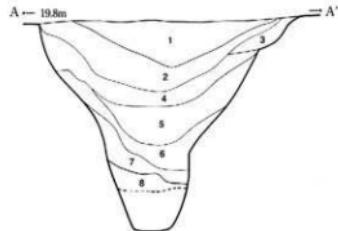
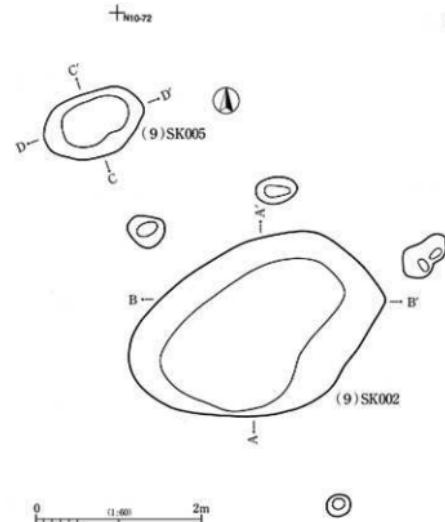
**出土遺物** 図化できる遺物は出土しなかった。

**時期** 覆土の状況から縄文時代と考えられる。

(6) SK003・SK004

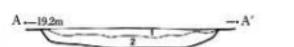
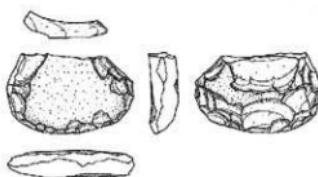


(9) SK002・SK005



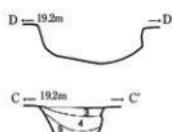
(6) SK003

- 1 剥離色土  
2 開土  
3 剥離色土  
4 黒褐色土  
5 黑褐色土  
6 開土  
7 開土  
8 開土
- テフラ状の褐色土層 粘性やや強  
ソフトローム（ブロック状） 砂質で乾くともろい  
ソフトロームに黒褐色土混 粒子粗  
テフラ混 粘性やや強  
よりソフトロームの前段土混入 5の黒褐色土多少混  
ハドロームブロック層 6・8のような混入少ない  
ハドロームブロック層 7よりテフラ状褐色土の混入目立つ



(9) SK002

- 1 剥離色土 ローム粒混 砂質 しまり強  
2 剥離色土 ローム粒混 砂質 しまり強



(9) SK005

- 3 剥離色土 ローム粒混  
4 黒褐色土 ローム粒混  
5 剥離色土 黒褐色ハードロームブロック層

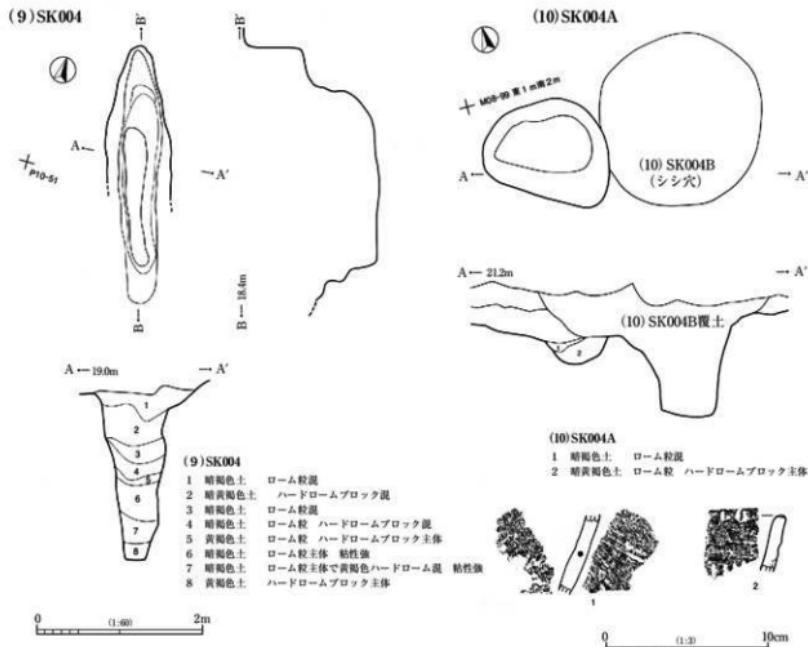
第11図 繩文時代土坑(2)

(10) SK004A (第12図、図版8・12)

**状況** 本土坑は当初近世シシ穴に隣接していたためシシ穴と考えられたが、掘り上げたところ近世シシ穴に壊されている状況が確認された。セクションを検討したところ、深くて大きな土坑は表土直下から掘り込まれておりシシ穴で間違いないと判断されたが、本土坑はそれよりも古い土坑と判断され、(10) SK004Aとして分離したものである(シシ穴は(10) SK004Bとした)。セクション図と平面図では土坑の規模にかなりの齟齬があるが、セクション図を実測した位置が土坑の端部に近く正確な実測が難しかったことに加え、平面実測の際、地山のソフトローム層の傾斜変換点を土坑の開口部と判断したためと思われる。規模は、東西長150cm、南北長142cm、最大深44cmを測る。平面形状は不整円形、断面形状は楕円形を呈する。

**出土遺物** 出土遺物は全て一括取り上げられているため、シシ穴側からの出土である可能性はあるが、仮にそうであっても本土坑に帰属する可能性が高いと判断されるものを掲載した。1は胎土に植物纖維をやや多く含み、表面に貝殻条痕が施される。早期後葉の条痕文土器の深鉢胴部と判断される。2は口唇上に棒状工具による刺突が施され、無文の口縁部を介して縦位の短沈線列が配される。前期後葉の浮島I式の深鉢口縁部である。

**時期** 前期の可能性が高いと思われる。



第12図 繩文時代土坑(3)

### 第3節 遺構外出土遺物

#### 1 繩文土器(第13・14図、図版12)

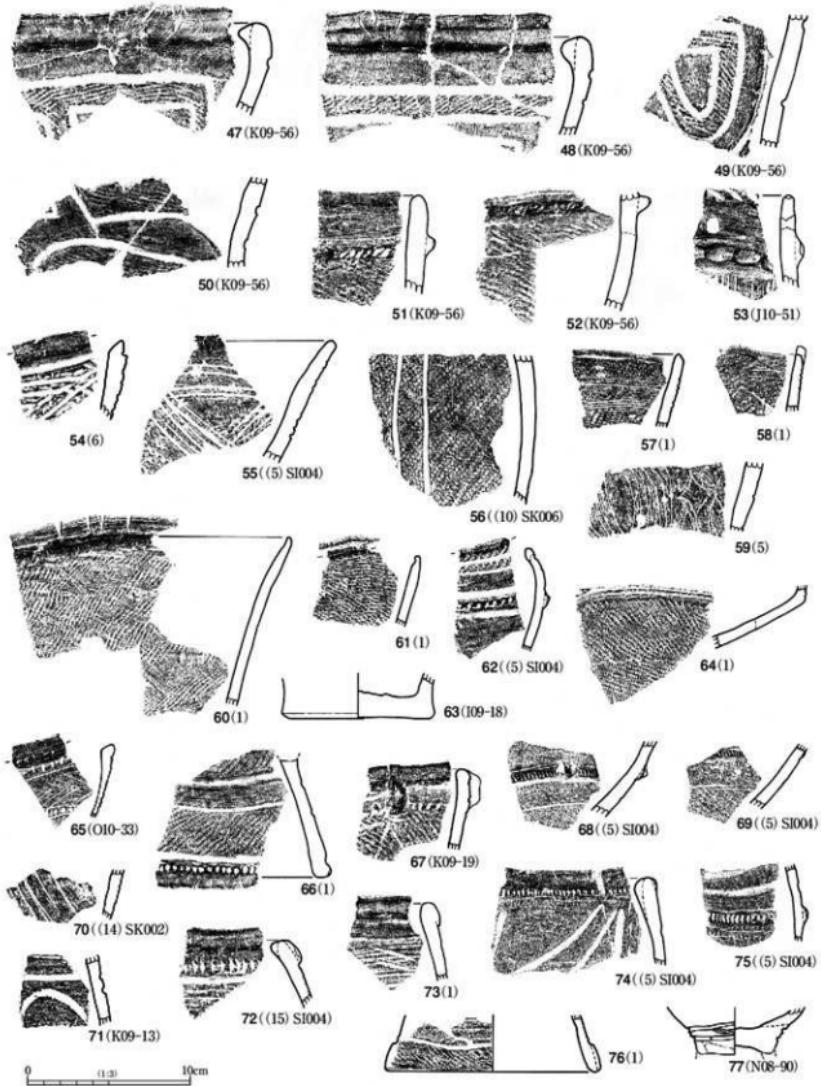
調査面積に比して、縄文時代遺物の出土量はいたって少なかった。下総台地上に所在する遺跡において一般的に見られる縄文時代の遺物を包含するⅡ層の遺存があまり良くないことも影響していると考えられる。出土した縄文土器は、早期、前期、中期、後期、晩期の各時期の諸型式が断続的に出土しており、いずれも微量である。掲載した各土器には、調査次の番号、統いて出土した遺構番号を記しているが、グリッド表記のものには調査次の記載を省略した。トレンチ出土のものについては調査次の番号を表記し、トレンチ番号などは省略している。

1は撫糸文土器である。やや間隔が開いた縱位の撫糸施文であり、夏島式の深鉢胴部と思われる。2は早期条痕文土器である。胎土に少量の植物纖維を含む。やや開いた底部側から段状に屈曲して直立する器形を呈し、屈曲部に円形刺突が配され、口縁側には集合沈線が充填される。器表面は貝殻ではなくヘラ工具による調整痕が認められる。鶴ガ島台式の深鉢胴部である。3～10は前期中葉黒浜式である。黒浜式は個体数としては多かったが、器面の状況が悪いものや小破片が多いため掲載数は少なくなった。3・4は深鉢口縁部で、いずれも単節縄文が施される。5～7は深鉢胴部で、附加条縄文が施される。8は同じく深鉢胴部で、半截竹管によるいわゆる肋骨文が描かれる(文様の向きが不自然であるが、破片の器形を見る限り図のようになる)。9・10は深鉢底部である。9は復元底径10.0cm(残存率30%)、現存器高2.5cmで、外面に撫糸文が施される。10は復元底径6.2cm(残存率30%)、現存器高2.2cmで、外面に単節縄文が施される。11～18は前期中葉諸磧a式である。11・16～18は深鉢口縁部で、11は半截竹管を使用した押引文が横位に2列施される。16は肥厚させた口縁部に半截竹管による沈線を多重に施す。17・18は同一個体で、やや内傾した口縁に沿って2列の押引文が配され、突起に沿っても押引文が配される。突起の部分は表裏が分離するような形状を呈している。12・15は深鉢胴部で、12は結節のある単節縄文を地文とし、半截竹管による押引文によって木葉状の意匠が描かれる。15は縱位の隆起線上に半截竹管による刺突を施し、両側を斜行する沈線で充填する。肋骨文の変形といえる。13・14は口縁が強く内傾する浅鉢で、同一個体である。19・20は諸磧b式の深鉢で、同一個体である。19は強く内傾する口縁部で、2本の浮線文が口縁に沿って貼り巡らされる。20は胴部で同じ浮線文がやはり2本貼り付けられる。21・22・25は浮島I式の深鉢である。21は口縁部で外側に太い棒状工具による押圧が連続して巡らされる。22は山形の突起が連続して配されるもので、その下は半截竹管による横位の沈線が巡らされる。25は胴部で撫糸文を地文とし、2本の隆起線を横位に巡らせ半截竹管によるキザミが間隔を開けて施される。23・24・26～31は浮島II式である。23・24・27・28は同一個体と思われる深鉢である。23・24は口縁部で、肥厚させて口唇上に丸棒状工具によるキザミを施す。胴部側は変形爪形文を縱位に施文する。27・28はその変形爪形文を縱位もしくは斜位に施す胴部である。26・29～31も深鉢胴部で、いずれも変形爪形文を施す。32は興津式の深鉢胴部で、沈線区画に貝殻文を充填する。33は細い粘土紐を鋸歯状に貼り付ける深鉢胴部で、大木4式の影響を受けたものと思われる。胎土は長石や雲母片など夾雜物を多く含み、他の土器とは異質な印象を受ける。

34・35は横位の結節文が施されるもので、中期初頭の深鉢胴部と思われる。36～38は中期前葉阿玉台開けてIb式の深鉢である。36は口縁部で、縱位の隆起線に帯状の粘土を横位に貼り付けて突起状に成形している。37も口縁部で、強く外反する突起に断面三角形の隆起線を方形に貼り付ける。38は胴部で、断面三角形の隆起線を縱位に配し、直交するように刺突列を施す。39・40は中期前葉勝坂式深鉢と思われる。



第13図 出土縄文土器(1)



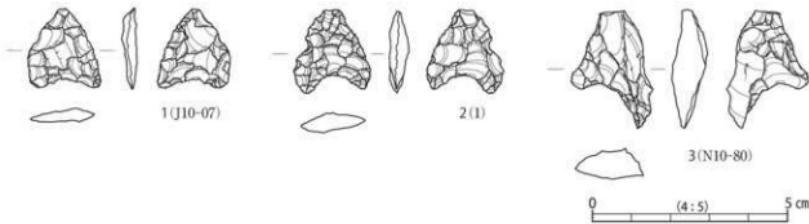
第14図 出土縄文土器(2)

39は胴部で、帯状に肥厚させた粘土を縦位に貼り付け集合沈線を施す。その左右は器壁が極めて薄いが器面調整は難である。40は口縁に沿ってベン先状工具による押引文を配し、その下に棒状工具による鋸歯文を配する。右側はキャタピラ文が弧状に配されており、内側に隆起線が貼り付けられていたと思われる。口唇上には突起が付いていた痕跡があるが、形状は不明である。41～44は中期後葉加曾利E式の深鉢胴部である。41は断面三角形のやや太い隆起線を弧状に貼り付ける。42はRLR複節縄文を縦位に施し、沈線で区画する。44は復元底径7.4cm(残存率40%)、現存器高39cmで、櫛羽状の沈線が縦位に施される。

45～50は後期初頭称名寺1式の深鉢である。45・46は同一個体の口縁部である。筒状の突起から隆起線を垂下させ、胴部の文様帶を縦位区画するものと思われる。47～49も同一個体と思われる。51～53は網取式の影響を受けたと思われる深鉢で、口縁部は直立もしくは若干内傾し、胴部が膨らむ器形を呈すると思われる。51・52は同一個体で、口縁の下側約2cmの位置に横位の隆起線を貼り付け、縄文原体を押圧する。口縁側は無文帶とし、胴部側に無節縄文を施す。53も同様の構成をとるが、隆起線上は指頭押圧で、口唇上に丸棒状工具によるキザミを施す。45～52はいずれもK09-56グリッドから出土している。54～61・63は後期前葉堀之内式の深鉢である。54は波状口縁で、縄文地文に口縁に沿って沈線を集合させる。56は胴部で、縄文地文に沈線を2本垂下させる。以上2点は堀之内1式である。55は口縁がやや強く外反する器形を呈し、粗い縄文を地文として沈線で幾何学的な意匠を描出する。57・58は同一個体で、小突起を持つ口縁部である。縄文地文に口縁に沿った沈線を配する。60・61も同一個体で小突起を持ち、内面口唇直下は抉り状の粗雑な沈線が配される。こちらは縄文施文のみである。以上5点は堀之内2式である。59は重弧状の集合沈線を配する胴部である。63は底部で、復元底径9.0cm(残存率30%)、現存器高2.8cmである。62は加曾利B3式から曾谷式の深鉢口縁部である。口縁に沿って帯状に縄文を施し、沈線で区画する。無文帶を隔てて沈線区画隆起線を配しキザミを施す。64は加曾利B式から曾谷式と思われる浅鉢胴部である。大きく開く胴部、口縁部は屈曲して直に立ち上がるか外反すると思われる。口縁部には横走する沈線が認められる。65は加曾利B2式～B3式の深鉢口縁部である。口縁直下と胴部の沈線区画刺突列の間に、丸棒状工具による綾杉状の沈線を配する。66は加曾利B3式と思われる台付鉢の台部と考えられる。横位の区画沈線を先に配し、後から縄文を充填している。67は後期後葉安行1式の深鉢口縁部である。口縁部は器面が荒れており詳細は不明であるが、貼瘤下端部から下側は、横位の刺突列と瘤を起点とする弧線で括られた範囲に縄文が充填される。68・69は同一個体で、安行2式の浅鉢胴部である。細かいキザミが施された隆起線が横位に巡り、ブタの鼻状の瘤が貼り付けられる。70・72・73は後期後葉から晚期前葉の粗製深鉢である。70・72は条線に先端が尖った棒状工具が使用されている。71は安行3c式の深鉢胴部である。破片上端部から上は屈曲して外反する器形を呈する。74・75は晚期初頭の粗製深鉢で同一個体である。口縁部沿いの紐線文は幅が狭くキザミが密に施されるなど古相を呈するが、胴部側は条線が施されなくなり丸棒状工具による縦位あるいは斜位の意匠が配される。76は安行3a式もしくは3b式の台付鉢台部である。復元底径13.2cm(残存率20%)、現存器高3.5cmである。帯状文部分は幅が一定ではなく、沈線より上側の無文帶の処理もあり丁寧ではない。77は台付鉢の台部で、径は4.4cm、現存器高は2.9cmである。2本の沈線が巡らされる。器面の成形は内・外面ともやや粗雑で、上下とも接合面で剥落している。安行3c式もしくは3d式と思われる。

## 2 石器 (第15図、図版13)

土器と同様に出土した縄文時代石器の点数は微量である。帰属する時期は、前期ないしは中期と推測される。1・2は石鎚である。いずれも凹基無茎石鎚で平面形状は正三角形に近い。1は現存長20.3mm、最大幅19.0mm、最大厚4.3mm、重量1.67g、2は現存長21.2mm、最大幅19.2mm、最大厚5.2mm、重量1.66gを測る。3は調整の剥離痕が認められる剥片である。現存長30.9mm、最大幅20.5mm、最大厚9.6mm、重量3.22gを測る。黒曜石製の部厚い剥片を素材とし、調整は素材剥片のほぼ全面に及んでいる。特に素材剥片末端部側からの調整が顕著であり、調整部位や形状から石鎚の作出を意図しているものと考えられ、石鎚の未成品であろう。



第15図 出土縄文時代時代石器

## 第3章 古墳時代の遺構と遺物

### 第1節 概要

古墳時代の遺構は竪穴住居跡に限られ、調査区北部においてわずかに2軒が検出されている。地形的には、南への緩斜面の中でもあまり傾斜がきつない北側に構築されている。2軒とも中期前半の竪穴住居跡と考えられ、時期的には近接した時期に營まれたものである。近隣の調査事例をみると市野谷入台遺跡や市野谷宮尻遺跡で古墳時代前期から中期の大規模な集落が形成されており、それらの中心的集落から離れた外縁部に位置しているものの、時期的には関連性があるものと考えられる。

### 第2節 竪穴住居跡

#### (5) S1004 (第16~18図、図版3・13・14)

**形状・規模** 主軸長は5.42m、横軸長は5.41mである。平面形は正方形に近い台形を呈する。確認面からの深さは26cm~34cmである。主軸方位はN-34°-Wである。

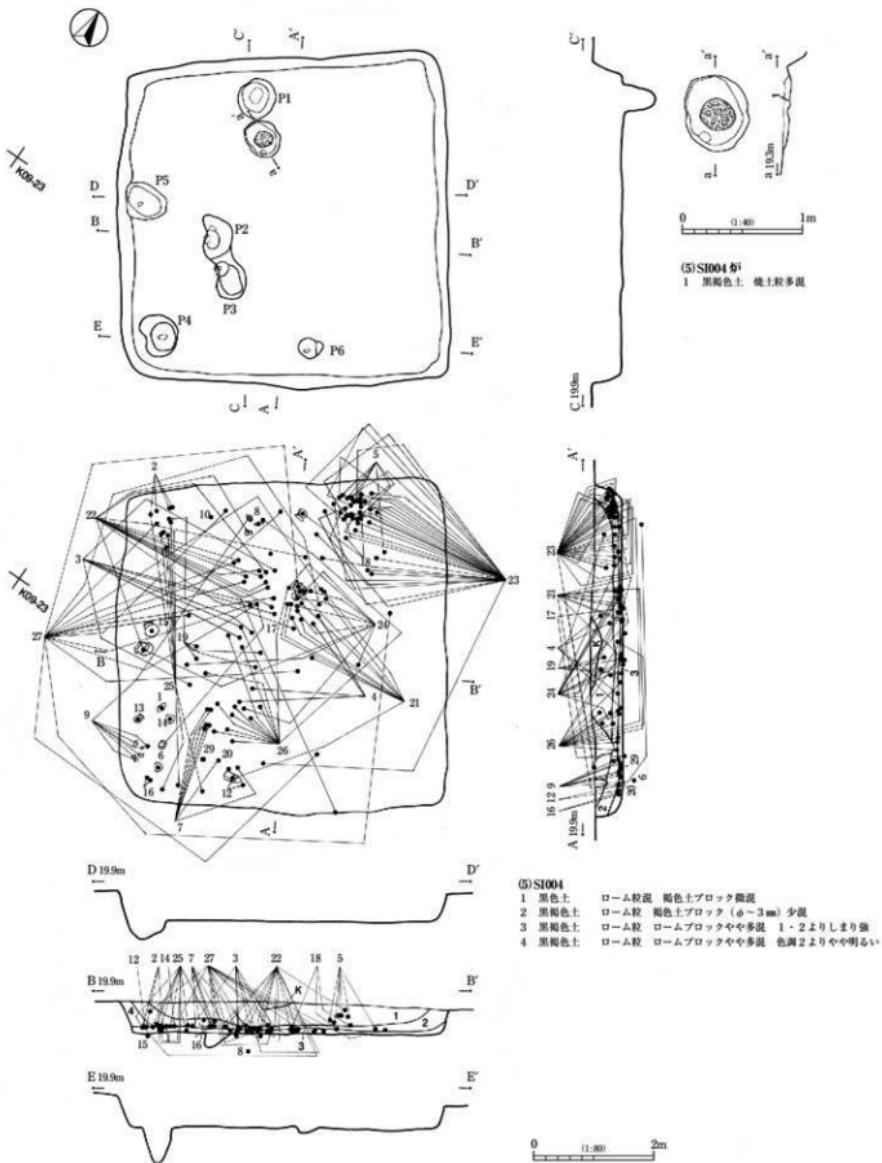
**床面・壁溝** 床面は概ね平坦である。硬化面は特に認められなかった。壁溝は検出されていない。

**覆土** 上層はローム粒を含む黒色土がレンズ状に堆積し、下層はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土が主体である。

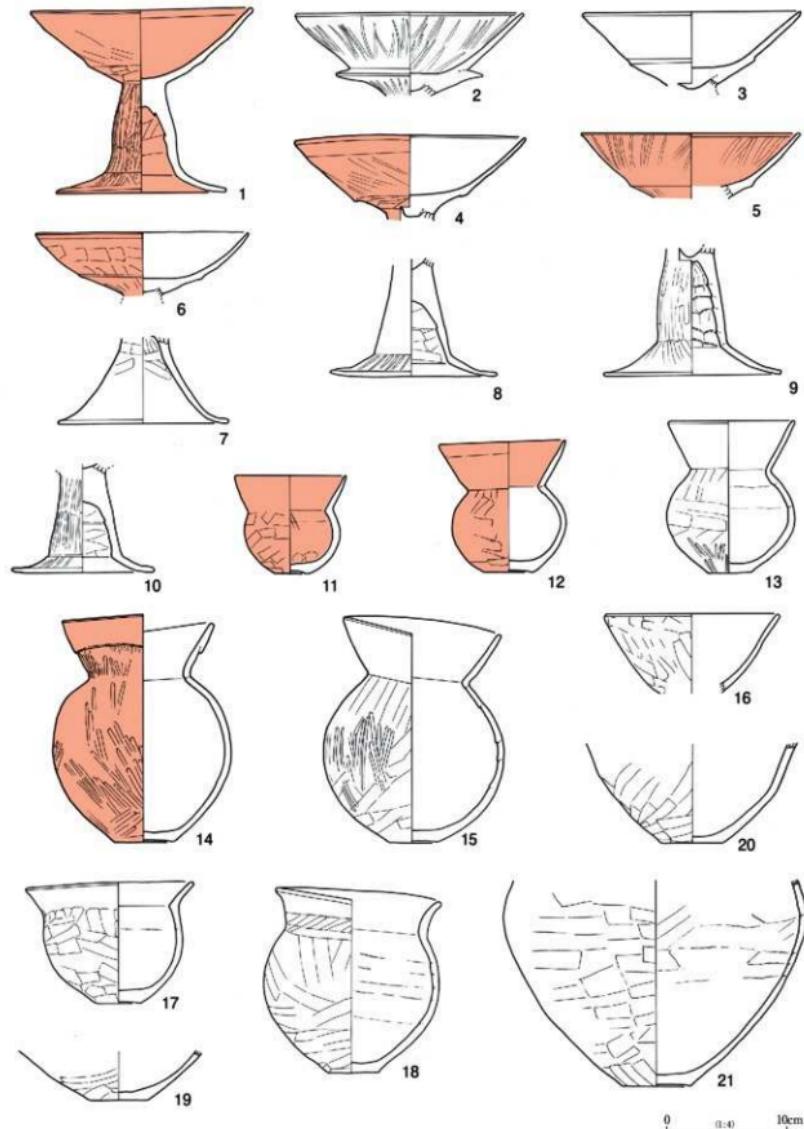
**柱穴・ピット** ピットは6基検出されている。そのうちP2・P3は2基のピットの切り合いである。P6を除いて住居跡南西半分から検出されている。P1が径60cm×深さ51cm、P2が長軸74cm×短軸42cm×深さ29cm、P3が長軸73cm×短軸50cm×深さ34cm、P4が長軸70cm×短軸54cm×深さ59cm、P5が長軸74cm×短軸58cm×深さ28cm、P6が長軸42cm×短軸32cm×深さ20cmをそれぞれ測る。P4は規模や形状、位置から考えて貯蔵穴と判断される。P1もP4と類似する規模で、貯蔵穴の可能性がある。P2・P3は2基とも斜めに掘り込まれており、先端もかなり細くなっているため柱穴とは考えにくい。南壁寄りの中央部で検出されたP6は炉に対向する位置であり、出入口ピットの可能性が考えられる。

**炉** 北壁ほぼ中央から約1m内側に位置する。長軸62cm×短軸52cmの楕円形を呈し、深さは5cmと浅い。覆土は焼土粒を多量に含む。炉床面の中央部が熱を強く受け、特徴的に硬化していた。

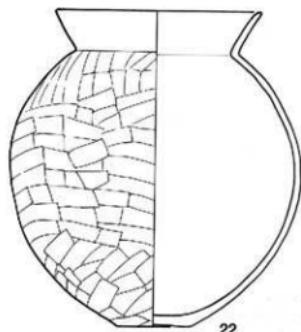
**出土遺物** 1~10は土器師高坏である。1はほぼ完形で残存するが、裾部周縁は打ち欠いた痕跡が認められる。坏部内面は磨耗が顕著である。脚部は中膨れで裾部が強く外反する。2は有段高坏である。内・外面とも粗い縱方向のミガキが施される。脚部との接合面が残存する。3は脚部から口縁部まで、途中弱い段を経て直線的に外反する。脚部との接合面が残存する。4は脚部から反り返るように強く外反し、坏底部から強く屈曲して直線的に立ち上がる。内面の磨耗が顕著である。脚部との接合面が残存する。5は4ほどではないが坏底部が屈曲し、器壁はやや丸みを帯びて立ち上がる。内面は底部付近の磨耗がやや顕著である。6は脚部から口縁部まで器壁が丸みを帯びて立ち上がる。坏底部に段が認められるものあまり強くない。内面はやや磨耗している。脚部との接合面が残存する。7は脚部が坏底部からハの字状に開くものである。8~10は脚部が柱状を呈し、裾部が強く屈曲して開く。坏部との接合面が残存する。9は脚部がやや中膨れしており、内面に輪積み痕が残存する。11~13は小型壺(壙)である。11は頸部の絞りが強くないが、口縁部の開きは大きい。底部内面に指頭成形痕が残る。全体に丁寧な調整である。12は胴部



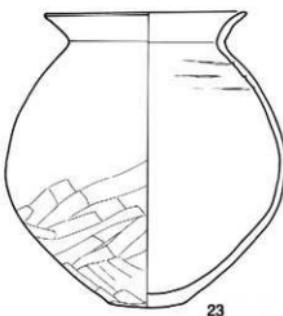
第16図 (5) SI004住居跡



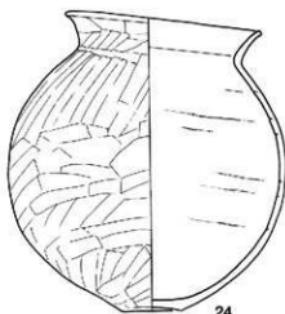
第17図 (5) SI004住居跡出土遺物 (1)



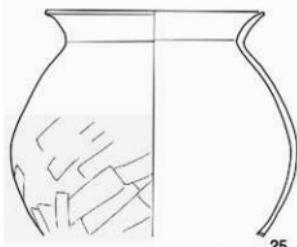
22



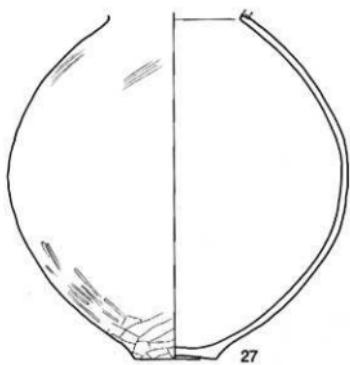
23



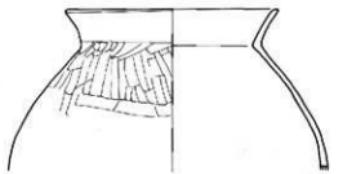
24



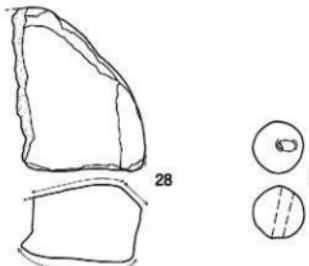
25



27



26



28

29



第18図 (5) SI004住居跡出土遺物(2)

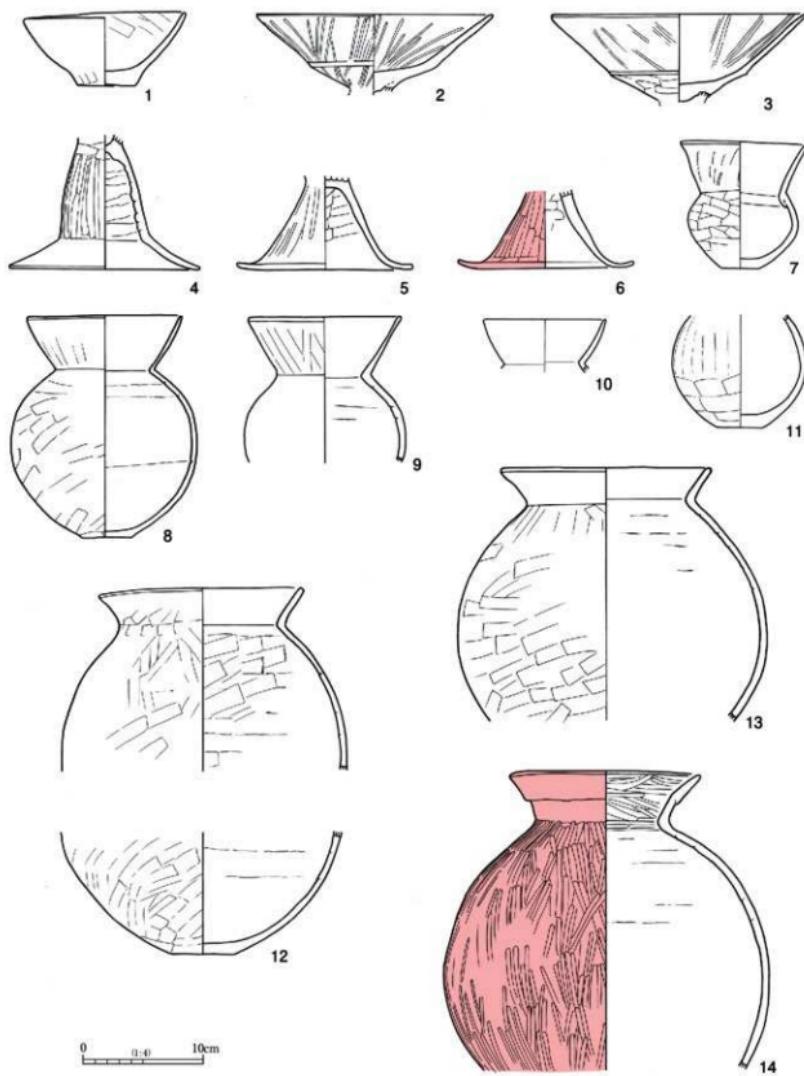
がややつぶれたような形状であり、口縁部は直線的に強く外反する。内面の剥落が顕著である。13は球形の胴部から口縁部が直線的に外反する。熱によると思われる磨耗が認められるが、全体に状況は良好である。内面上部に輪積み痕が残る。14・15・27は壺である。14は複合口縁を持つもので、胴部中央付近にススが付着するほか、熱によると思われる剥落が認められる。胴部上半には刃物による擦痕が認められる。15は全体形状がかなり歪なものである。外面は全体にススが付着するほか、熱によるとと思われる剥落がやや顕著に認められる。内面に輪積み痕が残る。27は口縁部が欠損するほか、頸部付近に熱を受けた痕跡が認められる。16は鉢である。底部は遺存していないがかなり小さいと思われ、器壁が丸みをもって立ち上がる。調整はヘラケズリ痕が目立ち、かなり粗い。17・18は小型壺である。17は口縁部が強く外反し、口径は胴部径より大きい。頸部のヘラケズリ痕はかなり雑である。18は頸部がやや直立するように立ち上がるってから口縁部へ向かって外反する。19～21は壺もしくは壺の底部である。20は輪積み部分で欠損している。21は内面に輪積み痕が残る。22～26は壺である。22は外面がヘラケズリ調整、内面はナデ調整され、全体に丁寧な仕上がりである。外面中央部付近にススが付着する。23は丸底で口縁部が強く外反し、胴部は中央よりやや下側に最大径をもつ。内面上部に輪積み痕が残る。24は形状が歪であるが、熱はあるまい受けおらず器面は良好である。内面は輪積み痕が顕著に残る。25は全体に熱を強く受けており、特に下半部は器面の磨耗が顕著である。26は上半分が遺存する。頸部付近にケズリ調整が顕著に残る。28は砂岩製の砥石である。K09-13グリッド出土扱いとなっていたが、当住居跡に帰属するものと判断した。現存長10.0cm、最大幅8.1cm、最大厚4.8cm、重量569.85gを測る。図の左側と下側は欠損していたが、それ以外の面はほぼ全てに研磨痕が認められる。下面には鉄滓を含むと思われるタール状の物質が付着する。29は土玉である。径は21.1mm～21.4mm、厚さ21.4mm、重量8.61gを測る。孔の径は上端部が4.9mm～6.4mm、下端部が5.3mmである。胎土は粗く砂粒が多く含み、表面もやや磨耗している。

#### (1) SI001 (第19図、図版3・14・15)

当遺構については発掘調査で作成された図面が所在不明となっており、遺構に関する詳細な記録は不明である。第9図に位置図は記載したが、これは調査終了時までに作成した配置図をもとにしている。写真から、規模や形状は(5)SI004とはほぼ同じ規模で、主柱穴が4本あり、北壁と思われる壁中央付近に炉が構築されている。炉の隣と南西隅と思われる位置には貯蔵穴が確認できる。出入口ピットは見当たらない。貯蔵穴から14の壺が出土している。

**出土遺物** 1は土師器壺である。成形は全体に雑で、口唇は剥落が目立つ。2～6は高壺である。2・3は壺部で、脚部から弱い段を経て口縁部に向かって直線的に開く。いずれも脚部との接合面が残存する。4～6は脚部である。4は中膨れで裾部が屈曲して強く外反する。壺部との接合面が残存する。5・6は壺底部からハの字状に開き、端部が上に向かって反り返る。7・9～11は小型壺(壺)である。7は胴部がややつぶれたような形状で、絞りの弱い頸部から長い口縁部が外反するように立ち上がる。頸部内面に接合痕が残る。9は胴部から直線的に長い口縁部が立ち上がり、口径は胴部最大径に近い大きさである。内面に輪積み痕が残る。10は口縁部で丸みを帯びて立ち上がる。全体に熱を強く受けている。8・14は壺である。8は球形の胴部からやや丸みを帯びた口縁部が立ち上がる。内面に輪積み痕が残る。14は複合口縁をもつもので、球形の胴部から口縁が外反するように立ち上がり、複合部で屈曲するように開く。全体に丁寧なミガキ調整が施されるが、胴部下半には刃物による擦痕が認められる。内面はわずかに輪積み痕が残る。炉の隣の貯蔵穴から出土している。12・13は壺である。12は口縁部側と胴部側が接合しなかった。

頸部直下に刃物による擦痕が認められる。内面に輪積み痕が残る。13は球形の胴部から短い口縁が強く外反するように立ち上がる。内面に輪積み痕が残る。



第19図 (1) SI001住居跡出土遺物

## 第4章 奈良時代の遺構と遺物

### 第1節 概要

奈良時代以降の遺構・遺物は少なく、竪穴住居跡1軒が調査区西端部において検出されているだけで、遺物量も少なかった。この竪穴住居跡の南西側に隣接する三輪野山八幡前遺跡では、報告書の刊行に至っていないが当該期の竪穴住居跡が3軒検出されており、これらと共に小規模な集落が形成されていたのではないかと推測される。

### 第2節 竪穴住居跡

#### (5) S1002 (第20図、図版4・15)

**形状・規模** 主軸長は3.20m、横軸長は3.07mである。平面形は台形を呈する。確認面からの深さは25cm～40cmと差があるが、これは確認面が傾斜しているためである。主軸方位はN-28°-Wである。

**床面・壁溝** 床面は概ね平坦である。目立った硬化面は検出されなかった。壁溝は全周する。

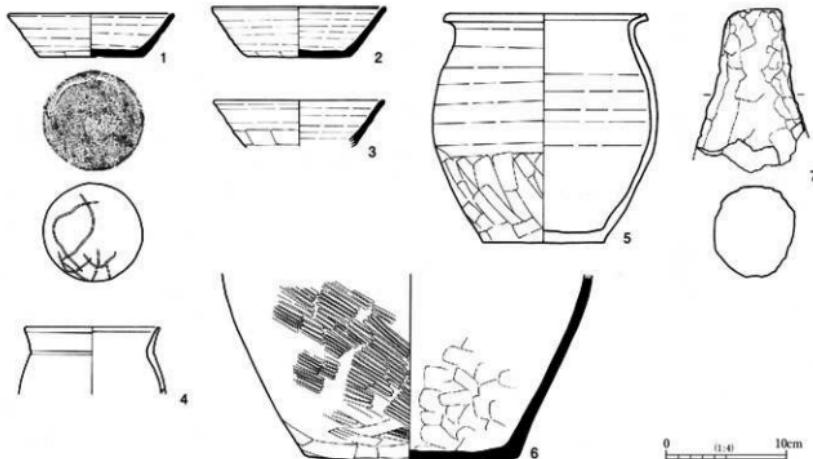
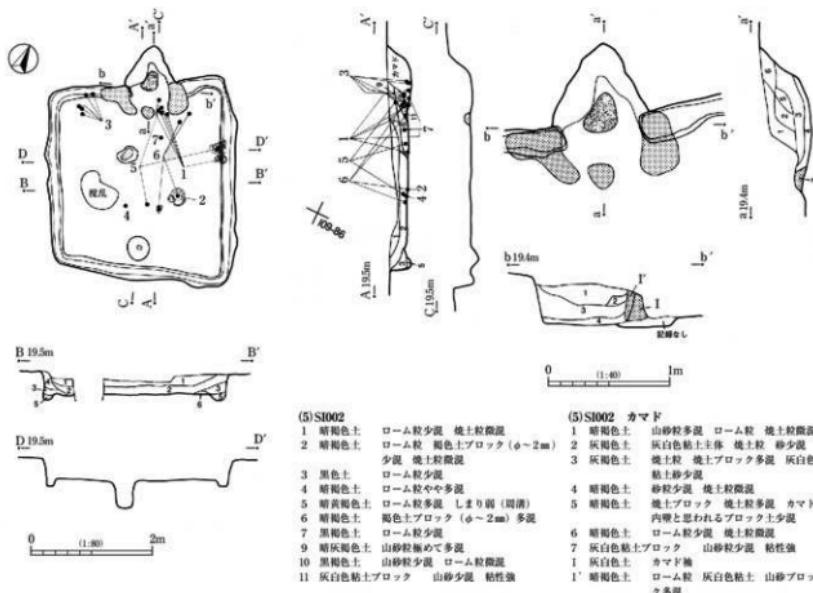
**覆土** 壁際や周溝覆土は自然崩落したと思われるしまりの弱い黒色土主体であるが、その上層はローム粒・ロームブロックや焼土粒を含む黒褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。

**柱穴・ピット** ピットは2基検出されている。カマドの前約50cmの位置にあるP1は長軸35cm×短軸25cm×深さ45cmを測る。断面形状などから柱穴と考えられる。南壁寄りで検出されたP2は、径37cm×深さ14cmを測る。カマドに対向する位置であり、出入口ピットと考えられる。

**カマド** 北壁ほぼ中央に位置する。竪穴の規模に比べ、カマドの煙道部の張り出しが大きい。両袖は山砂を主体として構築されている。横断するセクションは、向かって左側が実測できていない。カマド内に確認された火床部は、床面とほぼ同じ高さで窪みは浅い。カマド袖部分にも壁溝が巡り、カマドはその上部に構築されている。カマド内は袖の部材と思われる灰白色粘土や焼土粒、焼土ブロックなどが含有される土層が搅拌されたような状況でランダムに堆積しており、破壊された痕跡が顕著である。前面で検出されたブロック状の粘土も袖の部材と考えられる。

**出土遺物** 出土した遺物は、カマド周辺部から竪穴の中央にかけて出土し、床面から出土しているものが多い。1～3は須恵器壺である。1・2は底部が全面手持ちヘラケズリ調整され、体部下端も手持ちヘラケズリ調整される。1の底面には焼成前の線刻が認められ、「小」の字に類似する。他にも弧状の線などが認められ、同じ棒状工具を使用しているように見える。意図的なものかどうかは不明である。3は体部のみであるが、下側はやや幅広く手持ちヘラケズリ調整される。4・5は土師器壺である。4は頸部にごく浅い沈線が施されるが、胴部は器面が摩耗しており不明である。5は胴部の内・外面向とも横方向の丁寧なケズリ調整が施され、外面下半は縦方向のケズリ調整が施される。6は須恵器壺である。外面は平行叩き調整で下端部はヘラケズリ調整される。7は土製支脚である。カマド内部ではなく前面から出土した。現存長13.4cm、最大幅9.0cm、重量534.40gを測る。胎土にスサを多量に含み、熱を強く受けているため極めてもらい。

出土遺物は8世紀第3四半期の特徴をもつものが主体であることから、本竪穴は当該期と考えられる。



第20図 (5) SI002住居跡・出土遺物

第4表 古墳時代・奈良・平安時代土器観察表

( ) は推定値 - [ ] は現存長

番号	遺構番号	種類	器種	遺物番号	口径 直径 高さ	遺存度	胎土	焼成	色調	調整	備考
									外面 内面		
第17回 1	(5) S8004	土師器	高环 (环部)	3 - 252	18.0cm (14.0cm 15.2cm)	80%	精緻、赤色スコリア、青母陶范	良好	明赤褐、黒褐 に赤い粒、黒褐	1ゼン、1回部・黒 部端面ヨコナギ 外面部赤茶、黒部 内面部ヨウタツリ	内外面部赤
2	(5) S8004	土師器	高环 (环部)	229 - 231 - 235 - 239	16.0cm - 16.0cm	开80% -	精緻、砂粒少混	良好	に赤い粒、黒褐 に赤い粒、黒褐	ヘラタデ、ミガキ ヘラタデ、ミガキ	
3	(5) S8004	土師器	高环 (环部)	4 - 69 - 75 - 79 - 98 - 144 - 152 - 154	18.0cm 8.2cm	年80% -	赤色スコリア、青 母陶范	良好	に赤い粒、黒褐 に赤い粒	ヘラタデ ヘラタデ	
4	(5) S8004	土師器	高环 (环部)	2 - 3 - 51 - 52 - 61 - 215 - 264	19.0cm 9.5cm	50% 年80%	白色粒、青母陶范	良好	に赤い粒、黒褐 粒	ヘラタデ ヘラタデ	内外面部赤
5	(5) S8004	土師器	高环 (环部)	260	17.6cm - 5.2cm	90%	精緻、白色粒、青 母陶范	良好	に赤い粒、黒褐 に赤い粒、黒褐	ヘラタデ ヘラタデ	内外面部赤
6	(5) S8004	土師器	高环 (环部)	1 - 101 - 106 - 108 - 112 - 136 - 156 - 171	18.0cm - 10.0cm	30% 青80%	精緻、砂粒少混	良好	粒、黒褐 明赤褐、赤	ヨコナガナ、ミガ キヨコナガナ、ミガ キ	外面赤
7	(5) S8004	土師器	高环 (环部)	3 - 118 - 129 - 158 - 216 - 217 - 218 - 222	- 14.0cm 7.7cm	30% 青80%	精緻、砂粒	良好	に赤い黄粒、黒褐 黒褐	ヘラタデヨウタツナ ヨコナガ、ヘラタデ	
8	(5) S8004	土師器	高环 (环部)	261	13.7cm 9.5cm	50% 青80%	精緻	良好	に赤い粒、黒褐 黒褐	ヨコナガ、ミガキ ヘラタデ、ヨコナ	
9	(5) S8004	土師器	高环 (环部)	71 - 212 - 213 - 244 - 245 - 246 - 262 - 265	14.0cm 9.0cm	50% 青80%	精緻、砂粒・青母 陶范	良好	に赤い粒、黒褐 に赤い粒	ミガキ、ヨコナ ヨコナ	
10	(5) S8004	土師器	高环	92	- 11.0cm 8.9cm	47% 青80%	精緻	良好	に赤い粒、黒褐 に赤い黄粒、黒褐	ミガキミガキ ヘラタデ、ヨコナ	
11	(5) S8004	土師器	壇	1 - 56	9.0cm 3.0cm All	60%	精緻、砂粒・青母 陶范	良好	明赤褐 明赤褐	ヘラタデ ヘラタツリ	内外面部赤
12	(5) S8004	土師器	壇	162 - 247	10.0cm 10.0cm 10.5cm	80%	精緻、砂粒・青母 陶范	良好	に赤い黄粒、黒褐 に赤い粒	ヘラタツリ ヘラタデ	内外面部赤
13	(5) S8004	土師器	壇	249	10.0cm 10.0cm 10.5cm	11.2100%	精緻、砂粒・赤色 スコリア混	良好	粒、黒褐 に赤い粒、黒褐	ヘラタツリ、下平 黒褐、ヨウモ ヘラタツリ	
14	(5) S8004	土師器	壇	251	12.0cm 5.0cm 18.0cm	12.1100%	少々赤色スコ リア・砂粒混	良好	に赤い黄粒、黒褐 灰黄	ヘラタツリ復ニギ ヘラタデ	馬糞赤
15	(5) S8004	土師器	壇	253	13.0cm 4.0cm 18.0cm	90%	精緻、砂粒混	良好	に赤い粒、黒褐 黒褐、に赤い粒	ヘラタツリの後赤 ミガキナ	
16	(5) S8004	土師器	鉢	72 - 127 - 227	14.0cm - 8.5cm	25% C16850%	精緻、砂粒・赤色 スコリア混	良好	に赤い粒、黒褐 に赤い粒、黒褐	ヘラタツリ復ニギ ヘラタデ	
17	(5) S8004	土師器	小型壇	144 - 248	14.0cm 3.0cm 10.0cm	70%	砂粒・青母陶范	良好	黒褐 黒褐	ヘラタツリ復ニギ ヘラタデ、輪錐型	
18	(5) S8004	土師器	小型壇	39 - 132 - 257	13.0cm 4.0cm 15.0cm	70%	精緻、砂粒・赤 色スコリア混	良好	黒褐 に赤い粒、黒褐	ヘラタツリの後チ ミガキナ	
19	(5) S8004	土師器	壇 もししくは壇	63 - 149 - 167 - 193 - 195	- 16.0cm 10.0cm	10% 青80%	精緻、砂粒混	良好	粒、黒褐	ヘラタツリ ミガキ	
20	(5) S8004	土師器	壇 もししくは壇	122	- 5.0cm 8.5cm	40%	精緻、砂粒や多 混、赤色スコリア・ 青母陶	良好	黒褐 に赤い粒	ヘラタツリ ヘラタデ	
21	(5) S8004	土師器	壇	1 - 50 - 137 - 181 - 187 - 188 - 201 - 203 - 212 - 247 - 258	- 5.5cm 17.0cm	30%	精緻、少々赤色 スコリア・砂粒多 混	良好	に赤い粒、黒褐 に赤い粒、黒褐	ヘラタツリ ヘラタデ	
第18回 22	(5) S8004	土師器	壺	68 - 140 - 141 - 142 - 166 - 189 - 196 - 197 - 208 - 220 - 256 - 268 - 269	16.0cm 6.0cm 26.0cm	90%	精緻、砂粒混・赤 色スコリア少混	良好	に赤い粒、黒褐 に赤い粒、黒褐	ヘラタツリ ヘラタデ	
23	(5) S8004	土師器	壺	1 - 33 - 34 - 37 - 38 - 40 - 41 - 44 - 45 - 49 - 51 - 54 - 55 - 56 - 57 - 58 - 103 - 104 - 105 - 107 - 109 - 110 - 111 - 113 - 117 - 128 - 131 - 134 - 135 - 169 - 170 - 176 - 206	16.5cm 6.0cm 24.0cm	70%	精緻、砂粒混	良好	黒褐、に赤い粒 に赤い粒	ヘラタツリ復ニギ ヘラタデ、口縁部内 外面	
24	(5) S8004	土師器	壺	74 - 97 - 130 - 174 - 175 - 182 - 199 - 200 - 202 - 205 - 254 - 264 - 265	16.0cm 5.0cm 24.5cm	80%	精緻、砂粒や多 混	良好	に赤い粒、黒褐 明赤褐、黒褐	ヘラタツリ復ニギ ヘラタデ、輪錐型	

番号	遺構番号	種類	器種	遺物番号	口径 底径 高さ	進存度	出土	焼成	色調	調整	備考
									外面 内面		
25	(5) S804	土師器	甕	4・126・230・225・ 228・232・233・ 234・235・238	18.0cm 18.5cm	30% 口幅80%	粗織、砂粒混	良好	棕、黒褐 明赤褐、黒褐	ハラケツリ、ナゲ ハラケツリ	
26	(5) S804	土師器	甕	3・10・12・14・17・ 38・65・79・90・ 101・121・125・ 155・179・203・213	17.4cm 13.2cm	30% 口幅80%	砂粒・少5mm赤色 スコリやや多混	良好	に赤い黄褐、褐灰 に赤い黄褐、褐灰	ハラケツリ ハラケツリ	
27	(5) S804	土師器	甕	62・64・95・99・ 121・123・124・131・134・ 147・161・162・164・ 180・191・214・219・ 258・263	- 6.8cm 28.5cm	70%	粗織、砂粒混	良好	灰褐、褐灰 に赤い黄褐、褐灰	ハラケツリ 下端1 ダマ付 ハラケツリ	
第198回 1	(1) S801	土師器	鉢	1・54・64	13.4cm 6cm 6.5cm	95%	粗織	良好	に赤い橙 に赤い橙	ナガ方向ハナナ ヨコ方向ハナナ	
2	(1) S801	土師器	高环 (環部)	18	19.0cm - 8.3cm	40% 口幅80%	粗織	良好	に赤い橙 に赤い橙	直射照 1オキ 1オキ	
3	(1) S801	土師器	高环 (環部)	14・58	21.0cm - 7.1cm	40% 口幅80%	粗織	良好	に赤い橙、褐灰 に赤い橙、褐灰	1オキ 1オキ	
4	(1) S801	土師器	高环 (環部)	1・3	- 15.5cm 0.1cm	50% 肩幅100%	粗織	良好	に赤い橙 に赤い橙	1オキ、ハラナ 解体後、ハラナ	
5	(1) S801	土師器	高环 (環部)	1・31・66	- 11.6cm 7.7cm	40% 肩幅80%	粗織	良好	に赤い黄褐、黄褐 粉	ハラケツリ ハラケツリ	
6	(1) S801	土師器	高环 (環部)	1・21	14.0cm 8.5cm	25% 肩幅80%	粗織	良好	明赤褐 に赤い橙、黒褐	1オキ、ハラナ ヘラナ	外系系
7	(1) S801	土師器	壺	46	10.0cm 3.0cm 10.0cm	100%	粗織、赤色スコリ ア・砂粒やや多混	良好	に赤い黄褐 に赤い黄褐、褐灰	ハラケツリ 瓶口付見れ	
8	(1) S801	土師器	甕	1・50・51・53・ 55・65・67・71・72	12.0cm 4.0cm 18.0cm	60%	赤色スコリア、 白色粗織混	良好	に赤い赤褐 に赤い赤褐、橙	ハラケツリ	
9	(1) S801	土師器	壺	1・12・13・25・ 26・52	12.6cm - 12.3cm	20% 口幅80%	粗織、白色粗織	良好	に赤い赤褐 に赤い赤褐、黄褐	に赤い方向ハナナ ナガ方向ハナナ 解体後ハナナ	
10	(1) S801	土師器	壺	1・28	(10.0)cm - 14.4cm	20%	砂粒やや多混	良好	黒褐、灰褐 明赤褐	(ナイト) ハラケツリ	
11	(1) S801	土師器	壺	1・14・19・22	- 3.8cm 0.9cm	50%	砂粒やや多混	良好	に赤い橙、黒褐 に赤い赤褐	ハラケツリ ハラケツリ	
12	(1) S801	土師器	甕	1・4・6・7・8・ 10・30・35・36・ 38・39・41・43・ 45・47・48・49・ 60・62・70・72	15.4cm 5.0cm 13.0cm F10.0cm 29.8cm	70%	粗織、赤色スコリ ア混	良好	に赤い橙、橙 に赤い橙	ナガ方向ハナナ ヘラナ	
13	(1) S801	土師器	甕	1・32・72	16.0cm - 23.0cm	40%	粗織、砂粒、赤色 スコリア混	良好	に赤い黄褐 に赤い黄褐	に赤い黄褐、 赤色粗織混	
14	(1) S801	土師器	甕	15・71	15.0cm - 24.5cm	60%	粗織、赤色スコリ ア、砂粒	良好	に赤い黄褐、褐灰 に赤い黄褐、褐灰	ナガ方向1オキ 口幅内部1オキ	外系系
第200回 1	(5) S802	須恵器	壺	61・72・77・78・80	13.0cm 8.0cm 2.5cm	100%	粗織、金芸苔・φ 1-1.5mm石英粒 混	良好	褐灰、褐灰	ロクロ、ハラケツリ ロクロ	
2	(5) S802	須恵器	壺	1・58・63	14.0cm 8.0cm 1.0cm	99%	粗織、石英粒混	良好	褐灰、 褐灰	ロクロ、ハラケツリ ロクロ	
3	(5) S802	須恵器	壺	1・67・68・69・ 70・71	(14.0)cm 3.0cm	口幅80%	粗織、石英粒やや 多混、金芸苔・ 2.5mm石英粒 混	良好	褐灰、 褐灰	ロクロ、ハラケツリ ロクロ	
4	(5) S802	土師器	小型甕	1・11・12・66	(11.0)cm - 5.5cm	口幅80%	粗織、砂粒・薄 目混	良好	黒褐、 黒褐	ナガ方向 ヘラナ	
5	(5) S802	土師器	甕	5・42・62	16.0cm 10.1cm 18.0cm	20% C100%40%	粗織、赤色スコリ ア、砂粒混	良好	に赤い黄褐、褐灰 に赤い黄褐、橙	ロクロ壁紙、瓶下部 ハラケツリ ロクロ	
6	(5) S802	須恵器	甕	33・37・57・58	- 17.0cm 13.2cm	底部100%	芸苔、石英粒・φ 2-5mm石英粒混	良好	W白 W白	平行1オキ、下端ヘ ラケツリ ヨコケツリ	

## 第5章 中・近世の遺構

### 第1節 概要

中・近世の遺構は、市野谷宮後遺跡では土坑3基、野馬土手とそれに伴う堀1条、溝状遺構5条、単独のシシ穴9基、シシ穴列1条（シシ穴27基を伴う）が検出されている。本来は一つの遺跡としてもよい市野谷芋久保遺跡では単独のシシ穴3基（可能性があるもの1基を含む）、溝状遺構1条、野馬土手とそれに伴う堀1条（市野谷宮後遺跡から続くもの）である。すでに報告書が刊行されている新市街地地区区画整理事業地内の市野谷芋久保遺跡では、今回報告するシシ穴列や溝の同一遺構の続きが検出されている。今回の調査区域が、南東方向に傾斜する緩斜面にあって、中・近世にとどまらず、他の時期の遺構もこれらの遺構群に接続して検出されている状況である。

特筆すべき遺構としては、規模の大きなシシ穴が複数検出されていることである。平面規模もさることながら、最も深いもので検出面から342cmにも達するシシ穴があり、総じてかなりの深さがあり、人がこのシシ穴に転落すると自力では這い上がれないほどの規模である。

野馬土手は、三輪野山野馬土手と呼ばれるもので、北東の市野谷芋久保遺跡側から南西の三輪野山八幡前遺跡側へと東西方向に走る土手である。現況は、土手の盛土がすでに失われているところがほとんどで、一部で辛うじて高まりが視認できる程度であった。時期を示す遺物は出土しなかつたが、概ね近世の所産と考えられる。

### 第2節 遺構

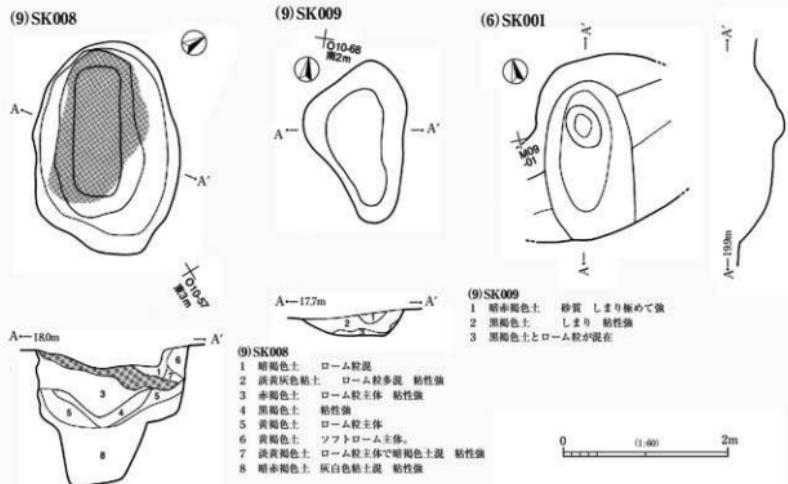
#### I 土坑

##### (6) SK001 (第21図、図版4)

調査区北部の三輪野山野馬土手((5)SX001)に接続した場所に位置する。長軸長223cm、短軸長107cm、最大深58cmの楕円形を呈する。断面は皿状で、底面の中央部よりやや北寄りが浅く掘り窪められている。トレチ調査で検出されたものであるが、単独ではなく東西方向に伸びる溝状の遺構と共に検出されている。ただし溝と本土坑との新旧関係は不明である。溝状遺構についてはトレチの拡幅を行っておらず、他のトレチでも検出されていないため、全体の規模などは不明である。(5)SX001に伴う可能性も考えたが、方向がややずれている。

##### (9) SK008 (第21図、図版4)

本土坑は(9)SD003溝状遺構と重なり合っており、溝状遺構による搅乱を受けていないことが確認されたため、本土坑の方が新しいことが確認されている。長軸長258cm、短軸長177cm、最大深165cmを測る。平面形状は検出面が不整円形、底面は隅丸方形を呈する。深さ約90cmの位置に段状の平場があり、長軸長200cm、短軸長108cmの長楕円形に掘り込まれて底面に達する。平場の部分の地山はローム層と粘土層との境界になっている。ここを境に覆土上層はローム粒や粘土が混入し色調が明るい土層と暗い土層が交互に堆積し、下層は粘土粒が混入する暗赤褐色土が單一に堆積する。検出面近くには粘土が貼られるように堆積しており、溝状遺構の底面と同レベルである。平面図で示した粘土の範囲は確認面上で実測したものであり、断面図の範囲とは一致しない。



第21図 中・近世土坑

#### (9) SK009 (第21図、図版4)

調査区東部の(9)SD003溝状遺構に接した場所に位置する。長軸長198cm、短軸長126cm、最大深32cmの不整形を呈する。底面は平坦で、覆土に砂質土が混入する。(9)SD003に関連する遺構と考えられる事から中・近世に属するものとしたが、覆土の状況からより古い時期の可能性はある。

#### 2 溝状遺構

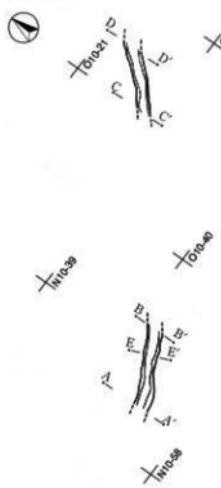
#### (9) SD001 (第22図、図版4)

調査区東部に位置する。トレンチ2カ所で検出されたもので、両者を合わせた長さは15.5m、幅は45cm～60cm、最大深45cmである。端部が未確認のため、総延長は不明である。ソフトローム上面からではなく、縄文時代以降に堆積した自然層の上から掘り込まれていることがトレンチの壁などの観察によって判明している。平面図はソフトローム層上面まで掘り下げるから実測しているので、本来の幅はもっと広くなっている。断面は皿状であるが、ピット状の掘り込みなども存在し底面は不安定しない。(10)SX001シシ穴列と直交するように伸びるが、シシ穴列との関係は不明である。

#### (9) SD003 (第22図、図版4)

調査区東部に位置する。トレンチ調査で検出された範囲を拡張して対処したため、端部は確認していない。検出された部分の長さは16.4m、幅は最も狭い西端部が70cm、広いE-E'付近が225cm、最大深70cmである。ただし南端のO10-78グリッド南側はトレンチの壁となっているため掘込の深さを確認できたが、それ以外の部分はソフトローム上面まで掘削してから調査しているため、残存している部分は本来の幅よりもかなり狭い。O10-47・57グリッドで(9)SK008土坑に切られており、その北側で90°屈曲している。部分的に土坑もしくはピットのような掘込みが存在するほか、O10-78グリッド付近では炭化物や焼土粒が覆土に混入し、底面に熱を受けた痕跡が認められた。

(9) SD001



D 19.8m D'

C 19.8m C'

B 19.8m B'

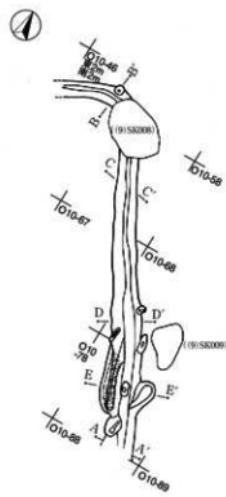
E 18.9m E'

A 19.8m A'

(9) SD001

- |    |       |                   |
|----|-------|-------------------|
| 1  | 暗褐色土  | ローム鉢 砂質土混         |
| 2  | 暗褐色土  | ローム鉢混             |
| 3  | 暗褐色土  | ローム鉢混入 色調2より暗い    |
| 4  | 暗褐色土  | ローム鉢混             |
| 5  | 暗褐色土  | ローム鉢 ハードロームブロック混  |
| 6  | 暗褐色土  | ローム鉢混             |
| 7  | 暗褐色土  | ローム鉢 ハードロームブロック混入 |
| 8  | 黄褐色土  | ローム鉢多混            |
| 9  | 暗褐色土  | ローム鉢 ハードロームブロック混  |
| 10 | 暗褐色土  | ローム鉢混             |
| 11 | 暗赤褐色土 | ローム鉢混入 10よりしまり弱   |
| 12 | 暗赤褐色土 | ローム鉢混             |
| 13 | 暗褐色土  | ローム鉢 ハードロームブロック混  |
| 14 | 黄褐色土  | ローム鉢多混            |
| 15 | 褐色土   | ローム鉢混             |
| 16 | 褐色土   | ローム鉢 ハードロームブロック混  |

(9) SD003



B 18.0m B'

C 18.0m C'

D 17.7m D'

E 17.7m E'

A 18.0m A'

(9) SD003  
1 黒褐色土 ローム鉢混

0 (1:200) 10m

0 (1:100) 3m

第22図 中・近世溝状遺構

### 3 シシ穴列を伴う遺構群

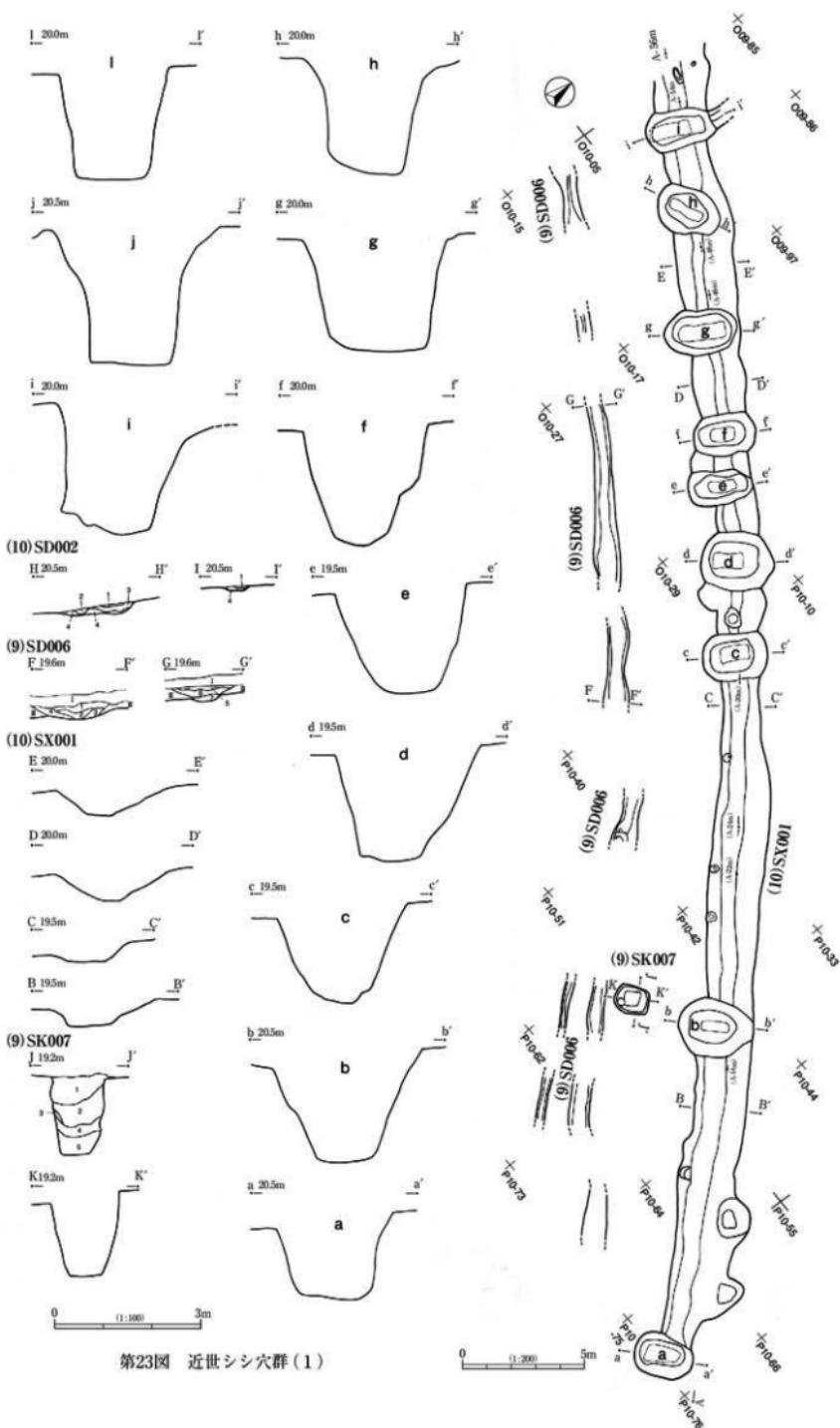
調査区北東端部、M08-66 グリッドから P10-75 グリッドまで、約 143 m に及ぶ溝状遺構とそれに付帯する 38 基のシシ穴が列をなして構築されていた。また、北側の溝状遺構約 27 m と 7 基のシシ穴は、市野谷芋久保遺跡(12)の調査区(新市街地地区区画整理事業地内)の範囲に当たっており、2 遺跡全体で 45 基のシシ穴が検出されている。45 基中、最も深いシシ穴が(10) SX001z の 3.42 m である。検出面からの深さであることから、表土層が加われば 4 m 近い深さで、人がこの穴に落ちた場合は、梯子なしでは地上に上がりえない深さである。基本的な平面形は楕円形を呈する。平面形で最も大きなシシ穴は、(10) SX001r の長軸長 5.24 m である。北側のシシ穴列は、大きさの異なる大小のシシ穴が並び、中央から南側にかけてのシシ穴はほぼ同規模のシシ穴が並んでいる。シシ穴の長軸平均規模は 294 cm、平均深度は 241 cm である。

以下、各シシ穴について詳述する。2 遺跡の接点で調査次数が異なり、また遺構番号についても連続した番号が付されていないことから煩雑になっている点はご容赦いただきたい。市野谷宮後遺跡(10)の調査区範囲を(10) SX001 と総称したが、新市街地地区の(12) SX001 と呼称された範囲で検出された遺構群は、本来は同一のものである<sup>(1)</sup>。

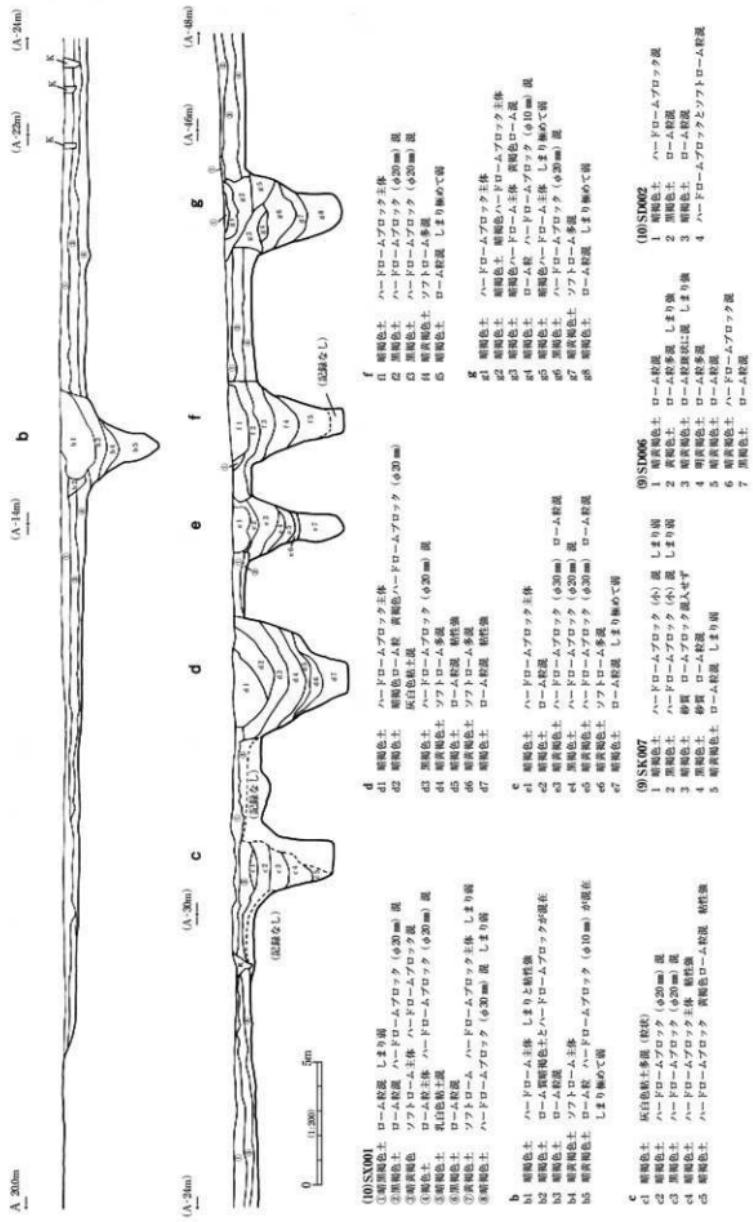
溝状遺構とシシ穴列が検出された位置には、調査前まで、畠地の中を通る農道が位置していた。農道は狭小ではあったものの、近世からの古い道路であったことは間違いない。この道路は、今回の調査で確認されたシシ穴列の東隣り、あるいは一部で重なる位置にあり、この農道とは関連が深い遺構群であったと考えられる。この道路沿いには調査前に土手は確認されていないが、東西を走る三輪野山野馬土手にぶつかるところから、あるいは土手が存在し、それに付帯するシシ穴列が存在した可能性がある。本事業地に隣接する新市街地地区土地区画整理事業地内では、市野谷立野遺跡と市野谷向山遺跡の 2 遺跡をまたいで野馬土手に伴う溝と大きなシシ穴の列が検出されており、この地域では規模の大きなシシ穴列が、今回報告する市野谷宮後遺跡に限らず存在することは間違いない。深さ 3 m を超えるような大型のシシ穴が掘られた史的経緯などについては、他の地域の事例なども含め検討する必要があるだろう。

第 5 表 シシ穴計測表

No.	調査次	遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	番号
1	貢耕(9)	(9) SX0007	138	114	171	
2	貢耕(10)	(10) SX0040b	215	202	235	
3	貢耕(10)	(10) SX0005	475	415	245	
4	貢耕(10)	(10) SX0006	335	305	240	
5	貢耕(10)	(10) SX0007	360	295	270	
6	貢耕(10)	(10) SX0008	263	200	195	
7	貢耕(10)	(10) SX0009	350	255	230	
8	貢耕(10)	(10) SX0010	230	185	180	
9	貢耕(10)	(10) SX0011	270	225	250	
10	貢耕(10)	(10) SX001a	246	180	180	
11	貢耕(10)	(10) SX001b	310	240	225	
12	貢耕(10)	(10) SX004c	270	190	242	
13	貢耕(10)	(10) SX004d	305	248	227	
14	貢耕(10)	(10) SX004e	270	145	212	
15	貢耕(10)	(10) SX004f	260	170	210	
16	貢耕(10)	(10) SX004g	300	190	230	
17	貢耕(10)	(10) SX001h	278	200	234	
18	貢耕(10)	(10) SX001i	295	170	258	
19	貢耕(10)	(10) SX001j	345	284	286	
20	貢耕(10)	(10) SX001k	280	230	314	
21	貢耕(10)	(10) SX001l	224	170	234	
22	貢耕(10)	(10) SX001m	272	190	270	
23	貢耕(10)	(10) SX001n	220	154	222	
24	貢耕(10)	(10) SX001o	246	170	226	
25	貢耕(10)	(10) SX001p	188	154	230	
26	貢耕(10)	(10) SX001q	230	255	230	
27	貢耕(10)	(10) SX001r	324	420	339	最大
28	貢耕(10)	(10) SX001s	260	164	294	
29	貢耕(10)	(10) SX001t	194	150	240	
30	貢耕(10)	(10) SX001u	272	202	244	
31	貢耕(10)	(10) SX001v	322	219	232	
32	貢耕(10)	(10) SX001w	320	250	238	
33	貢耕(10)	(10) SX001x	316	226	265	
34	貢耕(10)	(10) SX001y	274	250	245	
35	貢耕(10)	(10) SX001z	450	390	342	最深
36	平九郎(10)	(10) SX001aa	222	148	220	
37	平九郎(11)	(11) SX002	190	160	135	
38	平九郎(12)	(12) SX003	360	300	205	
39	平九郎(12)	(12) SX004b	360	310	290	
40	平九郎(12)	(12) SX004c	280	180	220	
41	平九郎(12)	(12) SX004d	300	200	250	
42	平九郎(12)	(12) SX004e	260	170	240	
43	平九郎(12)	(12) SX004f	360	280	290	
44	平九郎(12)	(12) SX004g	220	170	220	
45	平九郎(12)	(12) SX004h	250	170	220	



第23図 近世シシ穴群(1)



第24図 近世シシ穴群(2)

#### (10) SX001 (第23～28図、図版5)

調査時は先に溝が構築され、後からシシ穴が構築されたと判断されたようで、溝にSX-001、シシ穴にSX-A～AAという番号が付されていたが、土層断面図を検討した結果溝より古いか同時期と思われるシシ穴も存在していると思われたので、全体を(10)SX001とし、個別のシシ穴に(10)SX001a～aaという番号を付すこととした。土層断面の実測にあたっては、溝状遺構とシシ穴の新旧関係を把握するため、溝を横断するのではなく縦断するようにセクションを設定したが、完全に直線にするのは難しいため、方向が転換する点を中間に落としている。図中A-●●mとあるのは方向転換点で、●●mはセクションポイントAからの距離を示す。シシ穴の土層断面はこの縦断セクションで対応することとし、個別の断面はエレベーション図のみ作成している。遺構群の時期を示す遺物は出土しなかった。

溝の部分は幅70cm～300cm、深さは50cm～70cm、断面形状は概ね逆台形でピット状の掘込みがいくつか認められる。覆土はロームブロックを多く含むしまりの弱い土層で、最上層を除いては人為的な埋戻しによる堆積であろうと考えられる。シシ穴規模が大きいことから、埋戻しにも相当な土量が必要であり、新たなシシ穴の掘削土が古いシシ穴の埋め土となっているのかもしれない。

#### (10) SX001a (第23図、図版6)

遺構群の最南端に位置する。長軸長246cm、短軸長180cm、最大深180cmを測る。平面形状は検出面、底面とも梢円形に近い不整円形を呈する。長軸方向は溝の方向に対し直角になっている（以下説明するシシ穴も特記したもの以外は同様の状況である）。溝との新旧関係は不明である。

#### (10) SX001b (第23・24図、図版6)

(10)SX001aの北西約11.5mに位置する。長軸長310cm、短軸長240cm、最大深225cmを測る。平面形状は検出面が梢円形、底面は隅丸方形を呈する。溝より新しいと思われるが土層断面図はやや不自然な点もあり断定はできない。

#### (10) SX001c (第23・24図、図版6)

(10)SX001bの北西約13mに位置する。長軸長270cm、短軸長193cm、最大深242cmを測る。平面形状は検出面が長梢円形、底面は隅丸方形を呈する。土層断面図は掘りが不十分なまま作成されたため溝との新旧関係は判断が難しいが、シシ穴が古く溝が新しいようにも見える。

#### (10) SX001d (第23・24図、図版6)

(10)SX001cの北西約1.7mに位置する。aとb、bとcはそれぞれ10m以上隔たっているが、これより北西側のシシ穴群はかなり近接している。長軸長307cm、短軸長248cm、最大深227cmを測る。平面形状は検出面が梢円形、底面は隅丸方形を呈する。溝より新しいと判断される。

#### (10) SX001e (第23・24図)

(10)SX001dの北西約1.1mに位置する。長軸長270cm、短軸長145cm、最大深212cmを測る。平面形状は検出面が梢円形に近い不整円形、底面は隅丸方形に近い不整方形である。溝より新しいと思われるが土層断面図はやや不自然な点もあり断定はできない。

#### (10) SX001f (第23・24図、図版6)

(10)SX001eの北西約0.6mに位置する。長軸長260cm、短軸長170cm、最大深240cmを測る。平面形状は検出面が長梢円形、底面は隅丸方形である。溝より新しいと思われる。

(10) SX001g(第23・24図、図版6)

(10) SX001fの北西約2.5mに位置する。長軸長300cm、短軸長190cm、最大深230cmを測る。平面形状は検出面が長椭円形、底面は隅丸方形である。溝より新しくと判断されるが、土層断面図をみると別な遺構に掘り込まれているように見える(g1層～g3層)。

(10) SX001h(第23・26図、図版6)

(10) SX001gの北西約3mに位置する。長軸長278cm、短軸長200cm、最大深234cmを測る。このシシ穴は長軸方向が溝の方向と直角になっておらず、約60°程振れている。平面形状は検出面が椭円形に近い不整円形、底面は隅丸方形である。溝より新しくと判断される。

(10) SX001i(第23・26図、図版6)

(10) SX001hの北西約1.3mに位置する。長軸長295cm、短軸長170cm、最大深258cmを測る。平面形状は検出面が椭円形に近い不整円形、底面は隅丸方形である。溝より新しくと判断されるが、北側に幅75cm、深さ48cmを測る別の溝が伸びている。土層断面図のi1層～i5層はこの溝の覆土と考えられる。調査区外に伸びているため総延長は不明である。

(10) SX001j(第23・25・26図、図版7)

(10) SX001iの北西約4.6mに位置する。当遺構と次の(10)SX001kも、溝の方向に対し長軸方向が直角でなく約60°振れている。長軸長345cm、短軸長284cm、最大深284cmを測る。平面形状は検出面が椭円形に近い不整円形、底面は隅丸方形である。溝より古くと判断される。

(10) SX001k(第25・26図、図版7)

(10) SX001jの北西約0.4mに位置する。長軸長280cm、短軸長230cm、最大深314cmを測る。平面形状は検出面が椭円形、底面は隅丸方形を呈する。土層断面はこのシシ穴の端部を通過するように設定されたためはっきりと記録されていないが、溝より古くように見える。

(10) SX001l(第23・25・26図、図版7)

(10) SX001kの北西約0.8cmに位置する。長軸長224cm、短軸長170cm、最大深234cmを測る。平面形状は検出面が椭円形、底面は隅丸方形を呈する。溝より古くと判断される。

(10) SX001m(第25・26図、図版7)

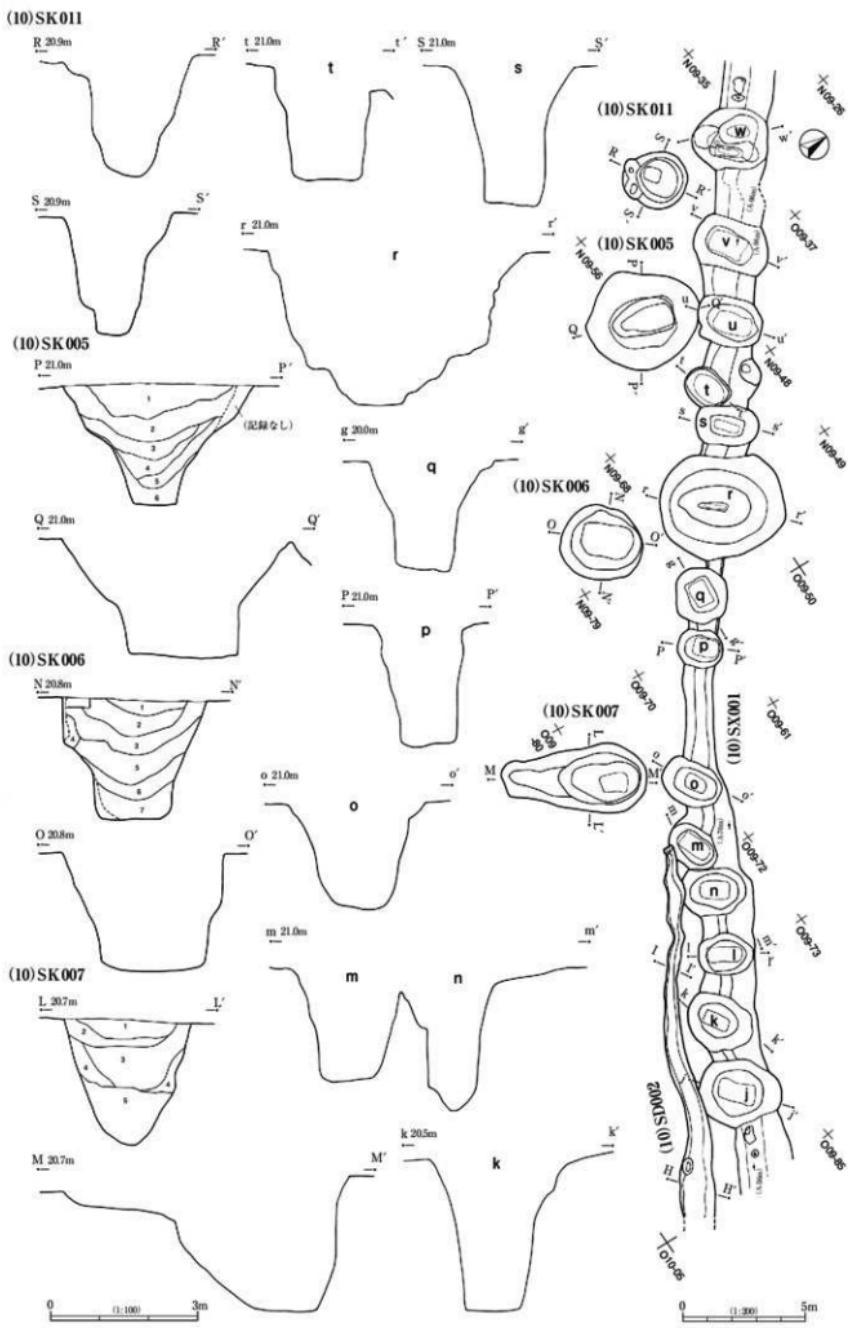
(10) SX001lの北西約0.7mに位置する。長軸長272cm、短軸長190cm、最大深270cmを測る。平面形状は検出面が椭円形、底面は隅丸方形を呈する。溝より新しく思われるが、(10)SX001l側の土層が不自然で判断できない。

(10) SX001n(第25図、図版7)

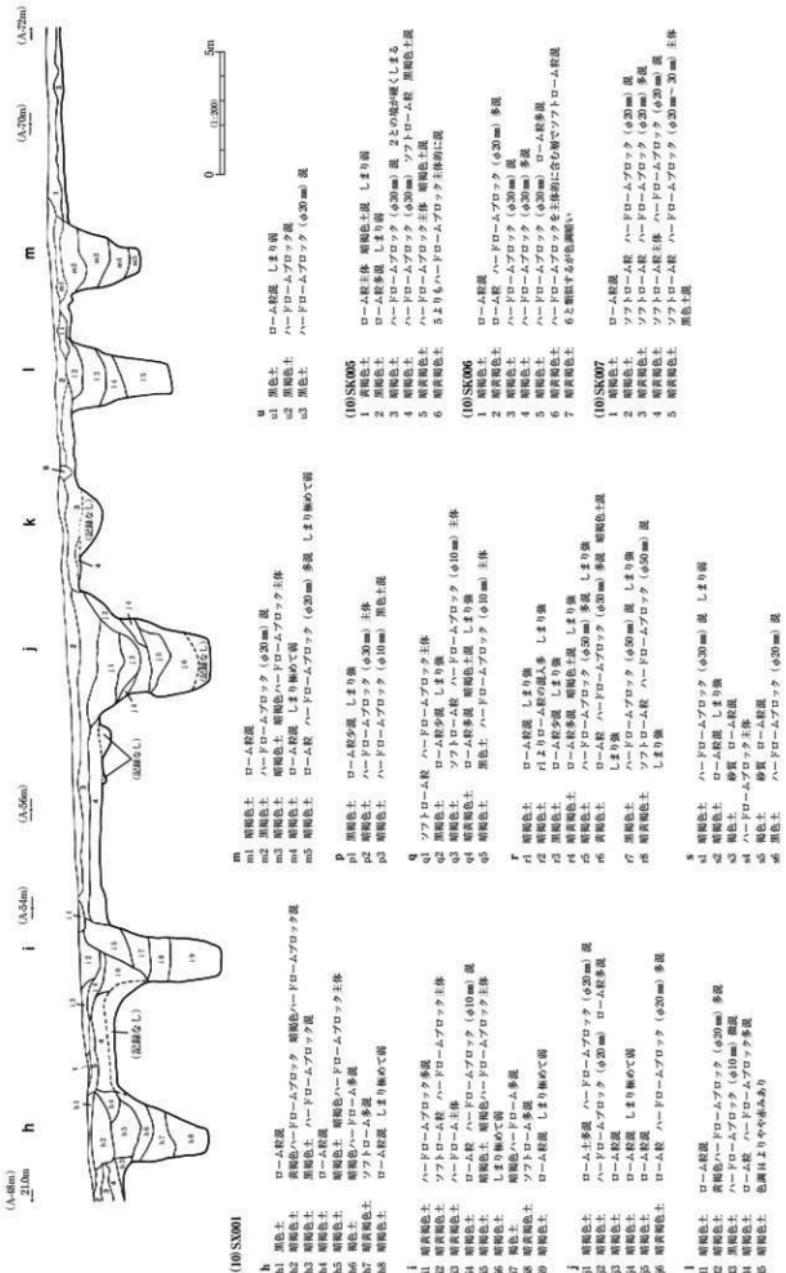
(10) SX001mの北西に接するように位置する。長軸長220cm、短軸長154cm、最大深222cmを測る。平面形状は検出面が椭円形、底面は隅丸方形を呈する。溝の方向に対し長軸方向が直角でなく約50°振れている。土層断面は実測されておらず溝との新旧関係は不明である。

(10) SX001o(第25図、図版7)

(10) SX001nの北西約0.7mに位置する。長軸長246cm、短軸長176cm、最大深226cmを測る。平面形状は検出面が椭円形、底面は隅丸方形を呈する。溝の方向に対し長軸方向が直角でなく約60°振れている。溝との新旧関係は不明である。



第25図 近世シシ穴群(3)



(10) SX001p(第25・26・28図、図版7)

(10) SX001oの北西約3.7mに位置する。長軸長188cm、短軸長154cm、最大深250cmを測る。平面形状は検出面が楕円形、底面は隅丸方形を呈するが、検出面の中心と底面の中心が合っておらず、北東壁が直立し南西壁はやや緩やかである。土層断面は溝の縁を通過しているため判断が難しいが、溝より新しいように見える。

(10) SX001q(第25・26・28図)

(10) SX001pの北西約0.3mに位置する。長軸長230cm、短軸長225cm、最大深230cmを測る。平面形状は検出面が正円に近い楕円形、底面は隅丸方形を呈する。溝の方向に対し長軸方向が直角でなく約30°振れている。土層断面は溝にかろうじて引っかかっている状況なので判断が難しいが、溝より新しいように見える。

(10) SX001r(第25・26・28図、図版7)

(10) SX001qの北西約0.3mに位置する。長軸長524cm、短軸長420cm、最大深320cmを測り、遺構群の中でも最大である。平面形状は検出面が楕円形、底面は長さ95cm、幅15cmの溝状で縄文時代の陥穴を想起させる。溝より古いと判断される。なお、qとrの間の溝は幅70cm、深さ12cm程度で、全体の中で最も小規模になる。

(10) SX001s(第25・26・28図、図版7)

(10) SX001rの北西約0.5mに位置する。長軸長260cm、短軸長164cm、最大深294cmを測る。平面形状は検出面が楕円形、底面は隅丸方形を呈する。土層断面からは溝より古いように見えるが、堆積土の上層がシシ穴と溝のどちらの覆土か判断が難しい。

(10) SX001t(第25図、図版7)

(10) SX001sの北西に接するように位置する。長軸長194cm、短軸長150cm、最大深240cmを測る。平面形状は検出面、底面とも楕円形を呈する。溝の方向に対し長軸方向が直角ではなく約60°振れている。土層断面が記録されていないため溝との新旧関係は不明である。

(10) SX001u(第25・26・28図、図版8)

(10) SX001tの北西約1.1mに位置する。長軸長272cm、短軸長202cm、最大深244cmを測る。平面形状は検出面がやや不整ながらも楕円形、底面はこれもやや不整ながら隅丸方形を呈する(壁が一部崩落したためであろう)。溝より古いと判断される。なお、tとuの間には径80cm~110cm、深さ47cmの柱穴状のピットが存在する。

(10) SX001v(第25・28図、図版8)

(10) SX001uの北西約1.1mに位置する。長軸長322cm、短軸長210cm、最大深232cmを測る。平面形状は検出面が楕円形、底面は隅丸方形を呈する。溝の方向に対し長軸方向が直角でなく約70°振れている。溝より古いと判断される。

(10) SX001w(第25・28図、図版8)

(10) SX001vの北西約1.8mに位置する。長軸長320cm、短軸長250cm、最大深236cmを測る。平面形状は検出面は楕円形であるが、底面は3基の楕円形土坑が切り合ったような形状を呈している。覆土を見る限り埋まったのは同時とみられるが、掘削が同時にあったかは不明である。溝より古いと思われるが、土層断面図はやや不自然な点もあり断定はできない。

(10) SX001x(第27・28図、図版8)

(10) SX001wの北西約2.6mに位置する。長軸長316cm、短軸長236cm、最大深265cmを測る。平面形状は検出面が梢円形に近い不整円形、底面は長梢円形に近い不整円形を呈する。溝より新しいと判断される。なお、wとxの間に小ビットが4基存在する。xシシ穴の北東辺にも張り出しが2箇所認められるが、これらも同様の小ビットと思われる。

(10) SX001y(第27・28図、図版8)

(10) SX001xの北西約3.7mに位置する。長軸長274cm、短軸長250cm、最大深245cmを測るが、短軸長については隣接するzシシ穴との境までの長さである。平面形状は検出面が正円形に近い不整円形、底面は不整方形の平坦部に、不整円形の窪みが掘り込まれている。溝より新しいと判断される。

(10) SX001z(第27・28図、図版8)

(10) SX001yの北西に接するように位置する。長軸長455cm、短軸長390cm、最大深342cmを測るが、短軸長については隣接するyシシ穴との境までの長さである。平面形状は検出面が正円形に近い梢円形、底面は不整形である。北東壁寄りには段状の平場が存在するが、出入口施設などではなく壁の崩落などによって形成されたものであろう。溝より新しいと判断されるが、yシシ穴との新旧関係は不明で、埋没したのは同時だったと思われる。

(10) SX001aa(第27・28図、図版8)

(10) SX001zの北西約1.9mに位置する。長軸長252cm、短軸長148cm、最大深220cmを測る。平面形状は検出面が梢円形、底面は隅丸方形を呈する。土層断面図の最上層はシシ穴の覆土扱いとなっているが、自然であり溝の覆土であろう。溝より古いと判断される。

(10) SX001aaの北西約0.3mには、新市街地地区で調査した(12)SX001の南東端にあたる(b)シシ穴が位置する<sup>11</sup>。色刷りで新市街地地区での遺構番号とグリッド番号を示した。

(9) SK0007(第23・24図、図版8)

(10) SX001bに近接する。長軸長138cm、短軸長114cm、最大深174cmを測る。平面形状は検出面、底面とも隅丸方形を呈する。覆土は全体にしまりが弱い。土層断面図の4層から馬の歯が出土している。

(9) SD0006(第23・24・29図、図版10)

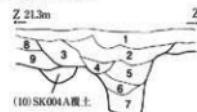
(10) SX001に平行して伸びる溝状遺構で、O10-05グリッドからP10-74グリッドまで検出されている。トレンチで把握された範囲のみの調査にとどめているため総延長は不明であるが、検出された部分の長さは約43m、幅は55cm~110cm、深さは平均して30cmである。なお、南端部は掘削せず確認面上で範囲を実測するのにとどめている。P10-51グリッドからP10-62グリッド付近ではもう1本溝が平行している。検出された部分の長さ5.8m、幅30cm~40cmを測る。

(10) SK004B(第27・28図、図版8)

第3章で説明したとおり、この土坑は当初全体がシシ穴と考えられていたが、掘り上げたところ2基の土坑が切り合っており、セクションを検討した結果深くて大きな土坑は当初想定したとおりシシ穴と判断したが、浅い土坑はシシ穴とは時期が大きく隔たって古いため縄文時代の遺構と判断した(縄文時代の土坑は

(10) SK004Aとした)。本土坑は、(12)SX001dに近接する。長軸長215cm、短軸長202cm、最深215cmを測る。平面形状は検出面が梢円形、底面は隅丸方形を呈する。縄文土器が出土したが、既に説明したとおり(10)SK004Aに帰属するものと判断した。

## (10) SK004B



AA 20.8m AA'

BB 20.8m

(10) SK008

Y 20.8m

(10) SK009

W 20.8m

(10) SK010

U 20.8m

aa 21.0m

z 21.4m

y 21.0m

x 21.0m

w 21.0m

v 21.0m

u 21.0m

(5) SX001 CC CC' (14) SD001 (14) SK001  
(14) SD001 FE (14) SK001  
市野谷茅久保(14)

aa' z  
aa z

z z

y y'

x x'

w w'

v v'

u u'

市野谷茅久保(10)

(14) SK002

(14) SK003

(10) SK004B

(10) SK008

(10) SK009

(10) SK010

(10) SX001

X 2002-05

X 2002-07

市野谷茅久保(12)

新市街地

X 2002-02

X 2002-03

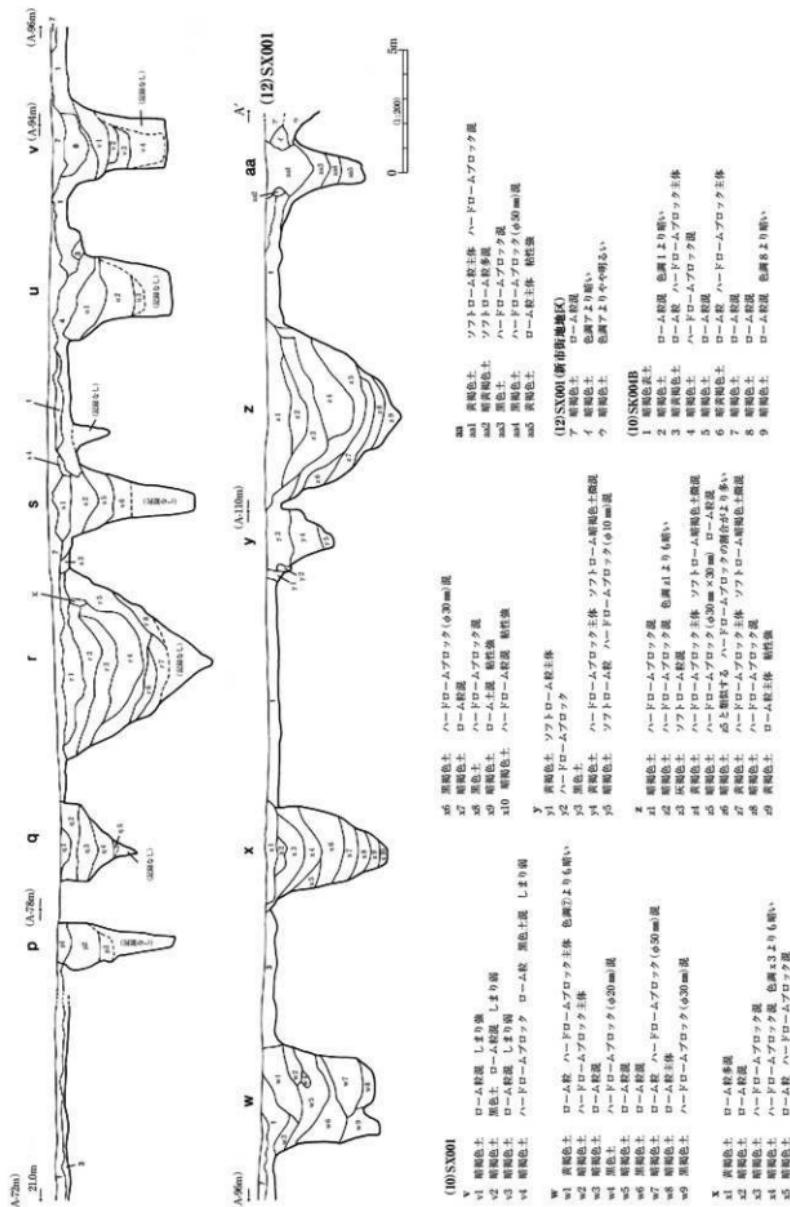
X 2002-12

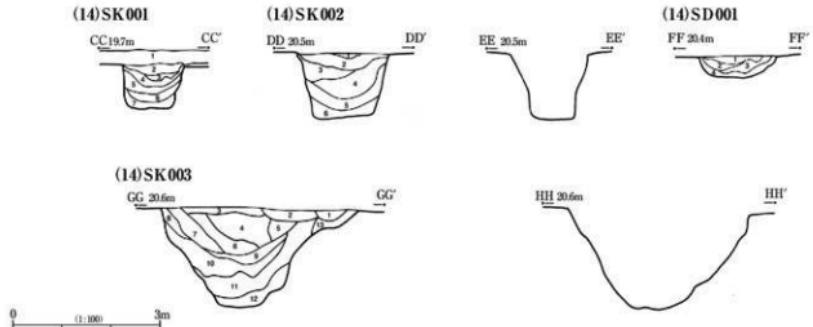
X 2003-01

X 2003-05

0 (1:100) 5m

第27図 近世シシ穴群(5)





(14) SK001 CC-CC'  
 1 黄褐色土(表土層) ローム粒混入  
 2 黒褐色土 砂質 ハードロームブロック(φ5 mm)混入  
 3 黒褐色土 均一の土層で焼成物なし  
 4 黄褐色土 ハードロームブロック混入  
 5 黄褐色土 ハードロームブロックと黒色土層が混ざっている層  
 6 黄褐色土 ハードロームブロックと黒色土層が混ざっている層  
 7 黄褐色土 ローム粒を混入する層

(14) SK002 DD-DD'  
 1 黒褐色土 ハードロームブロックからなる層  
 2 黄褐色土 ハードロームブロック(φ5 mm) ローム粒混入  
 3 黑褐色土 ハードロームブロック(φ5 mm)混入  
 4 黄褐色土 ローム粒 ハードロームブロック(φ20 mm)を多く含む層  
 5 黑褐色土 ハードロームブロック混入  
 6 黑褐色土 ローム粒混入

(14) SD001 FF-FF'  
 1 黄褐色土 ローム粒 ハードローム(φ5 mm)を混入  
 2 黄褐色土 ローム粒を多く混入  
 3 黑褐色土 ローム粒 ハードロームブロック(φ5 mm)混入  
 4 黄褐色土 ローム粒 ハードロームブロック(φ5 mm)混入

#### (10) SK005 (第25・26図、図版9)

(10) SX001uに接する。長軸長475cm、短軸長415cm、最深245cmを測る。平面形状は検出面が梢円形、底面は隅丸方形と梢円を組み合わせたような形状である。

#### (10) SK006 (第25・26図、図版9・15)

(10) SX001rに近接する。長軸長335cm、短軸長305cm、最深240cmを測る。平面形状は検出面が梢円形、底面は隅丸方形を呈する。覆土中から焼成人骨が出土したが、位置や深さは不明である。右下顎第2大臼歯1点と、側頭骨の破片と考えられるもの1点が判別できたが、他は破碎しており同定できなかった<sup>2</sup>。性別、年齢は不明である。当遺構は形態や覆土の状況など、他のシシ穴と比べ特に差異は認められなかつたが、土坑墓に転用された可能性もある。

(10) SK007 (第25・26図、図版9)

(10) SX001oに近接する。シシ穴本体の南西側に平場のような浅い掘り込みが認められるが、他に同様の形状を呈するものではなく、これらが一体のものかどうかは不明である。長軸長は全体が595cm、シシ穴本体は360cm、短軸長は285cm、深さはシシ穴本体が270cm、平場は35cmを測る。平面形状は検出面が長楕円形、シシ穴本体の底面は隅丸方形を呈する。

(10) SK008 (第27図、図版9)

(10) SX001aaに近接する。長軸長265cm、短軸長260cm、最深195cmを測る。平面形状は検出面が正円形に近い楕円形、底面はほぼ正方形を呈する。

(10) SK009 (第27図、図版9)

(10) SX001yに近接する。長軸長350cm、短軸長295cm、最深230cmを測る。平面形状は検出面、底面とも楕円形を呈するが、検出面に比べ底面は狭く、断面は漏斗状である。

(10) SK010 (第27図、図版9)

(10) SX001xに近接する。長軸長230cm、短軸長185cm、最深180cmを測る。平面形状は検出面が楕円形、底面は隅丸方形を呈する。

(10) SK011 (第25図、図版9)

(10) SX001wに近接する。長軸長270cm、短軸長235cm、最深250cmを測る。平面形状は検出面が正円形に近い楕円形、底面は隅丸方形を呈する。南西側に深さ40cm～50cmのピットが2基存在するが、シシ穴と一体のものかどうかは不明である。

(10) SD002 (第23～25図、図版10)

(10) SX001に平行して伸びる溝状遺構で、O09-71グリッドからO09-94グリッド付近まで検出され、(10) SX001j・m・nの各シシ穴に接している。南端部は確認できなかった。検出された部分の長さは約75m、幅は南東端が60cm、北西端が15cm、深さは南東端が25cm、北西端が5cmである。

(14) SK001 (第27・29図、図版10)

これより以下は、市野谷芋久保遺跡(14)で検出された遺構である。

(14) SK001は調査区北西端部に位置し、新市街地区の調査で検出された(12) SX001hに近接する。北西側は調査区外のため全容は不明であるが、径は140cm程度とみられ、最深は検出された範囲内で90cmを測る。平面形状は検出面、底面とも円形もしくは楕円形を呈するとみられる。

(14) SK002 (第27・29図)

(12) SX001gに近接する。長軸長190cm、短軸長160cm、最深135cmを測る。平面形状は検出面が楕円形、底面は隅丸方形を呈する。

(14) SK003 (第27・29図、図版9)

(12) SX001fに近接する。長軸長約380cm、短軸長約300cm、最深205cmを測る。平面形状は検出面が楕円形を呈するが北壁側に段状の張り出しが存在する。底面は狭く断面は漏斗状を呈する。

(14) SD001 (第27・29図、図版10)

(14) SK001の南側に位置する。全長約8m、最大幅約1.6mのL字状を呈する溝状遺構で、深さは30cm～50cm程度で、北端部が最も深く南に向かうに従って浅くなっているが、途中に段差が存在する。

(5) SX005 野馬土手に平行しているように見えるが、野馬土手との関連は不明である。

### 第3節 三輪野山野馬土手

#### 1 概要

調査区北部の大グリッド M08・M09・L09・K09・K10・J10・J11 に位置し、南西方向に伸びる野馬土手である。調査前は深さ約 50cm～1m の溝が総延長約 210m に渡って伸びているのが視認できたが、土手は J11 グリッド付近のごくわずかな範囲が残存しているのみであった。このうち南西側の約 40m は、三輪野山八幡前遺跡の範囲に当たっている。また、北東側は新市街地地区の市野谷芋久保遺跡(8)の調査区と(12)の調査区に伸びており、それぞれ(8)SD001・(12)SD001 という遺構名で報告されている。調査対象範囲では総延長約 420m の規模となるが、その南西側と北側は更に事業地外へ伸びている。調査時は特に遺構番号も付されない野馬土手として処理されていたが、第1章でも述べたとおり三輪野山野馬土手として周知されているため<sup>3)</sup>、ここではこの名称で報告する。

#### 2 野馬土手及び野馬堀(第30・31図、図版10・11)

本遺跡内の遺構番号としては、(5)SX001 という番号を付して整理にあたることにした。調査は幅 2m の確認トレンチを、5 次調査区内に 7 箇所、6 次調査区内に 1 箇所設定して調査を実施した。セクション図の濃いスクリーントーンは旧表土と考えられる土層を示す。

調査前の現況は、土手の高さを辛うじてとらえることができる程度で、野馬堀と考えられる窪地の状態が等高線図には反映されている。土手の残存高は、最大約 80cm、幅は最大約 6m で、本来の土手幅を捉えることは難しい。トレンチ内で検出された堀の深さは、旧表土上面から 50cm～180cm で、北東側は深く南西側は浅くなっている。これは周辺の地形が西側へと緩斜面になるためと思われる。堀の覆土は概してしまりが弱く自然堆積と思われる。北東側の土手はほぼ消失しているが、南西側は溝の南東に土手の盛土と思われる土層がわずかに観察された。堀は立川ロームを深く掘り込んでおり、掘った土が土手の構築に使用されたものと推測される。トレンチからは土手の構築時期を示すような遺物の出土はなかった。

新市街地地区土地区画整理事業地内の(8)SD001・(12)SD001 では溝の北西にも土手が続いているとされているが、当調査区内では土手の高まりはかなり失われていた状況と考えられる。大規模なシシ穴列を伴った(10)SX001 との交差部については、土手が古くから道で断ち切られていた可能性が高い。なお、本土手が続く西側の三輪野山八幡前遺跡の調査時には確認トレンチの調査を実施していないため、土手の詳細は不明である。

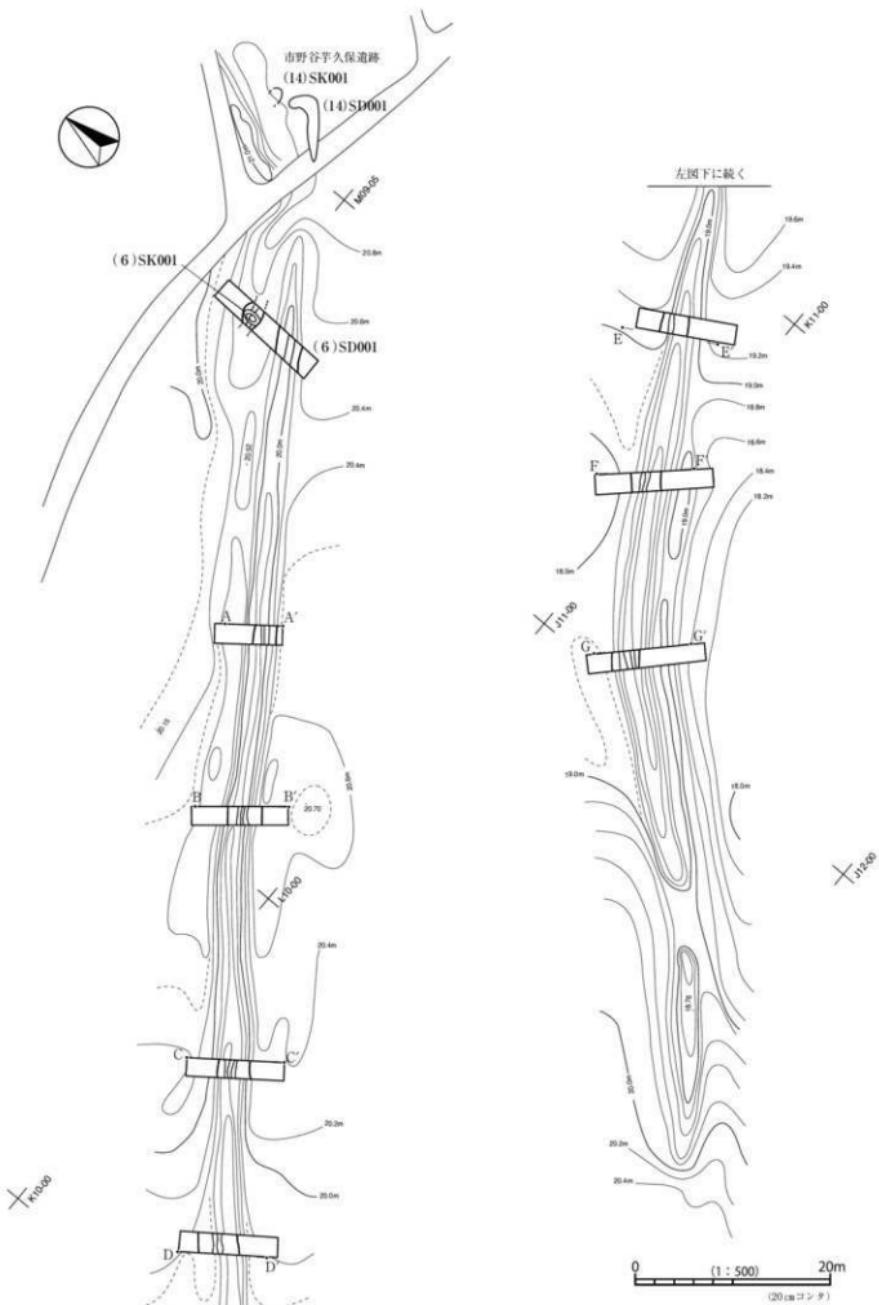
#### 注

1 参考として(12)SX001について既報告から転載する(第27図、図版11)。

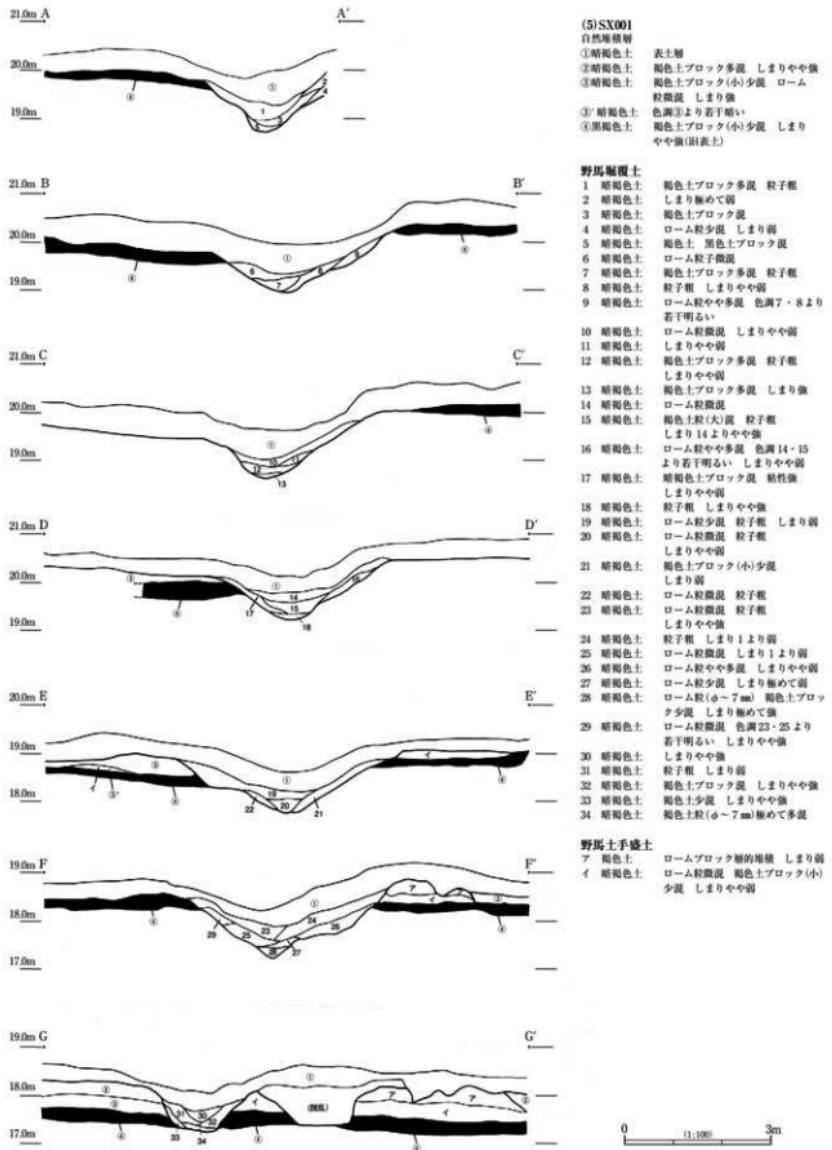
(12) SX001シシ穴列

調査区南西端の4IF(運動公園周辺地区内の調査グリッドでは M08) グリッドに位置する。(12)SD001 野馬堀・土手から直行して東側へ、直線状の溝状遺構を基準にして、7 基のシシ穴が並んで検出された。溝状遺構を(a)、シシ穴を東から西へ(b)から(h)の記号を付けて調査した。

シシ穴を相互に結ぶ溝状遺構の(a)は、長さ約 27.0m、幅 1.2m～2.1m、深さ約 50cm であった。シシ穴の形状や大きさはそれぞれやや異なる。(b)の形状は正方形に近い隅丸長方形で、長軸 3.80m、短軸 3.10m、深さ 29m、底面の長軸は 1.20m、短軸 0.50m で狭かった。壁面はやや緩い傾斜で、数段にわたって傾斜を変化させていた。(c)の形状は梢円形で長軸 2.80m、短軸 1.80m、深さ 22m、底面の長軸は 1.90m、短軸 0.70m だった。壁面は急な角度で直線状に傾斜していた。



第30図 三輪野山野馬土手平面図



第31図 三輪野山野馬土手断面図

(d) の形状は楕円形で長軸 390 m、短軸 290 m、深さ 25m。底面の長軸は 220 m、短軸 150 m で比較的広かった。壁面はやや緩い角度で傾斜し直線状だった。(e) の形状は楕円形で長軸 240m、短軸 170m、深さ 24m、底面の長軸は 120 m、短軸 130m だった。(d) と (e) は隣接し切り合い関係にある。土層断面を見ると (e) が古く、(d) が新しい。

(f) の形状は楕円形で長軸 390 m、短軸 280m、深さ 29m。底面の長軸は 140m、短軸 0.60m で狭かった。壁面はやや緩い角度で傾斜し直線状だった。(g) の形状は正方形に近い隅丸長方形で、長軸 220m、短軸 170m、深さ 22m、底面の長軸は 0.50m、短軸 0.40m で狭かった。壁面はやや急な角度で直線状に傾斜していた。(h) の形状は楕円形で、長軸 250 m、深さ 22 m、底面の長軸は 0.80 m、短軸 0.40m だった。壁面はやや急な角度で直線状に傾斜していた。

7 基のシシ穴は、長軸の方向が一様に北東 - 南西に向く以外、形状や規模に顕著な規格性を見受けられなかった。つまりシシ穴はほぼ同時に掘られたというよりも、個々別々に時期を越えて掘られた可能性が考えられる。

シシ穴列は、西北端から調査区外にも連続して並んでいるかどうかは不明である。南東については、本遺跡の南側に隣接する市野谷宮後遺跡で、本遺跡南端の部分の調査でシシ穴列が確認された。シシ穴列は、少なくとも本遺跡の南端にそって北西から南東へ伸びていたといえるだろう。

(12) SX001 の西北端で (12) SD001 野馬堀と交差する。両遺跡の切り合い関係を、B - B' の土層断面で確認した。それによると、(12) SX001 の土層の上に (12) SD001 の土層が堆積していたので、(12) SX001 が古く、(12) SD001 が新しいと解釈された。すなわち北西から南東へ横方向に伸びるシシ穴列の後に、北東から南西へ向かう野馬堀が造られた可能性がある。ただしシシ穴列の形成には、ある程度の時間幅が想定されるので、野馬堀との明確な新旧関係を断言するのは困難である。少量の遺物が出土した。

(出典：(公財)千葉県教育振興財団 2015「流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書7 -流山市市野谷平久保遺跡・市野谷中島遺跡(上層)・市野谷向山遺跡(上層)・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第1遺跡(上層)・十太夫第1遺跡・十太夫第3遺跡-」千葉県教育振興財団調査報告第779集)

2 人骨の部位については、渡辺 新氏よりご教示いただいた。

3 (財)千葉県教育振興財団編 2006「県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡」千葉県教育委員会

## 第6章 総括

### 第1節 繩文時代

繩文時代の本遺跡においては竪穴住居跡の検出はなく、4基の陥穴を含む10基の土坑が確認されたのみである。出土遺物も調査面積からすればごく少ない。今回報告する調査範囲が、南東からの緩い谷が入り込む緩斜面に位置していることから、繩文時代の長きにわたり居住地となることなく、主に狩猟の場であった可能性が高い。正式な報告は出ていないが、南南東約700mに位置する市野谷梶内第I遺跡では、前期から後期の竪穴住居跡が約20軒検出されており、南東約700mの市野谷向山遺跡では、中期後葉から後期前葉の竪穴住居跡が約30軒検出されている。西北西約700mに位置する三輪野山貝塚とその周辺では後・晩期を中心とした大規模な集落が構築されており、南東約1kmに位置する野々下貝塚では環状盛り土遣構を伴う後・晩期の大集落が形成されている。集落とそれ以外の領域とのコントラストが本遺跡を見る限りでははっきりしている。気候が温暖化した前期の黒浜式期は人口の増加が顕著とみられ、台地上の各所に居住域を拡大させ、多くの遺跡で数は少なくとも竪穴住居跡が検出される。中期以降の集落は奥東京湾へのアプローチを考慮した占地状況を示し、台地縁辺に継続的な居住が行われた結果、多数の遺構の集中、集積が見られ、大規模な貝塚も形成されている。本遺跡については前期以降の人口増加期においても、居住地としての条件を満たさなかったものと思われる。運動公園地区内の遺跡はほとんどが標高10m台であるのに対し、調査区東端部では標高が22mに及んでいる一方、新市街地地区土地区画整理事業地内の市野谷芋久保遺跡側は標高が低くなっている、本遺跡の位置が分水嶺にあたる地形的特徴が遺構の状況にも反映されていると考えられる。

### 第2節 古墳時代

古墳時代の遺構は、中期の竪穴住居跡が2軒検出されているのみである。運動公園地区内の遺跡では近年同時期の遺構が徐々に増加しつつある。隣接する市野谷梶内第I遺跡や市野谷向山遺跡でも当該時期の竪穴住居跡が検出されている。今回報告する市野谷宮後遺跡のほか、西側に隣接する市野谷芋久保遺跡、市野谷宮尻遺跡、市野谷入台遺跡が位置する台地は、江戸川と坂川の支谷の末端部に位置する広い一つの台地に所在するとみてもよい遺跡群で、先述したように地形的に分水嶺の位置にある。市野谷宮尻遺跡では古墳時代前期の集落が広く展開し、それに続く中期の集落が市野谷入台遺跡で展開しており、市野谷芋久保遺跡では古墳時代の遺構は皆無であった。今回検出された竪穴住居跡は、西側に展開する集落群と時期的にも関連が深いと考えられる。ここでは、既報告である北東約800mに位置する市野谷入台遺跡の成果<sup>11</sup>を参考に時期を検討してみたい。

2軒の竪穴から出土した土器の特徴をみると、高环は脚の裾部が強く屈曲し中彫れの形状を呈するものとラッパ状に開く形状のものが認められる。甕は胴部が球形を呈するものがほとんどで、台付甕は姿を消している。小型甕は口縁部が全体に開き気味であり、胴部も卵形を呈する。壺は複合口縁を持つものが認められる。小型壺(埴)については胴部が球形で、口縁部径が胴部径より大きいものがほとんどであり、胴部高が口縁部高より大きいものが主である。以上の点などから、5世紀初頭とされた市野谷入台II期に比定される。(5)SI004の小型甕2点(第17図17・18)や、(1)SI001の壺(第19図1)などは市野谷入台III期に

近い要素を含んでいると思われ、5世紀前葉に位置付けられると考えられる。

### 第3節 奈良時代

奈良時代の遺構は、竪穴住居跡1軒のみである。第1章でも述べたとおり、この時期は大日川（江戸川）沿いの台地上に大規模な集落が展開しており、対して内陸の当遺跡周辺は閑散とした状況である。周辺でも隣接する三輪野山八幡前遺跡のほか、市野谷中島遺跡でも竪穴住居跡が検出されているものの、軒数もわずかなものである。その期間も極めて短期間で終息していると考えられ、いわゆる集落とは言えない状況を呈している。

### 第4節 中・近世

第1章で述べた通り当遺跡周辺は近世になって徳川幕府により小金牧の一つ、上野牧が設置されるが<sup>12</sup>、当初は範囲が不明瞭だったようである。野馬土手が整備され始めるのは17世紀後半になってからで、牧地の新田開発が進められ、牧と耕作地との境界を明示する必要に迫られたからとみられる。三輪野山野馬土手がいつから存在したのかは不明であるが、少なくとも18世紀前半には構築されていたと考えられる。その後、享保期の新田開発で大規模な田畠への転換が進められ、奥地への開墾が進められるとともに害獣を防止する必要に迫られたことは想像に難くなく、シシ穴列の構築はそれに伴うものと考えられる。調査区東端部は周辺では最も標高が高い分水嶺となっている。南北の谷津頭をつなぐようにシシ穴列を配し、分水嶺を遮断することで、耕作地や村落への害獣の侵入を防いだものと考えられる。大規模なシシ穴を伴う事例は、新市街地地区土地区画整理事業地内の市野谷向山遺跡、市野谷立野遺跡でも確認されており<sup>13</sup>、同様に谷津頭を結ぶ分水嶺に列をなして構築され、分水嶺で動物の移動を遮断するような設計がなされていると推測される。

市野谷宮後遺跡、市野谷芋久保遺跡で確認されたシシ穴群の調査成果を合わせると、45基のシシ穴から構成されており、シシ穴の規模は、人がその中に落ちた場合、這い上がれないほどの規模と深さを有するものである。45基のシシ穴規模の平均値は、長軸が294cm、短軸が226cm、検出面から底面までの深さが241cm、平面形は楕円形を呈し、検出面から緩い弧を描いてほぼ直に落ちる壁で、底面はほぼ長方形の平らな面を呈している。最も規模が大きかったのが、(10) SX001rの長軸524cmで、最も深かったのが(10) SX001zの342cmである。同時に検出された溝との関係は、シシ穴の方が後から掘削されたものとみられ、1度に掘削されたものではなく、何度か掘りなおされたものであろうと推測される。

近世の牧に関連した遺構としては土手が主体ではあるものの、これら大型のシシ穴列が伴う事例についても、掘削の目的やその使用時期、地形的な制約の有無などについて詳しい検討が必要であろう。

#### 注

- (財)千葉県教育振興財團 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3－流山市市野谷入台遺跡－』千葉県教育振興財團調査報告第606集
- (財)千葉県教育振興財團編 2006『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡』千葉県教育委員会
- (公財)千葉県教育振興財團 2019『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書11－流山市市野谷向山遺跡、市野谷立野遺跡、西初石五丁目遺跡、市野谷駒木野馬土手、十太夫野馬土手－』千葉県教育振興財團調査報告第779集



写 真 図 版





遺跡周辺航空写真

図版2



((5)SK003)



((6)SK003)



((6)SK004)



((5)SK001)



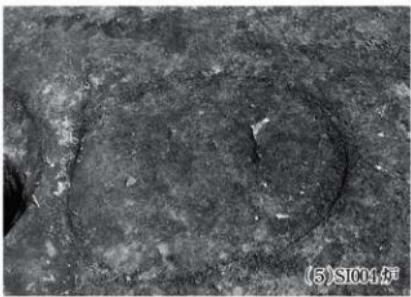
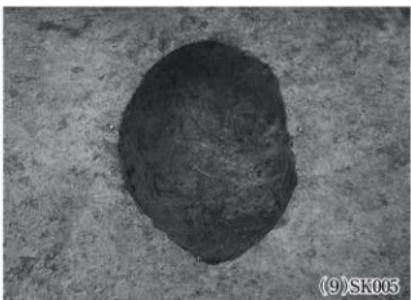
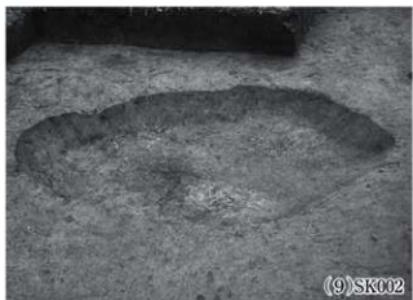
((9)SK004)



((5)SK005)



((6)SK002)





(5) SI002 遺物出土状況



(5) SI002 カマド



(5) SI002 全景



(6) SK001



(9) SK008



(9) SK009 - SD003



(9) SD001



(9) SD003



北東部近世遺構群(北西端部)

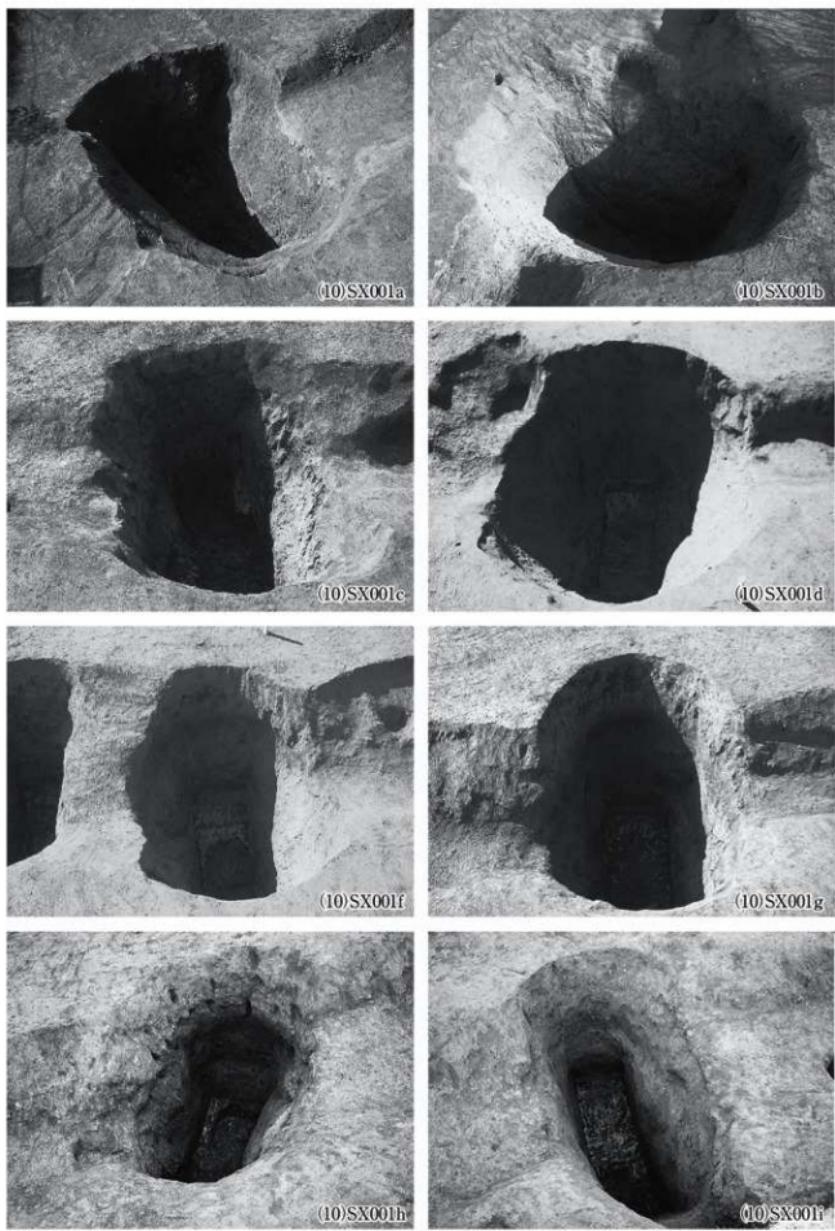


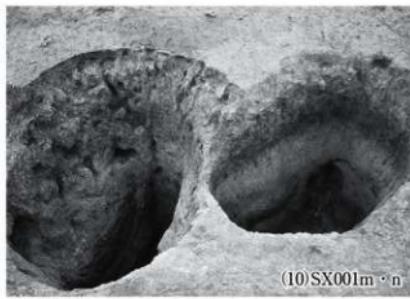
北東部近世遺構群(中央部)



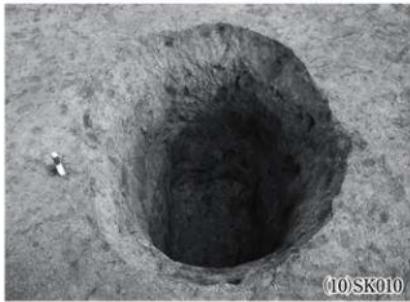
北東部近世遺構群(南東端部)

図版6











(9)SD006



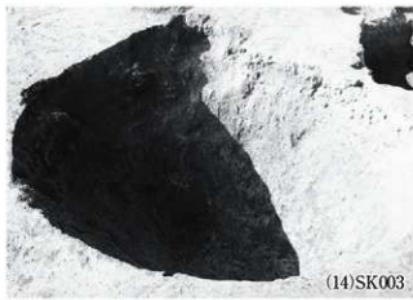
(10)SD002



市野谷芦久保遺跡(14)全量



(14)SK001



(14)SK003



(14)SD001



(14)SD001



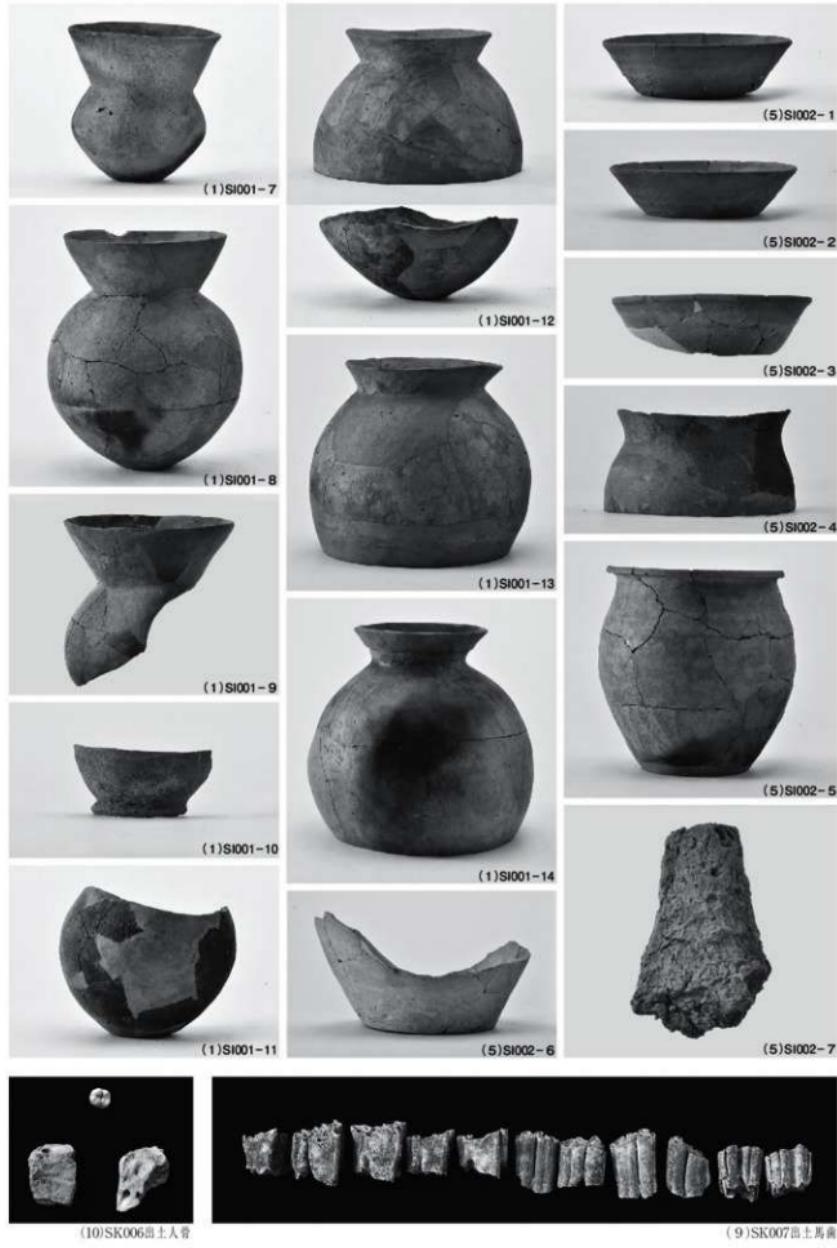
三輪町和田馬生手（東）から













## 報告書抄録

ふりがな	ながれやまうんどうこうえんしゅうへんちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書							
副書名	流山市市野谷宮後遺跡(北側)・三輪野山野馬土手・市野谷芋久保遺跡(14)(縄文時代以降編)							
卷次	8							
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第44集							
編著者名	安井健一 蜂屋孝之							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2023年3月1日							
所取遺跡名	所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
	市町村 字宮後206-13ほか	市町村 遺跡番号						
いちのやみやうしろ 市野谷宮後 (北側)	流山市市野谷 字宮後206-13ほか	12220	025	35度 51分 45秒	139度 55分 05秒	19971201～ 20091106	36,168m <sup>2</sup>	土地区画整理事業
みかのやは 三輪野山 野馬土手	流山市市野谷 字宮後203-1ほか							
いちのやいもくば 市野谷芋久保 (14)	流山市市野谷 字芋久保204-7	12220	021	35度 51分 50秒	139度 55分 08秒	20091103～ 20091113	125m <sup>2</sup>	
日本測地系								
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
市野谷宮後 (北側)	包藏地	縄文時代	土坑・ピット 4基 竪穴 2基		縄文土器(早期～晚期)、縄文時代石器(石鏡、石鏡未成品、打製石斧)			
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 2軒		土師器、土製品(土玉)、石製品(硯石)			
		奈良時代	竪穴住居跡 1軒		土師器、須恵器、土製品(支脚)			
	生産遺跡	近世	土坑 3基・溝状遺構 5条・ シシ穴 9基・シシ穴列 1条 (シシ27基を伴う)		人骨、馬骨	規模の大きなシシ穴が 多数検出された。		
三輪野山 野馬土手	生産遺跡	近世	野馬土手 1条					
市野谷芋久保 (14)	生産遺跡	近世	シシ穴 3基 溝状遺構 1条 野馬塚 1条					
要約	古墳時代中期前半の竪穴住居跡が2軒、奈良時代の竪穴住居跡が1軒検出された。近世の遺構では溝を伴う大型のシシ穴列が検出され注目される。近世の野馬土手に伴う野馬塚が確認された。							



千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第44集

流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書8

-流山市市野谷宮後遺跡(北側)・三輪野山野馬土手・  
市野谷茅久保遺跡(14)(縄文時代以降編)-

---

令和5年3月1日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町1-1

印 刷

株式会社白樺写真工芸

千葉市稲毛区山王町102-5

---

